

大館市文化財調査報告書第11集

川口十三森遺跡発掘調査報告書

2014 秋田県大館市教育委員会

大館市文化財調査報告書 第11集

川口十三森遺跡発掘調査報告書

2014

秋田県大館市教育委員会

大館市文化財調査報告書 第11集

川口十三森遺跡発掘調査報告書

2014

秋田県大館市教育委員会

例 言

- 1 本書は、秋田県大館市川口字十三森125番地他に所在する川口十三森遺跡（秋田県教育委員会登録番号204-4-166）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大館市道釈迦内松木立花線改良工事事業に伴い、大館市建設部の委託を受け、大館市教育委員会郷土博物館が実施した。調査と整理の体制、期間は第Ⅰ章に記した。
- 3 本書を作成するにあたり、遺構図等の整理は小倉康男、相馬佳津子が行った。また、土器の実測図の作成の一部は、(株)イビソクに委託した。野外調査の写真撮影は滝内亨、嶋影壮憲、室内での遺物撮影は、(株)ワールドプラン社に委託した。
- 4 本書は、滝内、整理作業員の協力を得て、嶋影が執筆、編集した。
- 5 整理作業には、虻川則子、虻川美樹、泉朝子、小倉康男、鎌田由美子、木村聡子、笹木沙織、佐藤夏代、相馬佳津子、高橋昭悦、田中節子、長崎順子、長崎とみ子、中嶋裕子、成田キミエ、山田勇治の協力を得た。
- 6 遺跡の自然科学に関する分析はパリノ・サーヴェイ(株)に依頼し、報文を第Ⅲ章に掲載した。
- 7 石材鑑定は、(株)アースサイエンスに依頼し、報文を第Ⅲ章に掲載した。
- 8 本調査で出土した遺物ならびに記録類は、大館市教育委員会郷土博物館にて保管する。
- 9 調査報告については『平成23年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』に概要報告したが、本書の記述をもって正式な報告とする。上記『資料』等と本書に齟齬のある点は、本書の記述をとるものとする。
- 10 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の機関・個人より多大な御指導・御協力をいただいた(敬称略、五十音順)。

青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所、大館市建設部土木課

五十嵐一治、磯村 亨、伊藤武士、宇田川浩一、榎本剛治、岡田康博、小笠原雅行、熊谷常正、小林達雄、小林 克、斉藤慶吏、佐藤真弓、新海和広、鷹嘴勇二、高橋 学、茅野嘉雄、富樫泰時、長崎弘美、福田裕二、細田昌史、丸岡信雄、三浦貴子、吉川耕太郎

凡 例

1 本書遺構図における各基準は、下記のとおりである。なおその都度スケール、方位、凡例等を示す。

(1) 略記号・縮尺

遺構位置図		1 : 200
住居跡・竪穴建物跡	S I	1 : 40・1 : 80
掘立柱建物跡	S B	1 : 40
土坑	S K	1 : 20・1 : 40
柱穴列	S A	1 : 40
土器埋設遺構	S J	1 : 30
焼土	S L	1 : 40
柱穴・柱穴様ピット	S P	1 : 40
集石	S S	1 : 40

(2) 図の方位

真北方向が図面天方向に合致する。例外についてはその都度方位を示す。

(3) 遺構図等の標高

遺構平面図・断面図等の標高値は海拔高度による。単位はメートル。

3 遺物の記号および実測図・写真図版の縮尺は、下記のとおりである。

(1) 略記号 土器 P 石器 S 土製品 C 玉・装身具(石製品) A 呪具 M

(2) 縮 尺 土器実測図 1 : 4 (但し土師器は1 : 3)
拓影図・礫石器 1 : 3 (一部を除く)
剥片石器・土製品・装身具・呪具 1 : 2
剥片石器・土製品・装身具・呪具写真 約1 : 2
土器破片・礫石器写真 約1 : 3
復元土器写真 任 意

4 一覧表における遺構の規模のうち、確認面・底面の項については長径×短径で表した。また、時期の項は、土器の分類番号で表した。

5 本書における遺物の分類基準の概要は第I章5(3)に記した。4頁を参照されたい。

目 次

例言	i
凡例	ii
目次	iii
挿図目次	iv
表目次	v
図版目次	v
第 I 章 調査の概要	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査要項	1
3. 調査の経過	2
4. 遺跡の位置と環境	2
5. 調査の方法	2
(1) 発掘区の設定	2
(2) 調査の方法	2
(3) 遺物の分類	4
第 II 章 調査の記録	
1. 層序	5
2. 遺構と出土遺物	8
(1) 住居跡・竪穴建物跡	8
(2) 掘立柱建物跡	32
(3) 土坑	32
(4) その他の遺構	81
3. 包含層出土遺物	89
(1) 土器	89
(2) 石器	93
(3) その他の遺物	103
第 III 章 自然科学分析	
1. 川口十三森遺跡の自然科学分析	104
(1) 火山灰分析	104
(2) 放射性炭素年代測定	106
(3) ガラス玉の分析	108
2. 岩石肉眼鑑定	113
(1) 石質同定結果	113
(2) まとめと考察	113
第 IV 章 まとめ	
1. 遺跡について	120
2. 遺構について	120
3. 遺物について	122
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	vi	第43図	土坑27出土遺物	53
第2図	調査地区と周辺の地形	3	第44図	土坑29・31	54
第3図	土層柱状図	5	第45図	土坑32・33	55
第4図	遺構配置図(1)	6	第46図	土坑34と出土遺物	57
第5図	遺構配置図(2)	7	第47図	土坑37	58
第6図	住居跡1	9	第48図	土坑42と出土遺物	59
第7図	住居跡1および周辺出土遺物	10	第49図	土坑43と出土遺物	61
第8図	竪穴建物跡2	11	第50図	土坑49と出土遺物	62
第9図	竪穴建物跡2出土遺物(1)	12	第51図	土坑50・51と出土遺物	63
第10図	竪穴建物跡2出土遺物(2)	13	第52図	土坑52	64
第11図	竪穴建物跡30(1)	15	第53図	土坑53と出土遺物	66
第12図	竪穴建物跡30(2)	16	第54図	土坑56・57と出土遺物	67
第13図	竪穴建物跡30(3)	17	第55図	土坑58	68
第14図	竪穴建物跡30出土遺物(1)	18	第56図	土坑59	69
第15図	竪穴建物跡30出土遺物(2)	19	第57図	土坑60・62	71
第16図	竪穴建物跡30出土遺物(3)	20	第58図	土坑63・64	72
第17図	竪穴建物跡30出土遺物(4)	21	第59図	土坑65	73
第18図	竪穴建物跡30出土遺物(5)	22	第60図	土坑66と出土遺物	75
第19図	住居跡38と出土遺物	23	第61図	土坑67	76
第20図	竪穴建物跡45	24	第62図	土坑93	77
第21図	竪穴建物跡45と出土遺物	25	第63図	土坑93出土遺物	78
第22図	住居跡47	26	第64図	土坑95と出土遺物(1)	79
第23図	住居跡47出土遺物	27	第65図	土坑95出土遺物(2)	80
第24図	住居跡55	28	第66図	土坑110	82
第25図	竪穴住居跡21	30	第67図	土坑44	83
第26図	竪穴住居跡21と出土遺物	31	第68図	柱穴列18・92	84
第27図	掘立柱建物跡40	33	第69図	土器埋設遺構35・36・46と出土遺物	86
第28図	掘立柱建物跡41	34	第70図	焼土8・94・112、柱穴97・98と出土遺物、集石39	87
第29図	土坑3と出土遺物	35	第71図	包含層出土土器(1)	90
第30図	土坑4・5	36	第72図	包含層出土土器(2)	91
第31図	土坑6と出土遺物	38	第73図	包含層出土土器(3)	92
第32図	土坑7	39	第74図	包含層出土石器(1)	94
第33図	土坑7出土遺物	40	第75図	包含層出土石器(2)	95
第34図	土坑9と出土遺物	42	第76図	包含層出土石器(3)	96
第35図	土坑10・11と出土遺物	43	第77図	包含層出土石器(4)	97
第36図	土坑12	44	第78図	包含層出土石器(5)	98
第37図	土坑13と出土遺物	45	第79図	包含層出土石器(6)	99
第38図	土坑19と出土遺物(1)	47	第80図	包含層出土石器(7)	100
第39図	土坑19出土遺物(2)	48	第81図	包含層出土石器(8)	101
第40図	土坑20・24	49	第82図	包含層出土石器(9)	102
第41図	土坑25・26	50			
第42図	土坑27・28	52			

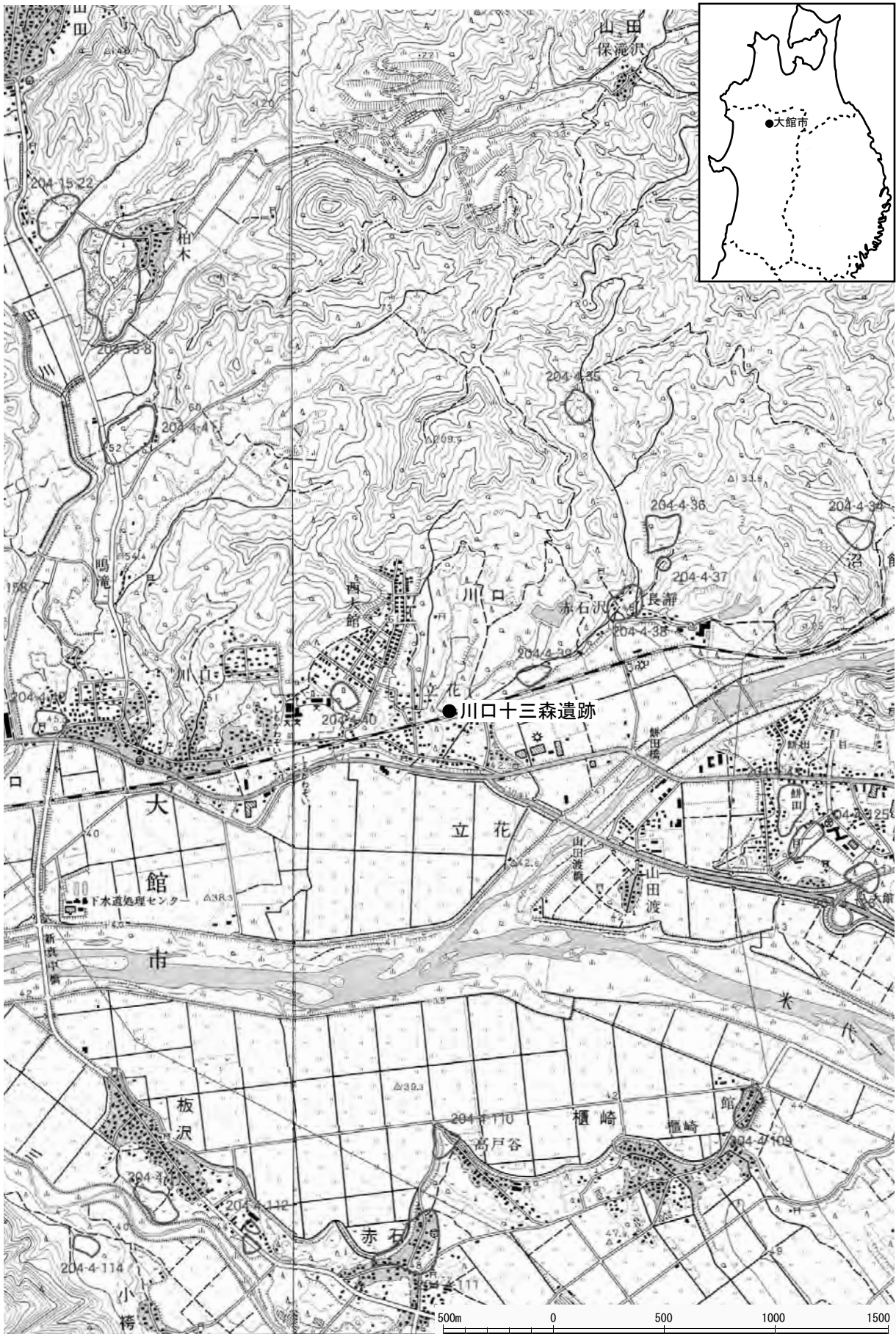
第83図	包含層出土土製品・装身具・呪具	103	第87図	土器・ガラス玉	112
第84図	火山ガラス・軽石の屈折率	105	第88図	各遺跡の同定された石材の割合 ..	119
第85図	ガラス玉の蛍光X線スペクトル ..	109	第89図	土坑の長径と深さの相関図	121
第86図	テフラ	111	第90図	包含層土器時期別分布図	123
			第91図	時期別遺構分布図	124

表 目 次

第1表	テフラ分析結果	105	第11表	種別石器一覧	125
第2表	放射性炭素年代測定および 暦年較正結果	107	第12表	住居跡・竪穴建物跡一覧	125
第3表	測定条件	108	第13表	住居跡・竪穴建物跡遺物一覧	126
第4表	蛍光X線分析結果(化学組成)	109	第14表	掘立柱建物跡一覧	126
第5表	同定された石質と鑑定個数の割合	113	第15表	土坑一覧	127
第6表	川口十三森遺跡掲載石器・石製品一覧	114	第16表	土坑遺物一覧	128
第7表	中茂屋遺跡石質鑑定結果	118	第17表	柱穴列・焼土・柱穴様ピット・集石一覧	128
第8表	種別遺構一覧	125	第18表	柱穴様ピット遺物一覧	131
第9表	遺物一覧	125	第19表	土器埋設遺構遺物一覧	131
第10表	種別土器一覧	125	第20表	包含層出土遺物一覧	132
			第21表	掲載土器観察表	134
			第22表	掲載土製品・装身具・呪具一覧	144

図 版 目 次

図版1	遺跡近景・調査風景・土層断面	図版19	竪穴建物跡30出土遺物(2)
図版2	住居跡1・竪穴建物跡2	図版20	竪穴建物跡30出土遺物(3)
図版3	竪穴建物跡30	図版21	住居跡38・竪穴建物跡45・住居跡47・ 竪穴住居跡21出土遺物
図版4	住居跡38・竪穴建物跡45	図版22	土坑3・6・7出土遺物
図版5	住居跡47・55	図版23	土坑9・10・11・13出土遺物
図版6	竪穴住居跡21	図版24	土坑19・27・34・42出土遺物
図版7	掘立柱建物跡40・41、土坑3・4・5・6	図版25	土坑43・49・50・53・56・66出土遺物
図版8	土坑7・9	図版26	土坑93・95出土遺物(1)
図版9	土坑10・11・12・13・19・20	図版27	土坑95出土遺物(2)
図版10	土坑24・25・26・27・28・29・31・32	図版28	土器埋設遺構35・36・46・柱穴97・98 出土遺物
図版11	土坑33・34・37・42・43・49	図版29	包含層出土遺物(1)
図版12	土坑50・51・52・53・56・57	図版30	包含層出土遺物(2)
図版13	土坑58・59・60・62・63・64・65・66	図版31	包含層出土遺物(3)
図版14	土坑67・93・95・110・44	図版32	包含層出土遺物(4)
図版15	柱穴列18・92、柱掘方89・90・91、 土器埋設遺構35・36・46	図版33	包含層出土遺物(5)
図版16	焼土8・94・112、柱穴97・98、集石39	図版34	包含層出土遺物(6)
図版17	住居跡1・竪穴建物跡2出土遺物	図版35	包含層出土遺物(7)
図版18	竪穴建物跡2・30出土遺物(1)		



第1図 遺跡の位置 (1:25,000)

第 I 章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

大館市は、昭和30年代の後半からの車社会の到来を機に交通量が増加している。大館地区と田代地区のほぼ中間にあたる川口地区においても同様に、車の量は増加している。これに伴い、既存道路の改良・拡幅が急務となっており、市道釈迦内松木立花線改良工事が計画された。この開発行為に対処し、遺跡の有無を確認するために大館市教育委員会（市教委）では、平成21年に分布調査を行った。この結果、川口字十三森地内で縄文時代後期の集落を構成するとみられる住居跡などの遺構および遺物が発見されたため、川口十三森遺跡（秋田県教育委員会登録番号204-4-166）として登録した（「大館市文化財調査報告書第4集」2011）。市教委では、事業者（市建設部）に対し、遺跡の内容とともに、文化財保護法の規定に基づく土木工事等の際の手続きについて通知した。その後、事業者より当該地における市道建設に伴う発掘調査の依頼があり、今回の調査に至った。市教委は、平成21年度に実施中の茂木屋敷跡の発掘調査が翌年度まで延長となったため、工事計画・内容と発掘調査の調整を行った結果、市道建設敷地1,423㎡について、平成23年度に事業者の費用負担を受け、発掘調査を実施することとした。

事業者である大館市長は、平成23年5月12日付けで市教委を経由して県教育委員会宛に土木工事のための発掘の通知書を提出し、平成23年5月27日付け教生—443にて同教育委員会教育長から事前の発掘調査が必要である旨の回答がなされた。このため、大館市教育委員会教育長より県教育委員会教育長宛てに平成23年5月24日付け23郷博発第6号にて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。

2. 調査要項

調査期間：野外調査 平成23年6月17日～11月16日

整理作業 平成23年11月17日～平成26年3月31日

調査面積：1,423㎡

調査体制

調査主体者	教 育 長	高橋 善之
	教 育 次 長	大友 隆彦（平成24年3月31日まで）
	教 育 次 長	石井 隆（平成24年4月1日より）
	生涯学習課長	名村 伸一（平成24年3月31日まで）
	生涯学習課長	齊藤 博樹（平成24年4月1日より平成25年3月31日まで）
	生涯学習課長	保坂美保子（平成25年4月1日より）
調査事務局	郷土博物館長	松田 誠行（平成24年3月31日まで）
	郷土博物館長	若宮 司（平成24年4月1日より）
	文化財保護係長	岸 匡也
	主 任	滝内 亨（担当者）（平成24年4月1日より主査。平成25年3月31日まで）
	主 任 主 事	嶋影 壮憲（担当者）（平成24年4月1日より主任）

3. 調査の経過

試掘調査の結果、竪穴住居跡が2軒、フラスコ状ピットが複数基確認された。竪穴住居跡は出土遺物より判断すると縄文後期と推定できた。環境整備・表土除去に充てられる第1週を除き、雨天日・撤収を考慮して調査期間は11週と考えた。調査区(1,423㎡)は89グリッド(4m×4m)に相当するので、8grid/週(1.6grid/日)の進捗が必要とされた。

実際は、竪穴住居の検出・図化、中央部分の土量の多さに手間取り第3週目に入って、4grid/3週の遅れが生じた。また、7月に入ると、担当職員のうち1名が7月下旬から開催の特別展の準備に追われ不在となる日が多く、8月後半から3週間は別の地区の試掘調査のため不在となり、調査職員1名体制となる期間が多く続いた。そのため調査は大幅に遅れ、9月には大館市建設部土木課改良係に対して進捗状況を説明し、調査期間の延長について協議し了解を得た。結果的には当初予定期間より7週間延長で終了した。

遺跡見学会は、9月4日午前10時から開催し、約70名の参加者が訪れた。

4. 遺跡の位置と環境

本遺跡は、経緯度が北緯40° 16′ 41″、東経140° 30′ 18″にあたる。大館市は、盆地とそれを取り囲む山地からなり、丘陵の先端部には大小様々な沢が入り込んでいる。沢沿いの丘陵や台地には多くの遺跡が分布し、本遺跡もその一例で、川口地区と立花地区を区切る川の左岸に広がっている。遺跡の範囲は推定で最長約120m、最大幅約70m、面積約4,200㎡に及ぶものである。また、本遺跡は縄文時代早期から奈良時代に至る土坑や住居跡の遺構が稠密な集落跡の複合遺跡でもある。今回の調査区は、川口字十三森129番地他に所在し、川口十三森遺跡のほぼ中央に位置し、前述の川と直交する形で接する。既に畑地として使用されており、度重なる耕作等で、北東部と西部が削平を受けローム面まで壊されていた。ただ、南東部は、比較的良好な状態で保存されていた。

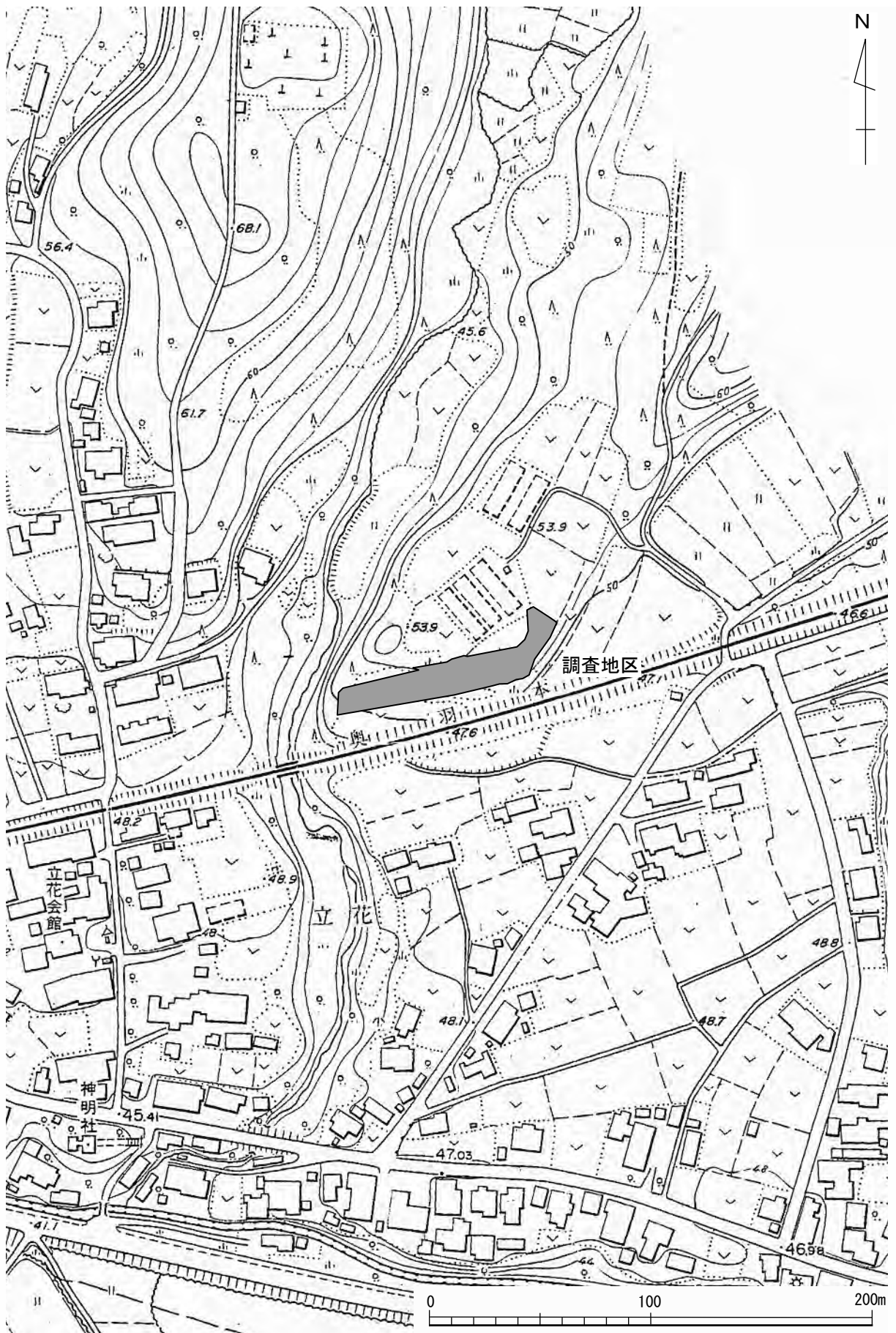
なお、遺跡周辺の歴史的環境については、『根下戸道下遺跡(第2次)―一般国道7号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ―』(秋田県埋蔵文化財センター編2007)等に詳述されており、そちらを参照されたい。

5. 調査の方法

(1) 発掘区の設定

設定は、世界測地系平面直角座標を基準とし、遺跡全体に4m方眼のメッシュをかけた。そして南北軸をX軸、直交する方向をY軸とした。座標の原点(AA-0)は、遺跡の南東方向にあり、X軸方向は真北である。また、調査記録上この基本区を4等分した小発掘区を設定し、時計廻りにa~dとした。発掘区の呼称は、区南東隅の杭の座標(Y-X)で表示した。グリッドの設定および杭の打設、コンター図の作成は高橋測量有限会社に委託した。

(2) 調査の方法



第2図 調査地区と周辺の地形 (1:2,500)

調査範囲について重機を用いて耕作土層・客土の除去を行った。その後、調査範囲全域を鋤簾・移植ゴテにより清掃し、手掘りによる遺構・遺物の分布を確認し、調査を行った。

遺物は遺構毎、層位毎、調査区の遺物は、発掘区および小発掘区単位でかつ層位毎に取り上げ記録した。前述のとおり、調査区南東部は遺物包含層が良好に遺存しており、比較的出土量は多かった。他の地区は削平により遺物包含層が失われており、遺物の出土量は少ない。なお、遺物の位置情報は4m方眼杭を基準として水系遣り方から手測りし、水準測量は自動レベルと1mm目盛りの箱尺を使用し、作図、記録した。

遺構平面図や断面図等の測量図にあたっては、前出の方法を主として一部トータルステーションシステムを使用して、実測図を作成した。

報告書作成時の印刷原稿の作成にあたっては、アナログ情報と出力したデジタル情報を合成して素図を作成し、デジタルトレースしたものを使用した。

整理作業については、水洗、分類、注記の一次整理作業後、各種記録類を作成した。

(3) 遺物の分類

遺物の分類にあたっては、土器は、縄文早期の貝殻文系土器群（1群）、早期後葉～前期前葉の土器群（2群）、前期後半～中期前半にかけての筒型土器群（3群）、中期後半の土器群（4群）、後期～晩期の土器群（5群）、弥生時代・続縄文期の土器群（6群）、土師器（7群）、陶磁器（8群）に大別している。

1群は貝殻によって施文された文様を主体的にもつ土器。2群は胎土に多量の繊維や小礫を含み、多くは尖底をなす縄文時代早期後葉～前期前葉に編年される土器。いわゆる早稲田5類・同6類、表館式に代表される土器である。1類 早期後葉 2類 早期末 3類 前期初頭に細分される。

3群は円筒土器群で、次の1～9類に細分される。本遺跡では、3・4類が出土している。

1類 円筒下層a式土器、2類 同b式土器、3類 同c式土器、4類 同d式土器、5類 円筒上層a式土器、6類 同b式土器、7類 同c式土器、8類 同d式土器、9類 同e式土器。

5群は縄文時代後・晩期に編年される全ての土器。本群は次の1～9類に類別される。本遺跡ではおもに1類が出土している。

1類 2類より古く、大木10式並行土器群の直後に編年される土器を想定。いわゆる蛭沢式に代表される土器を考えている。2類 後期前葉の土器 十腰内I式。3類 後期中葉の土器 十腰内II～IV群などの磨消縄文が多用される土器。4類 後期後葉の土器。5類 後期末・晩期初頭の土器。6類 晩期前半の土器 大洞B～C₁式土器。7類 晩期後半、大洞C₂・A・A'式など。

6群土器は弥生・続縄文期に属する土器群。今回の調査では弥生土器はごくわずかである。また、最終末の後北C₂・D式に相当する土器が数点出土したが、細分はしていない。

石器類は、人為的な痕跡が認められるものを含めた石器群（1群）、剥片類（2群）、石核類（3群）、礫類（4群）に大別し、1群はさらに機能上の特徴や形態的特徴などから8類に細分している。細分は以下のとおりである。

1類 ポイント類、2類 石錐類、3類 ナイフ・スクレイパー類、4類 部分的な刃部をもつ剥片類、5類 石斧類、6類 擦石・敲石類、7類 砥石・石皿・台石類、8類 石錘

なお、石器の石質についてはアースサイエンス株式会社に肉眼鑑定業務を委託した。

このほか、土製品、装身具等とみられる石製品や有孔石、特殊なものとしてガラス玉がある。

第Ⅱ章 調査の記録

1. 層序

本遺跡の層序は、十和田八戸火砕流堆積物層を基盤とし、その上部に黒色腐植土が堆積している。ただ、竪穴住居の窪みや調査区南西端の一部には、T o - aが残り、調査区南西部からは、十和田火山噴火に伴うシラス泥流による堆積層が深いところで約1.6mも堆積していた。

I層 表土。耕作土。人為的に攪乱された層。北東部と南西部では、IV層上面まで及んでいる。

II層 黒色（10Y R1.7/1）の色調を呈する腐植土層で、遺物包含層である。調査区南東～中央部に遺存している。良好な箇所では40cm、平均15～20cm程の層厚であるが、北東部と南西部は耕作等により消失している。T o - a火山灰層が微量混入する。本層は調査区西部の一部では、土質や色調などからさらに2層に大別される。

II a層 黒色（10Y R1.7/1）～黒褐色（10Y R1/2）の色調の土層。

II b層 黒色（10Y R1.7/1）～黒褐色（10Y R1/2）の色調の土層で、僅かにII a層より明るい。

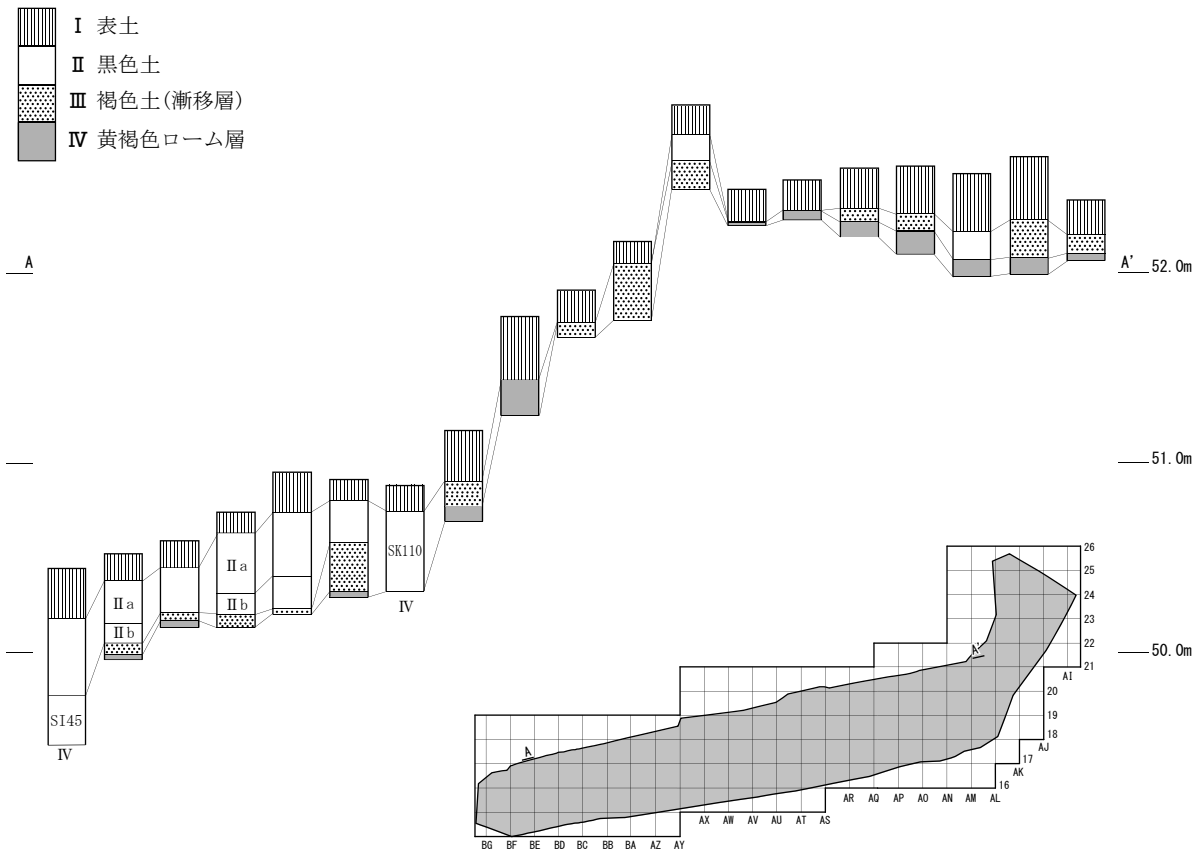
III層 黒褐色土（10Y R2/2）。いわゆる漸移層で、平均15cm程の層厚。少量の遺物が出土している。

IV層 褐色ローム層（10Y R4/4）。風化したローム層で、遺跡の基盤となる層。

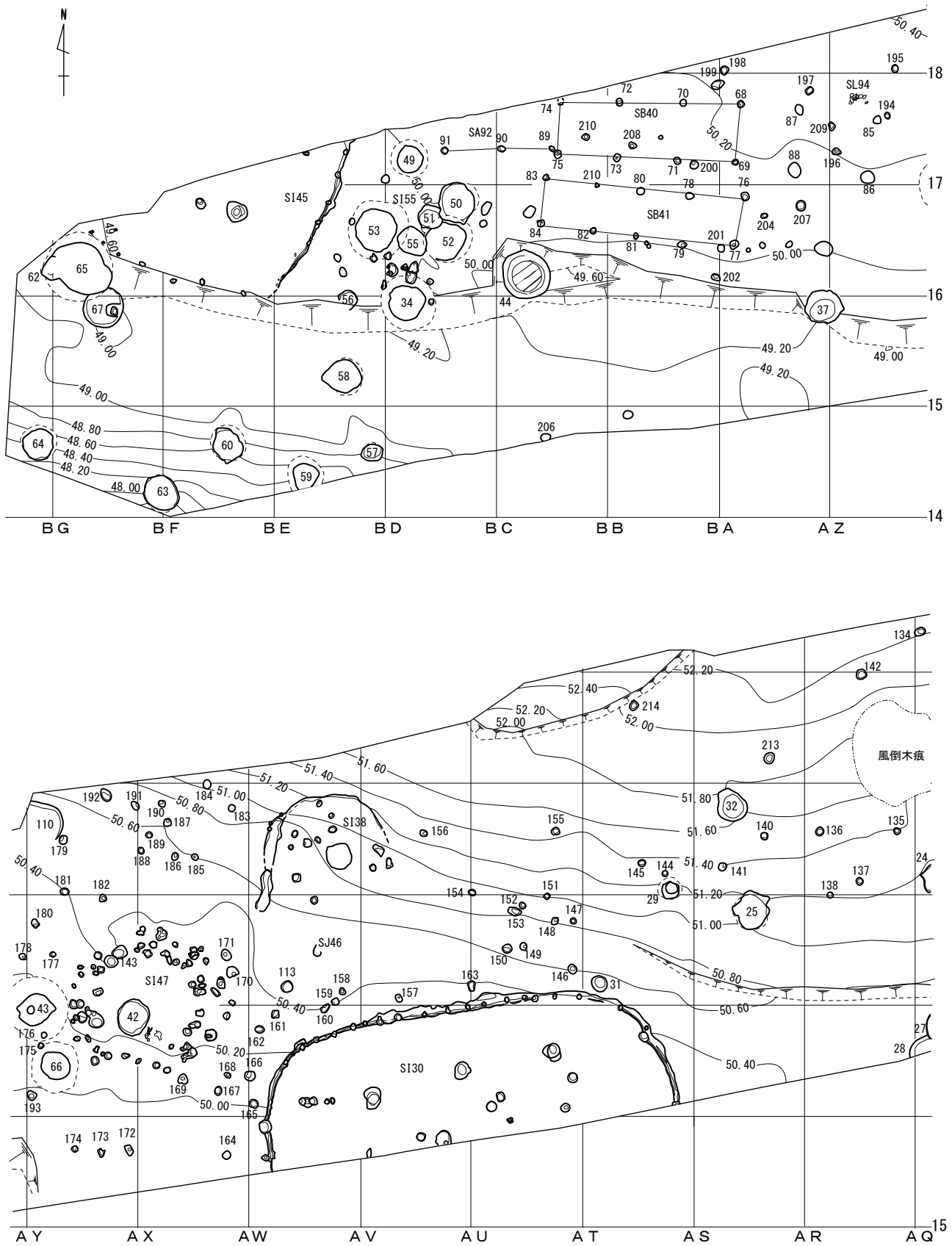
V層 暗褐色砂礫層（10Y R3/4）。

VI層 明黄褐色ローム層（10Y R）。シルト質のローム層。

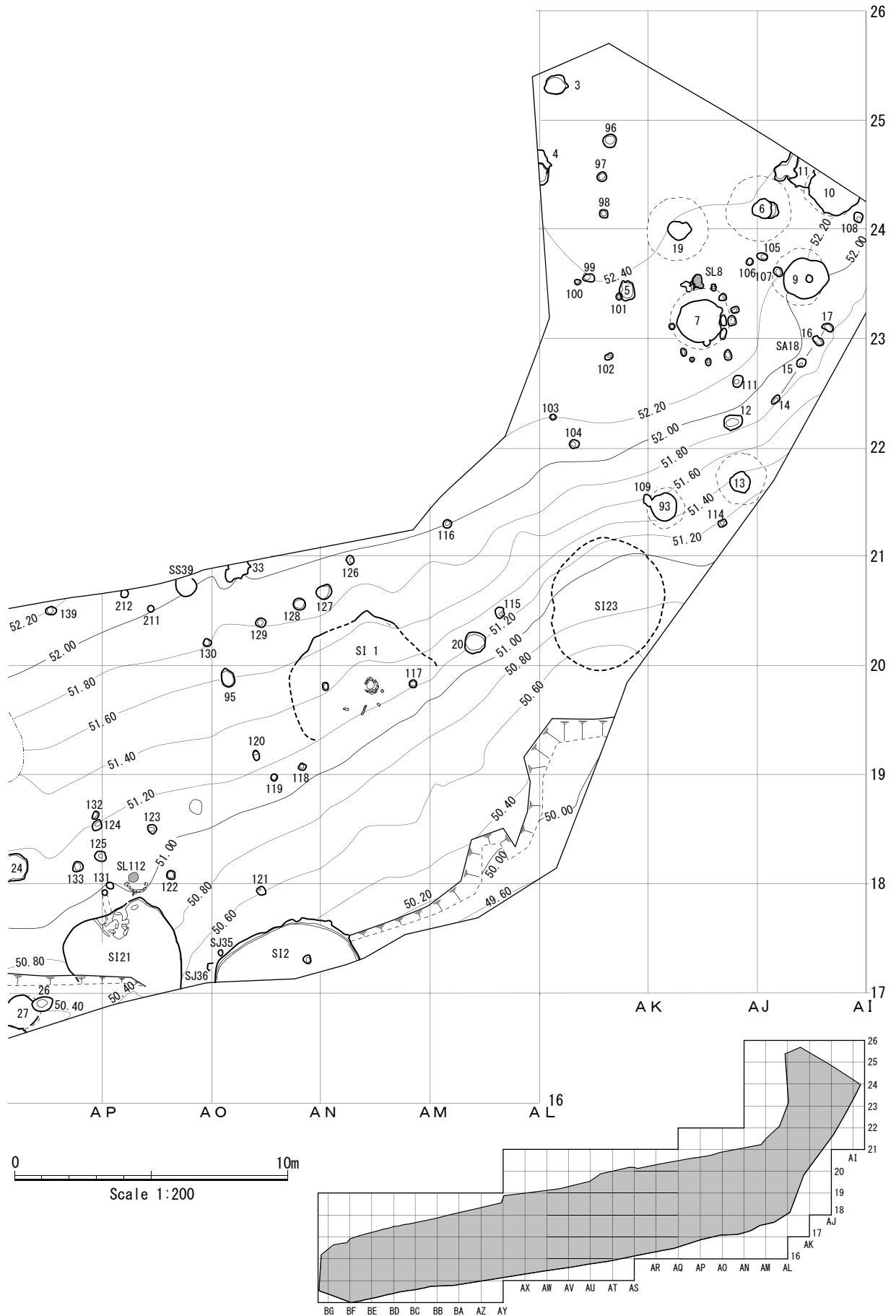
遺構は、II層から掘り込まれたものと思われるが、削平されている箇所は、III層内からIV層上面にかけて検出されている。



第3図 土層柱状図



第4図 遺構配置図(1) (1:200)



第5図 遺構配置図(2)

2. 遺構と出土遺物

調査区からは、住居跡（竪穴建物跡を含む）8軒、掘立柱建物跡2棟、土坑45基、柱穴列2条、土器埋設遺構3基、焼土3ヵ所、柱穴・柱穴様ピット121基、集石1基を検出した。標高は、遺跡西側の沢付近で約48.0m、最も高い北側の畑地で約52.4m、比高差約4.4m程である。遺物は、縄文時代早期から近代までのものが出土しており、4割以上が縄文時代前期後葉、4割弱が縄文時代後期初頭の遺物である。

(1) 住居跡・竪穴建物跡

調査区内からは、縄文時代前期後葉に位置づけられる竪穴住居（建物）跡を3軒、同後期初頭に位置づけられる住居跡を4軒、奈良時代に位置づけられる住居跡を1軒検出した。

住居跡1（S I 1）（第6・7図）

位置 調査区の東部AM・AN-19・20区に位置する。

遺構 平成21年度の試掘調査時に石組炉を検出した。掘り込みが浅く、住居の明確なプランは確認できなかったが、石組炉が存在していることから、住居跡とした。規模は、推定で4m以上の住居跡と思われる。石組炉の礎は、西側の一部を除き、径50cm程の範囲に、ほぼ間断なく配されている。柱穴は小ピットがいくつか確認されているが、規則的な配列等は認められない。

遺物 遺構埋土は認識できず、石組炉検出面の周辺から5群1類土器の弥栄平(2)式土器がややまとまって出土しており、本遺構出土遺物と判断した。出土遺物は5群土器13点である。また、遺構部分と推測したエリア内からは5群土器が21点出土した。これらは、主に埋土と考えられる土層中から出土したもので、住居に明確に伴う遺物はない。

第7図1～5は5群1類土器。1～3は胴部。1・2は幅3mm程の単節のLR斜行縄文が施されている。また、その上に幅5mm程の沈線文が施されている。4は底部破片。底縁は張り出さず直立気味に立ち上がる。第7図5は遺構と推測されるエリア内からまとまって出土した5群土器である。地文はRL斜行縄文である。

時期等 本住居跡は、明確な柱穴が認められないなど、全体の構造等に不明な点が多いものの、石組炉が認められることから最終的に住居跡と判断した。

時期は土器片の主体が5群1類土器であることから、当該期の住居跡である可能性が高い。

竪穴建物跡2（S I 2）（第8～10図）

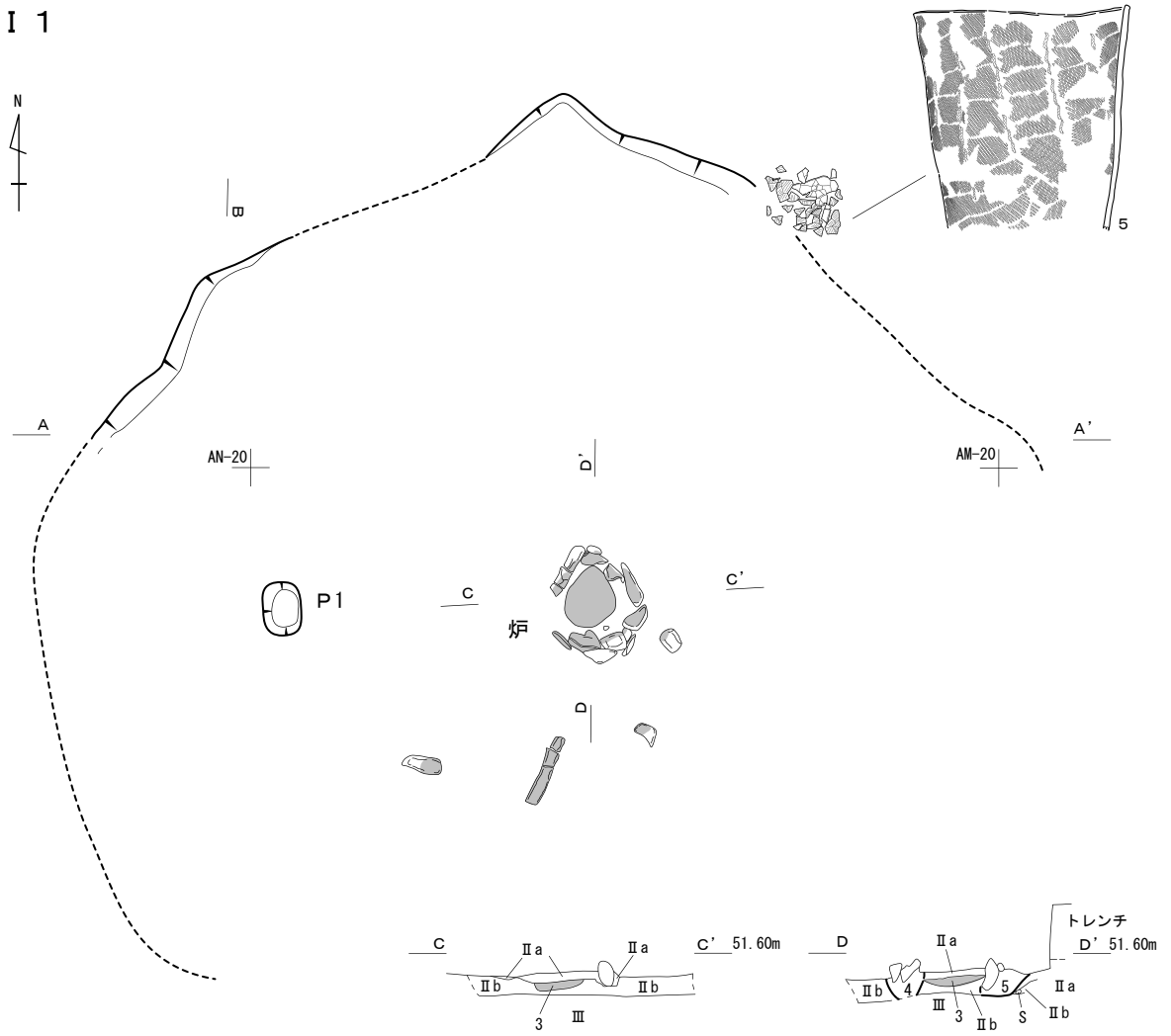
位置 調査区南東部のAM・AN-17区に位置し、竪穴の南部大半は調査区外に拡がる。

遺構 竪穴の構築は、IV層への掘り込みが最大で60cmと深く、竪穴内から柱穴が1基検出されている。また、規模は竪穴の一部を調査したのみで不明であるが、形状は円形に近いものと思われる。床はほぼ平らで、壁際に周溝がめぐる。炉などの施設は検出されておらず、柱穴の配列は不明である。

遺物 埋土中から2群が3点、3群41点の土器片と石匙1点、削器2点、加工痕が認められる頁岩の剥片（4類）5点、剥片が35点、床面から削器1点の計92点が出土した。

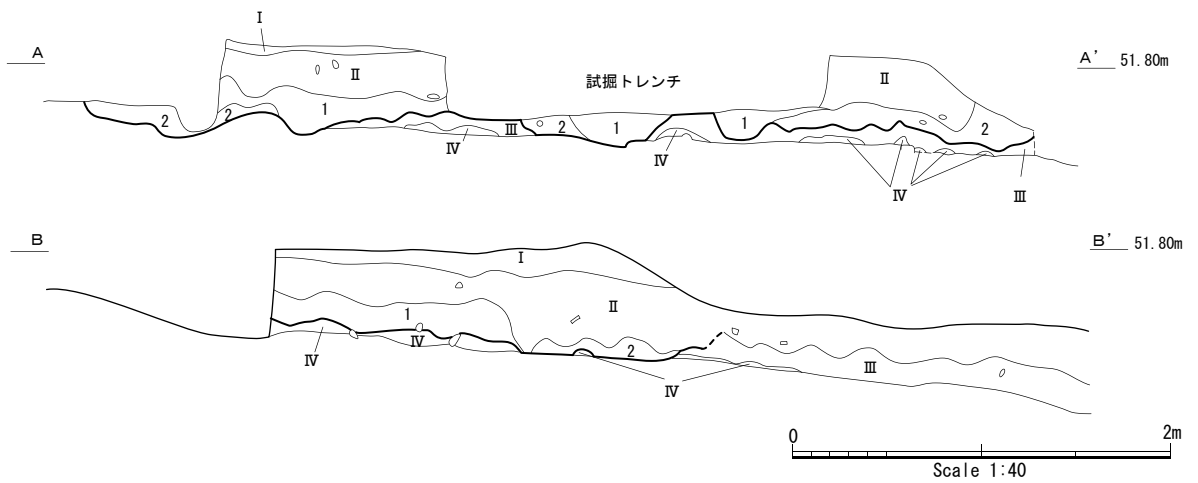
第9図1～4・7～10は、いずれも3群4類の円筒下層d式相当で、埋土1～2層からの出土である。1は口径17cm、底径12cm、器高30cm程で、口径に比し器高が高い細身の円筒土器である。口縁

S I 1



炉跡

- 3 7.5YR4/4褐色 IIIが被熱。固く締まる。粘性弱。
- 4 10YR1.7/1黒色 IIb。締まり有り。粘性弱。
- 5 10YR2/3黒褐色 固く締まる。粘性なし。IIが被熱か。



S I 1

- 1 10YR2/1 黒色 パミス(2.5GY5/1オリーブ灰色)粒微量混入。締まりよし。粘性有り。
- 2 10YR2/2 黒褐色 III。締まり、粘性有り。炭化物少量混入。

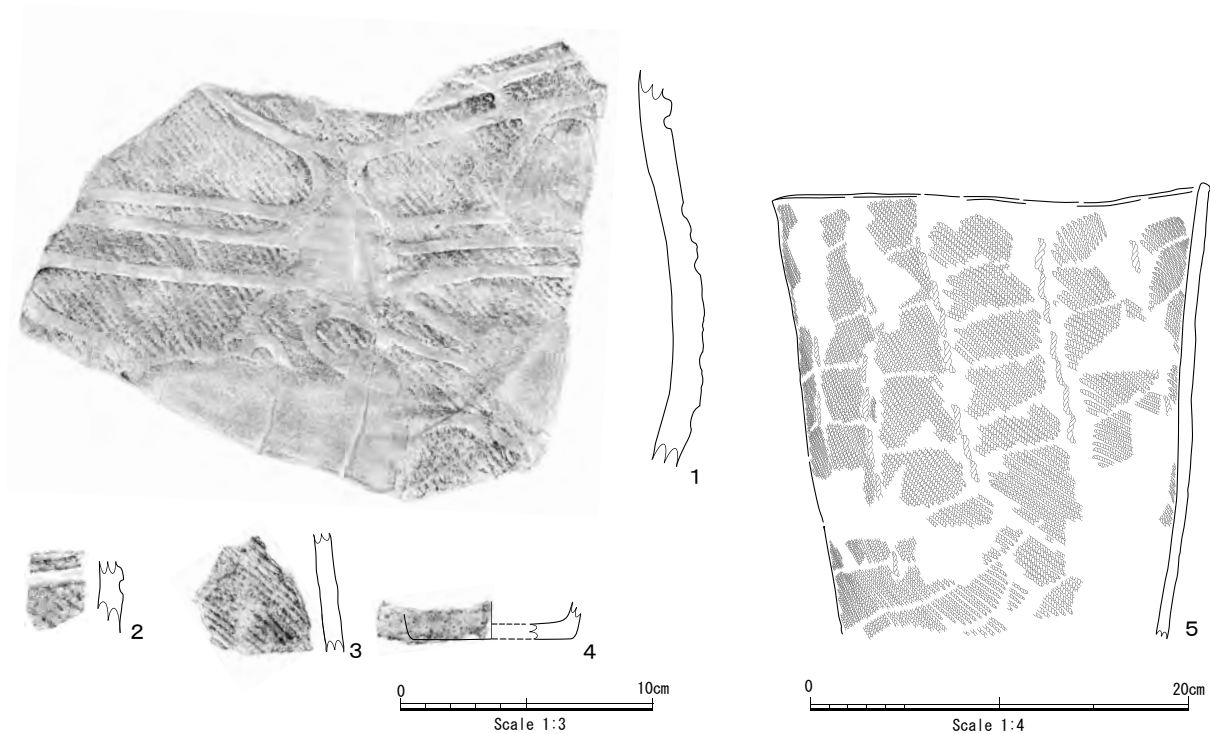
第6図 住居跡1

部に4条の撚糸圧痕（縄線文）がめぐる。地文は胴上部が羽状縄文、胴中～下半部が撚糸文である。2・3は口縁部の大半を欠く。2は接合破片から図上復元を行ったもので、口径20cm、底径11cm、器高29cm程で、頸部がくびれる円筒土器である。口縁部に12条の縄線文がめぐる。地文は結束羽状縄文である。3は口径26cm、底径11cm、器高36cm程である。口縁部に3条の縄線文がめぐり、その間に刺突文がつく。地文は口縁～胴上半部が羽状縄文、下半部が撚糸文である。4は接合破片から図上復元を行ったもので、口径26cm程になるとみられる3群4類土器。口縁部には3条の縄線文がめぐり、下位の2条の間に刺突文が付く。地文は口縁から胴上半部が羽状縄文、胴下半部が撚糸文である。5・6は2群土器片で、ともに口縁に羽状縄文を有するタイプである。7～10は3群3ないし4類で、7は口縁部、8～10は胴部破片。第10図11は珪質頁岩製の石匙。刃部を欠損している。12は石篋片。褐色の珪質頁岩製で、刃部を欠く。13・14は珪質頁岩製の削器。14は片面加工、13はポイント様に両面を加工されたものである。15～17は加工痕が認められるものである。18は珪質頁岩の石核を用いた敲石。

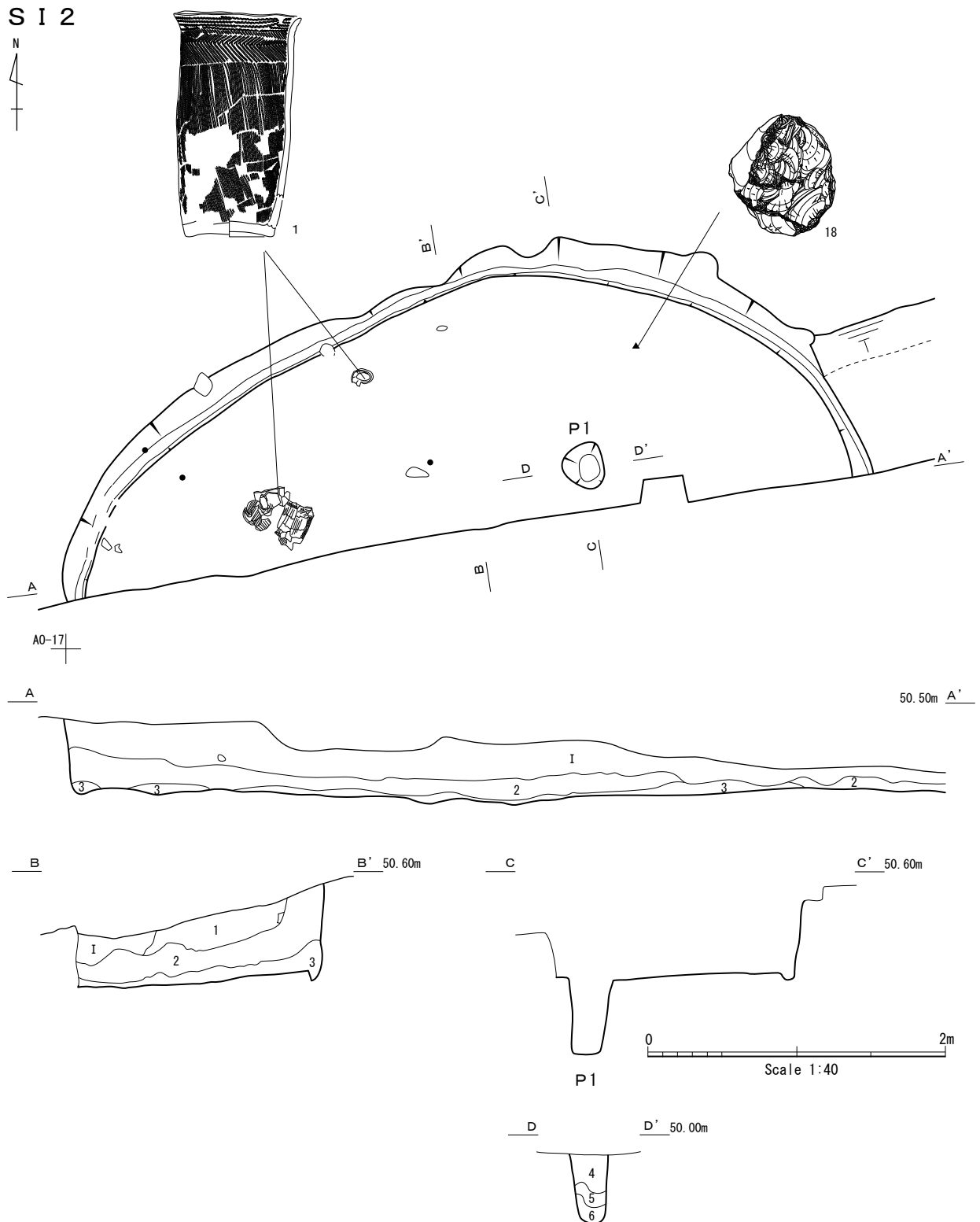
時期等 調査の結果、明瞭な掘り込みがあり、竪穴建物跡と判断した。時期は、竪穴内から出土した土器の主体が3群4類期であることから、当該期に利用されたものとみなされる。

竪穴状遺構23 (S I 23) (第5図)

本遺構は、調査区東部のA J・A K-20・21区に位置する。黒色土の落ち込みとして確認し、遺構番号を付したものである。調査の結果、IV層上面の地形は第5図に示すとおり、周辺より若干落ち込んでいるものの、土層断面の観察からは掘り込みの痕跡などは確認できなかった。また、遺物の分布状況も他の住居跡とは異なり、窪地を利用したエリアとまで判断するには至らなかったことから、遺構から除外した。



第7図 住居跡1および周辺出土遺物



S I 2

- 1 10YR2/1黒色 II。パミス(φ1~5mm)少量混入。締まりよし。粘性弱。
- 2 10YR2/1黒色 II>IV。パミス(φ1~5mm)多量混入。固く締まる。粘性弱。
- 3 10YR1.7/1黒色 IVブロック、パミス(φ1~2mm)微量混入。固く締まる。粘性弱。

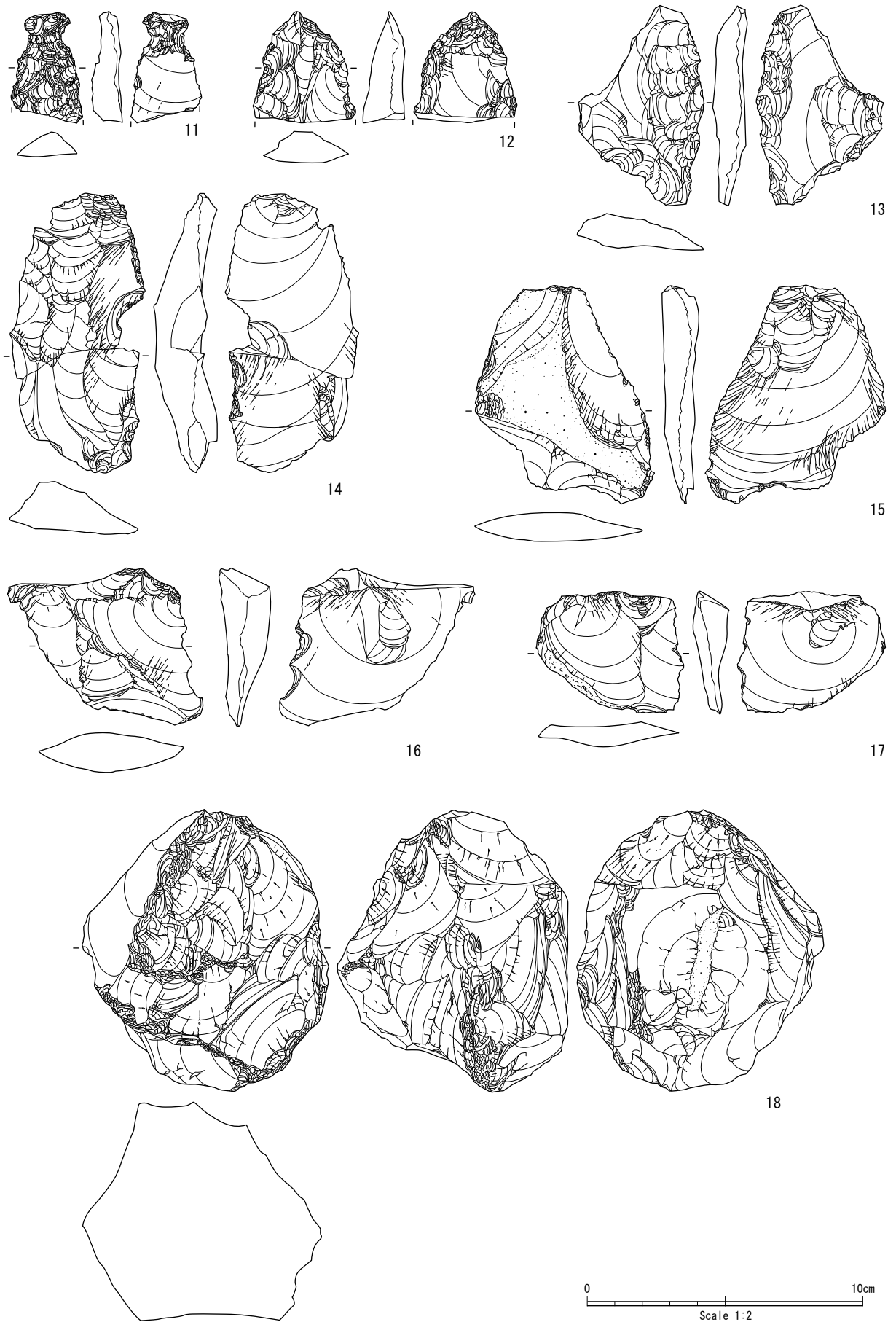
P1

- 4 10YR1.7/1黒色 パミス(φ1~3mm)微量混入。締まり、粘性有り。
- 5 10YR1.7/1黒色 IVブロック、パミス(φ3~4mm)やや多量混入。締まりよし。粘性有り。
- 6 10YR1.7/1黒色 締まり、粘性有り。

第8図 竪穴建物跡2



第9図 竪穴建物跡2出土遺物(1)



第10図 竪穴建物跡2出土遺物(2)

竪穴建物跡30 (S I 30) (第11～18図)

位置 調査区の中央南部のA S・A T・A U・A V-15・16・17区に位置し、竪穴の南部は調査区外に拡がる。大型のため、北側の一部を確認したのみで全体形状などは不明である。

遺構 平成21年度、試掘調査時に検出した。規模は、検出部分で東西約14.9m、南北で5m程の大きさの建物跡である。壁は、明瞭に立ち上がる。確認面からの深さはもっとも深い部分で80cm程である。

柱穴と思われる径20cm以上のピットは14基程確認されたが、P 1～3が直線状に並ぶこと以外は配置などは不明である。北壁に沿いほぼ40cmの間隔で、径15cm、深さ5～37cmの柱穴が19基見られる。

床面は、比較的平坦で幾分しまっていた。なお、範囲は記録しなかったが、建物中央北部壁際にロームが盛土され硬化している部分(埋土19層)が一部みられたため、建物内がテラス状の2段構造となっていた可能性がある。

遺物の出土状況は散在的であるが、床面から一括土器が1個体、石器が3点出土した(第13図)。

遺物 埋土からの出土が多く、644点の土器、49点の石器などを含む927点の遺物を得た。土器は、縄文時代前期後葉の3群4類土器が主体を占める。埋土2層～床面にかけて縄文時代早期の1群土器が7点出土している。その他の2群1類の早稲田5類は、1～3層からの出土である。

第14図1～3は、3群4類土器。1は口径22cm、底径13cm、器高37cm程の復元土器で、頸部が屈折する器形である。頸部に3条の縄線文がめぐり、口縁～胴上半部には結束羽状縄文、胴下半部には多軸絡条体回転文が施されている。2・3は接合破片から図上復元を行ったものである。2は口径24cm程になるとみられる円筒土器である。口縁部には3条の縄線文がめぐり、地文は付加条の結束羽状縄文とみられる。3は口径31cm、底径21cm、器高48cm程になるとみられる大型の円筒土器である。口縁部には撚糸回転文、地文は多軸絡条体回転文である。4～7は他地点からも散在的に採集されている1群土器。4は爪形文、5は貝殻腹縁文、6・7は沈線文が施文されている。7は2層より出土。8・9は2群早稲田5類相当土器。10は3群3類土器。11～第15図14は3群4類土器。15～21は3群3類ないし4類土器。22は5群7類土器とみられる口縁。23は6群の胴部破片。第16図は剥片石器で、石材はすべて珪質頁岩である。24は石匙。25～30は石篋。31～36は削器。37は搔器。第17図38は半円状扁平打製石器。39はデイサイトの円礫を用いた擦石、40は輝石安山岩の円礫を用いた擦石。41は泥岩製の凹石で赤色物質の付着がある。本遺跡からは、赤色の礫(赤色珪化岩)も数点出土しており(図版35右下)、赤色顔料を得るために擦り潰して使用した可能性が考えられる。42はデイサイト製の石皿。第18図43は輝石安山岩製の石皿。44は灰褐色を呈する珪質頁岩の石核。1層から出土したものである。45は砂岩の礫。46は有孔土製円盤で、3群土器片を使用している。47は凝灰岩製の垂飾。

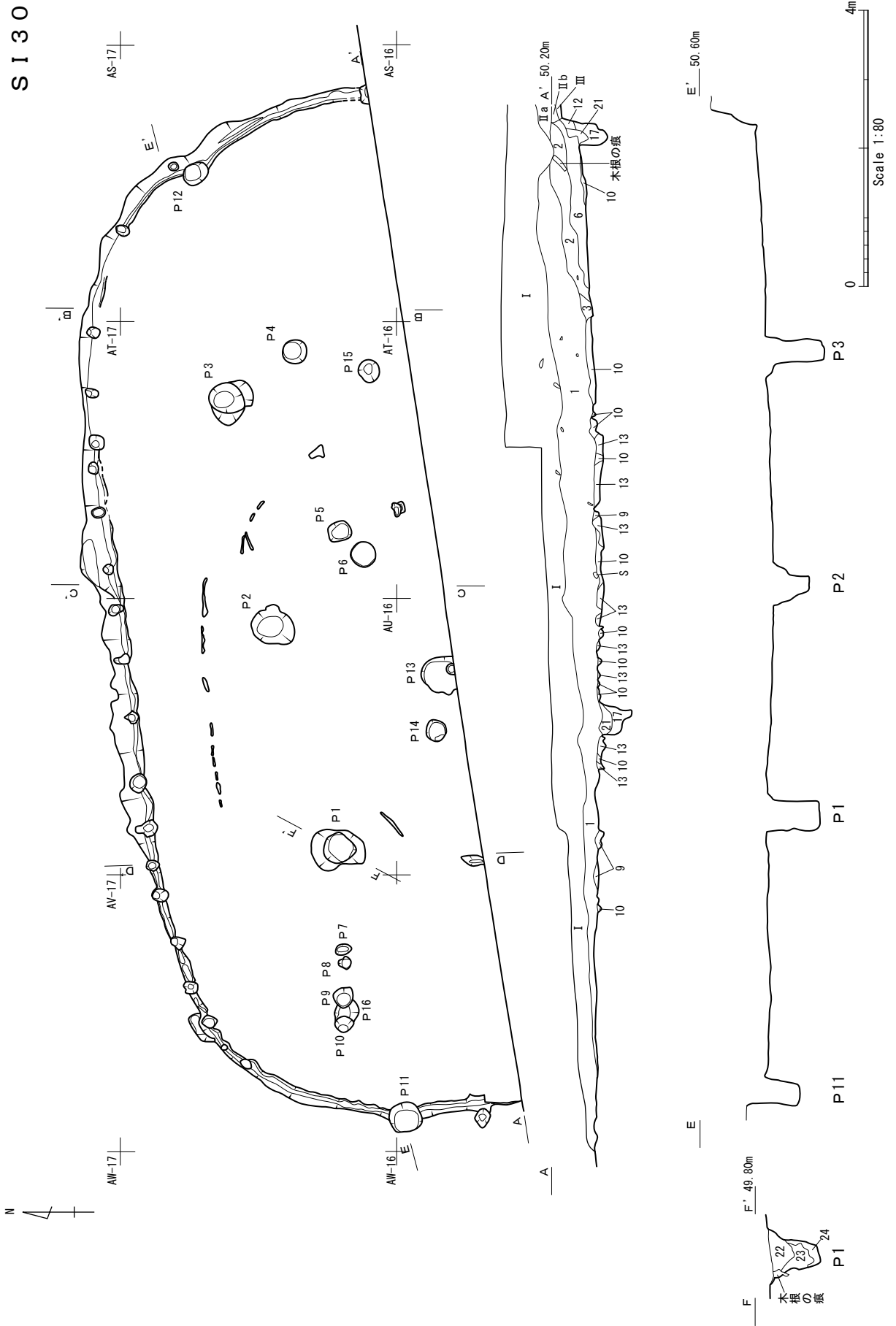
時期等 試掘調査の時点では、確認された3m程の範囲から、さらに外側へと拡がる住居跡と判断したが、調査の結果、長さが少なくとも10mを超える大型の建物跡と判明した。時期は床面から出土した土器が3群4類期であることから、当該期に利用されたものとみなされる。

住居跡38 (S I 38) (第19図)

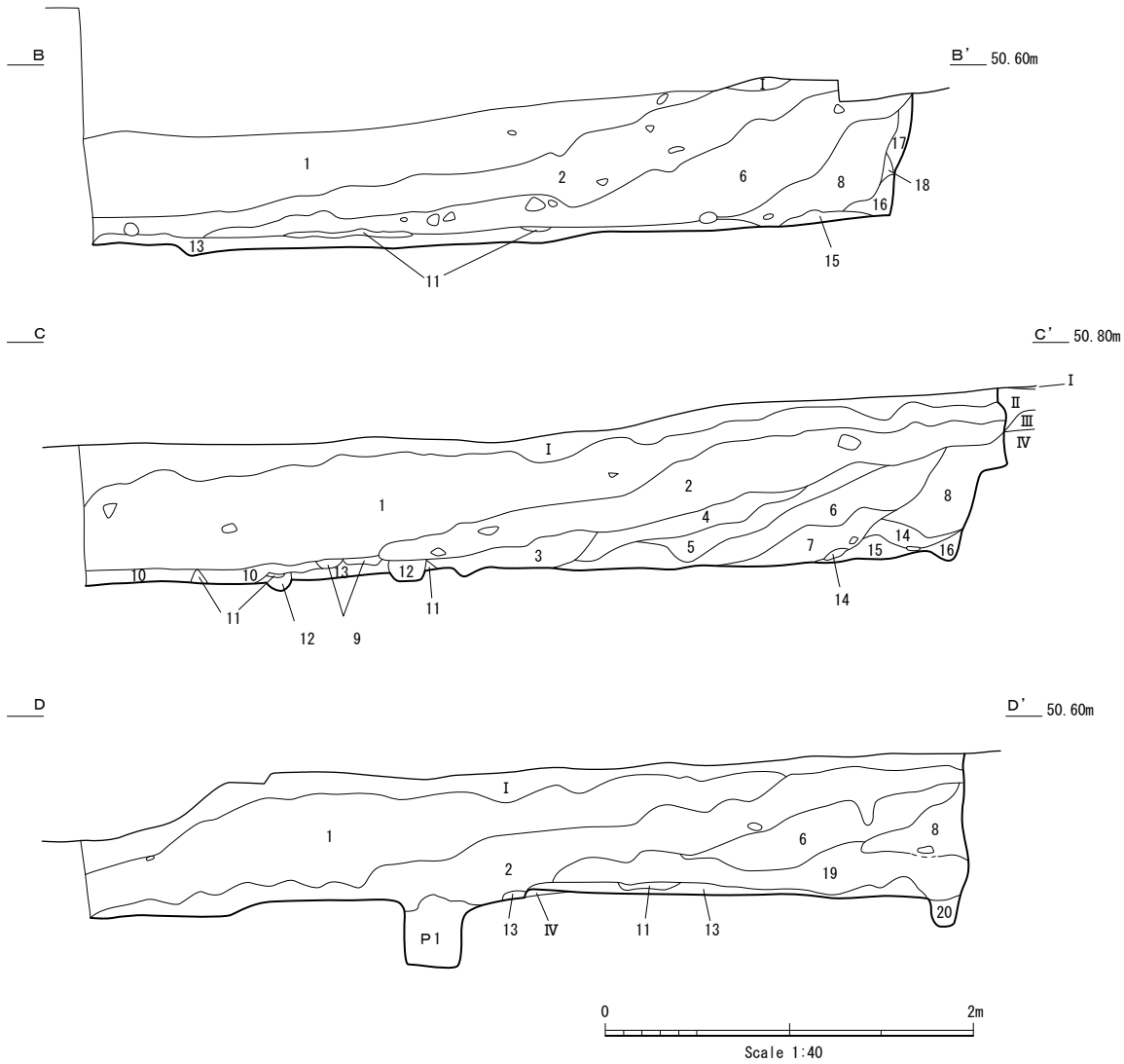
位置 調査区の中央北部のA U・A V-18区に位置する。

遺構 規模は、住居跡1と同様、掘り込みが浅く、削平を受けているため、全容は不明であるが、4.5m前後の円形の住居跡と思われる。石組炉は住居跡のほぼ中央にあり、それを中心に不整形の掘り込みがある。礫は、西側の一部を除き、径75cm程の範囲に、ほぼ間断なく配されている。柱穴は、小ピットがいくつかあるが、規則性は認められない。掘り込み面と床面の比高差は、およそ15cm程である。

遺物 埋土より縄文時代後期の土器1点、石器3点の計4点を得た。



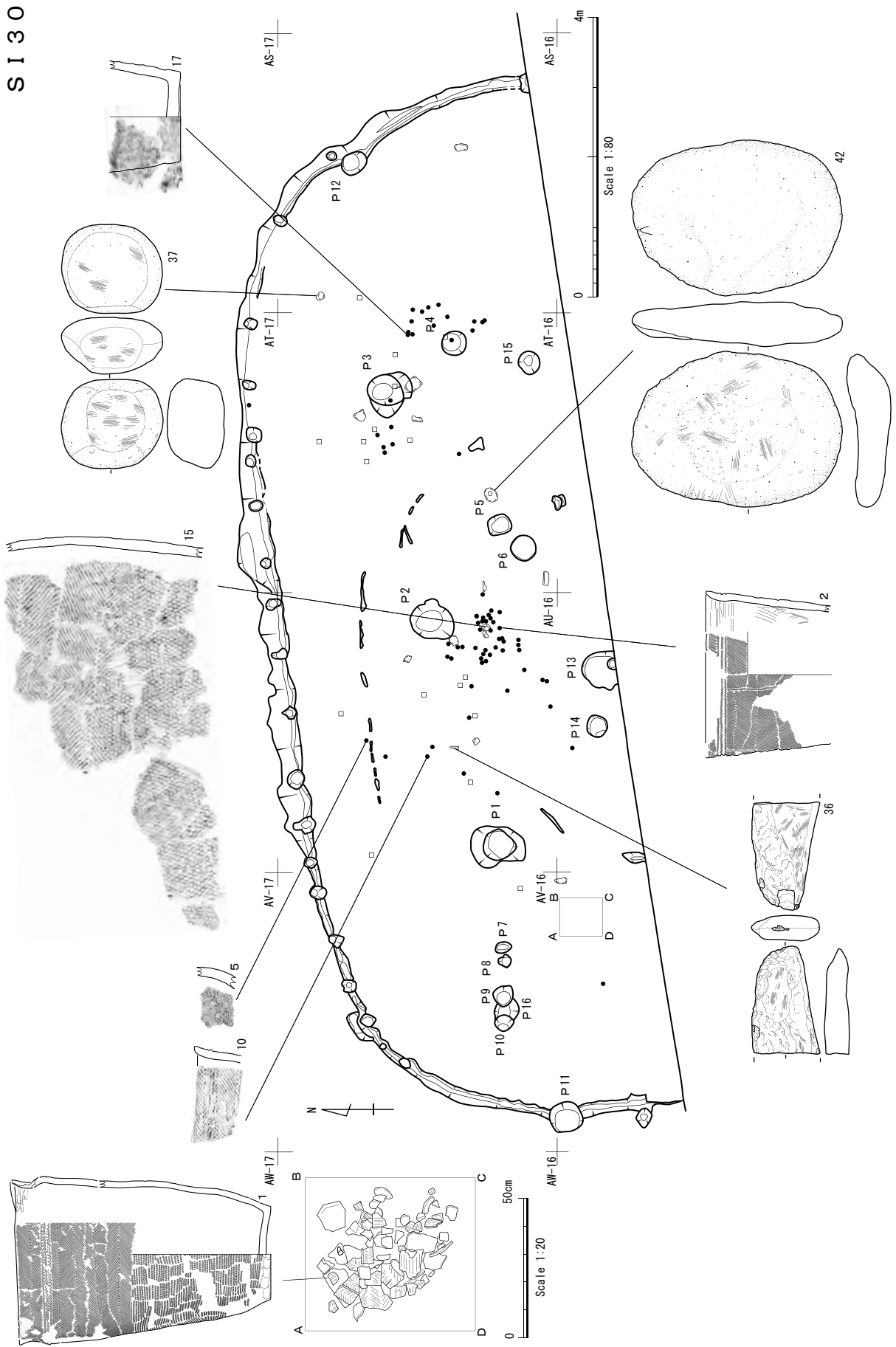
第11図 竪穴建物跡30(1)



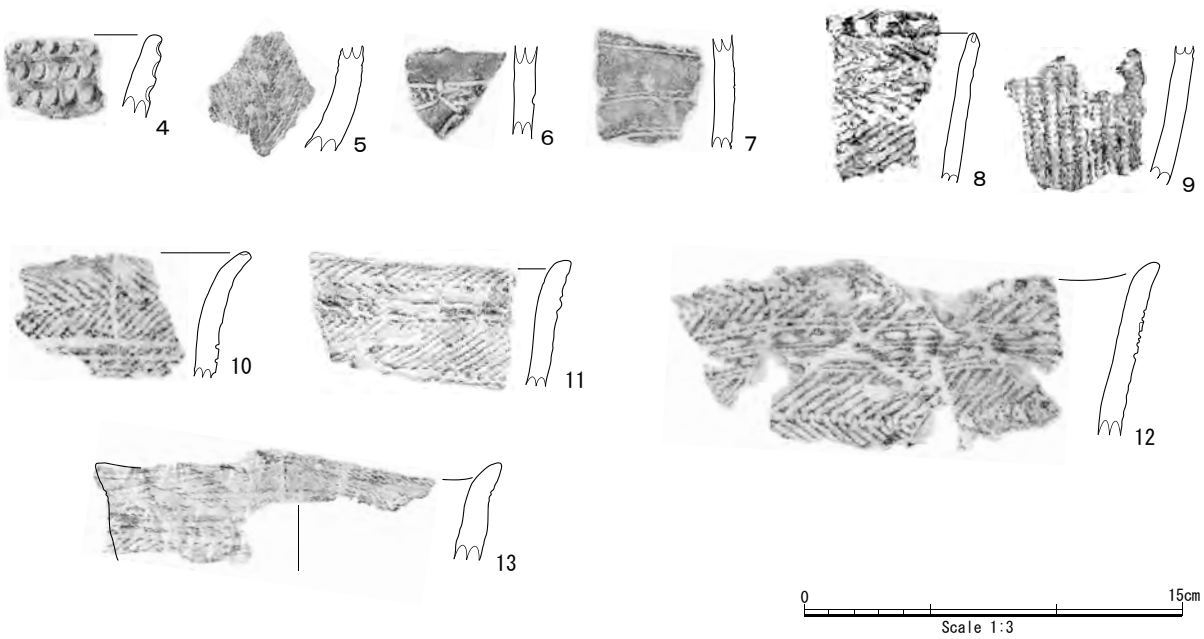
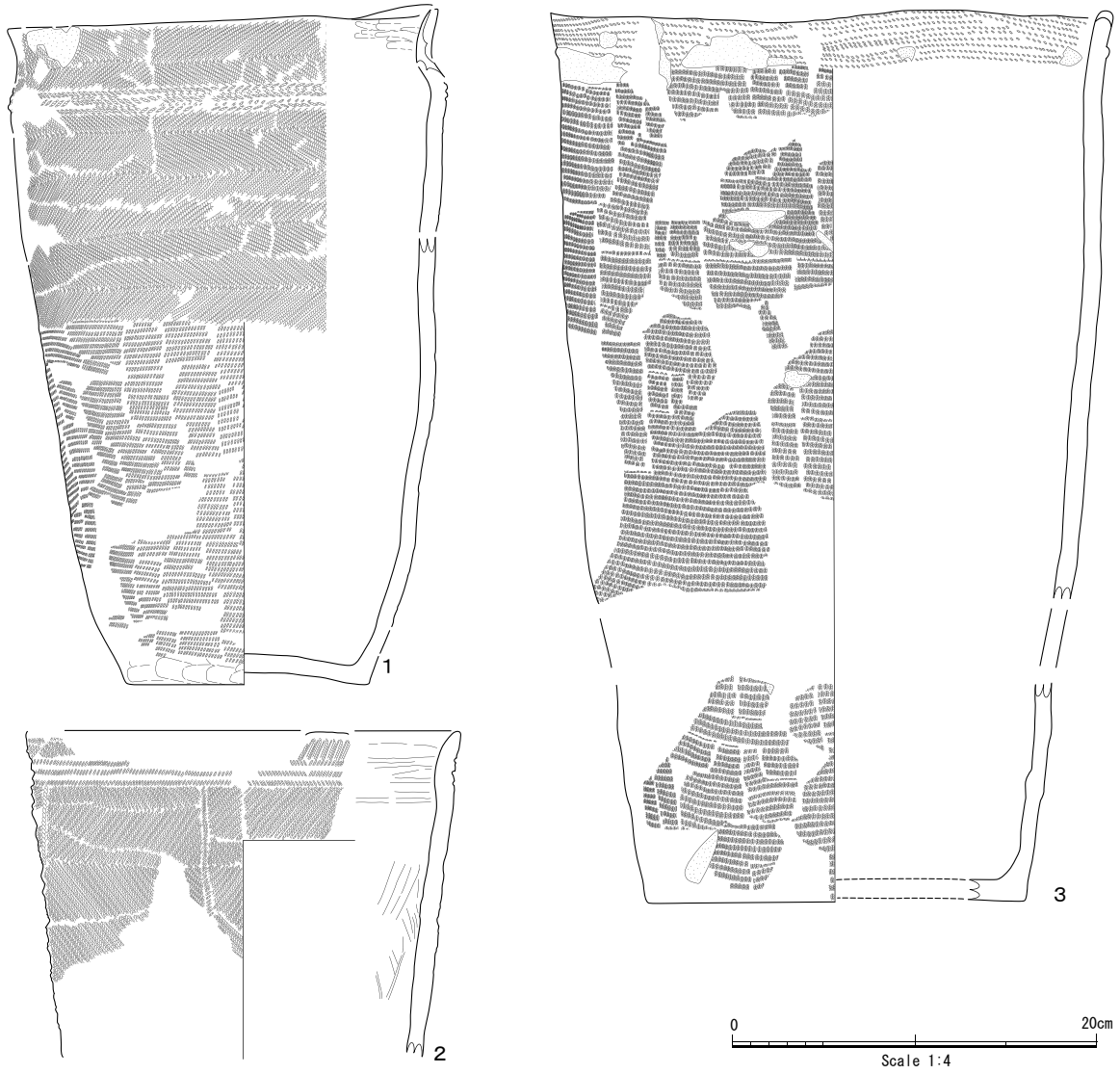
S I 30

- 1 10YR1.7/1黒色 II。礫、パミス(φ3~10mm)微量混入。締まり、粘性有り。
- 2 10YR2/1黒色 パミス(φ2~10mm)微量混入。締まりよし。粘性やや有り。
- 3 10YR2/1黒色 IVブロック少量混入。締まりよし。粘性やや有り。
- 4 10YR2/1黒色 IVブロック、パミス(φ1~10mm)やや多量、炭化物微量混入。固く締まる。粘性やや有り。
- 5 10YR2/2黒褐色 焼土ブロック、Vブロック少量混入。固く締まる。粘性弱。
- 6 10YR2/1黒色 IVブロック非常に多量混入。非常に固く締まる。粘性弱。
- 7 10YR1.7/1黒色 II。IV粒微量混入。締まりよし。粘性強。
- 8 10YR1.7/1黒色 II。IVブロック多量混入。固く締まる。粘性有り。
- 9 10YR2/2黒色 IV粒少量混入。締まりよし。粘性有り。
- 10 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。締まりよし。粘性有り。
- 11 7.5YR4/6褐色 IV。締まり有り。粘性なし。
- 12 10YR2/1黒色 II。IV粒少量混入。締まり、粘性有り。
- 13 10YR3/3暗褐色 IV>II。固く締まる。粘性有り。掘方。
- 14 10YR5/6黄褐色 IV。砂質。固く締まり。粘性なし。貼床。
- 15 10YR1.7/1黒色 II。IV粒少量混入。非常に固く締まる。粘性有り。
- 16 10YR2/1黒色 II。IVブロック非常に多量混入。非常に固く締まる。粘性弱。
- 17 10YR1.7/1黒色 II。IVブロック少量混入。固く締まる。粘性有り。柱穴。
- 18 10YR2/2黒褐色 III。非常に固く締まる。粘性有り。
- 19 10YR2/1黒色 II。IVブロック非常に多量混入。固く締まる。粘性弱。
- 20 10YR2/1黒色 IVブロック少量混入。固く締まる。粘性弱。
- 21 10YR2/1黒色 II。IVブロック多量混入。固く締まる。粘性有り。
- P1
- 22 10YR2/1黒色 II。IVブロック、パミス(φ2~4mm)少量混入。締まりよし。粘性有り。
- 23 10YR2/1黒色 IVブロック、パミス(φ2~20mm)非常に多量混入。締まり有り。粘性弱。
- 24 10YR4/4褐色 IV主体。締まりよし。粘性弱。

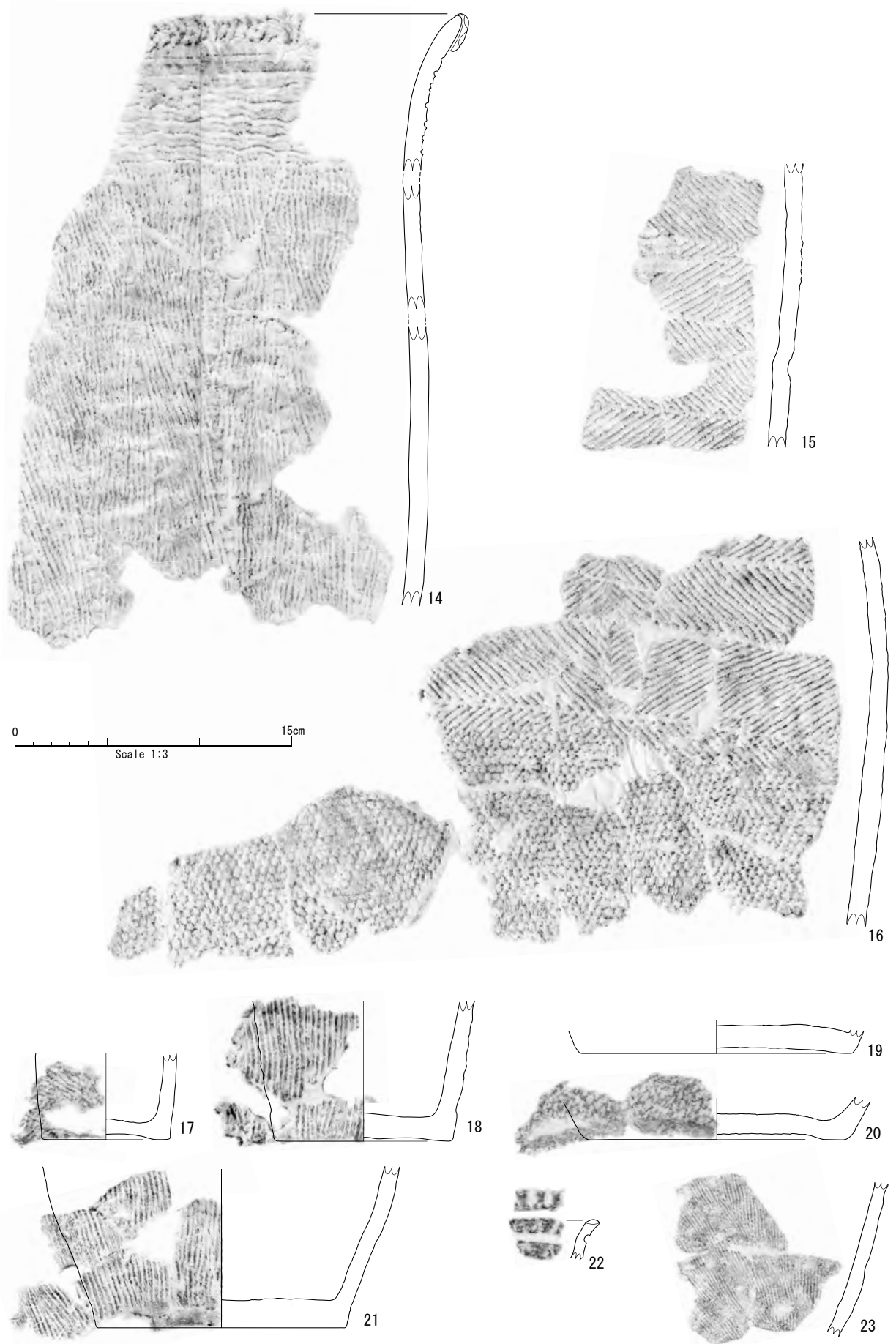
第12図 竪穴建物跡30(2)



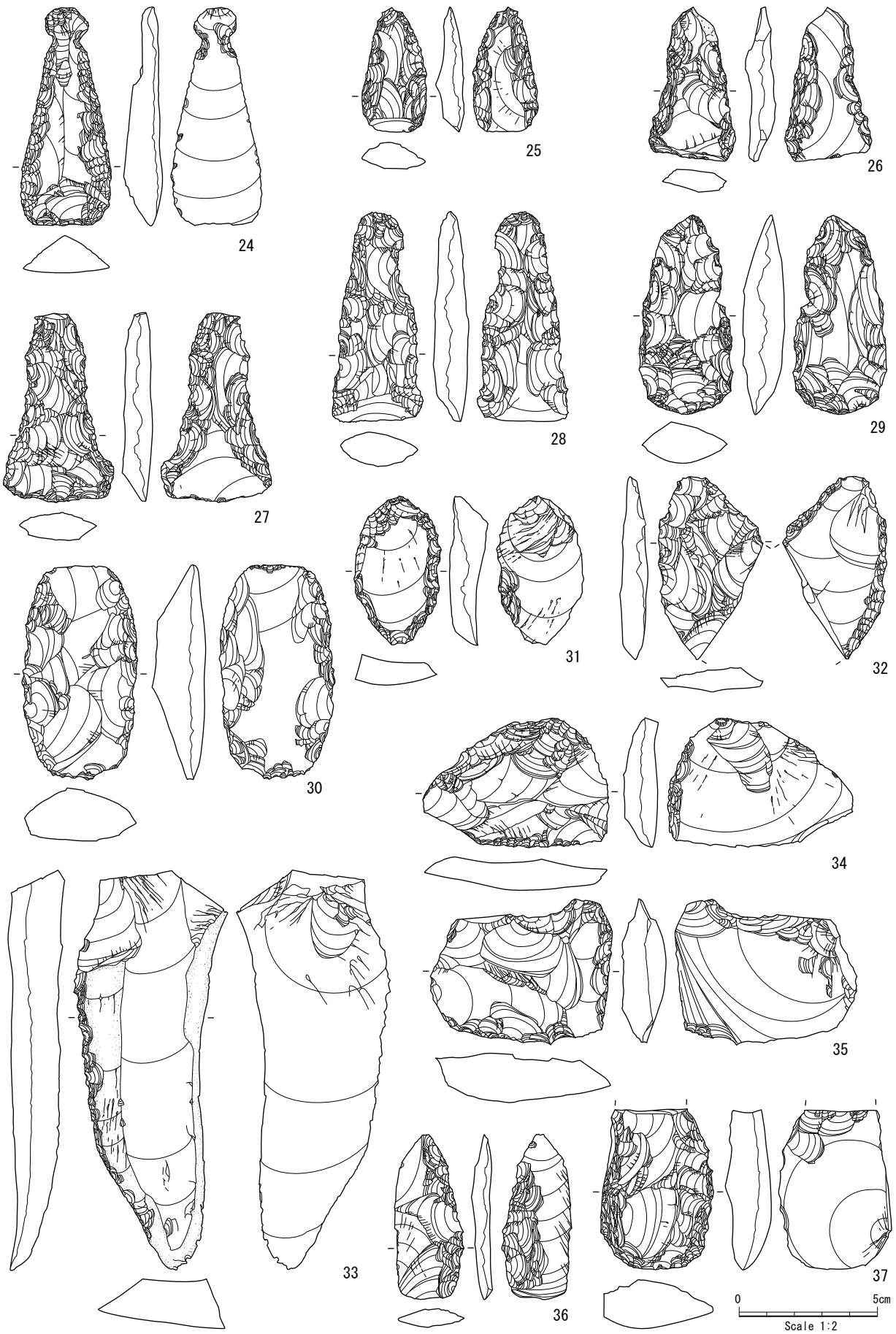
第13図 竪穴建物跡30(3)



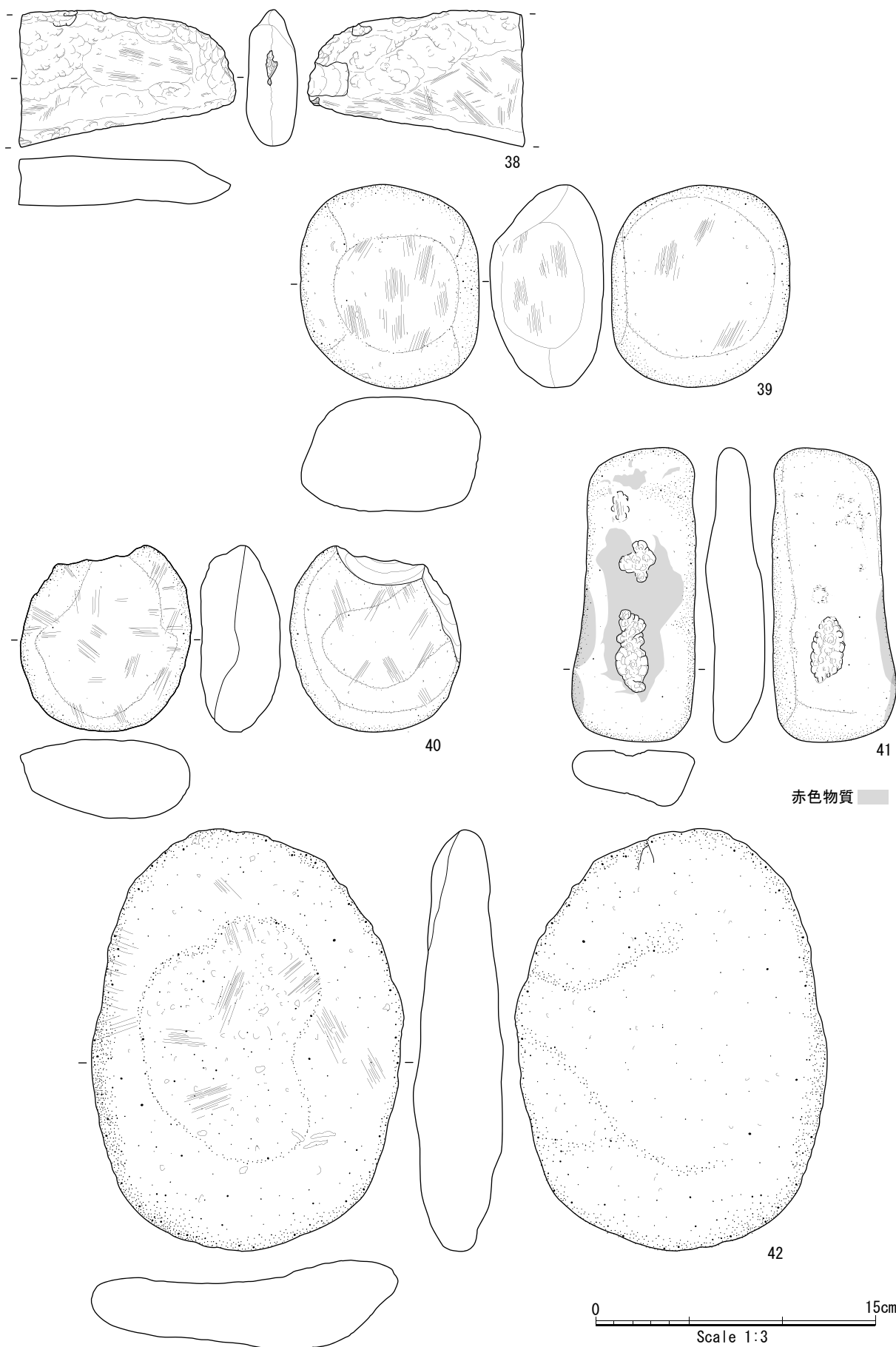
第14図 竪穴建物跡30出土遺物(1)



第15図 竪穴建物跡30出土遺物(2)



第16図 竪穴建物跡30出土遺物(3)



第17図 竪穴建物跡30出土遺物(4)

第19図1は5群の胴部破片。斜行縄文が付く。2は使用痕が認められるもので、珪質頁岩の剥片を利用している。3は凝灰岩の扁平楕円礫の両端を打ち欠いた石錘。

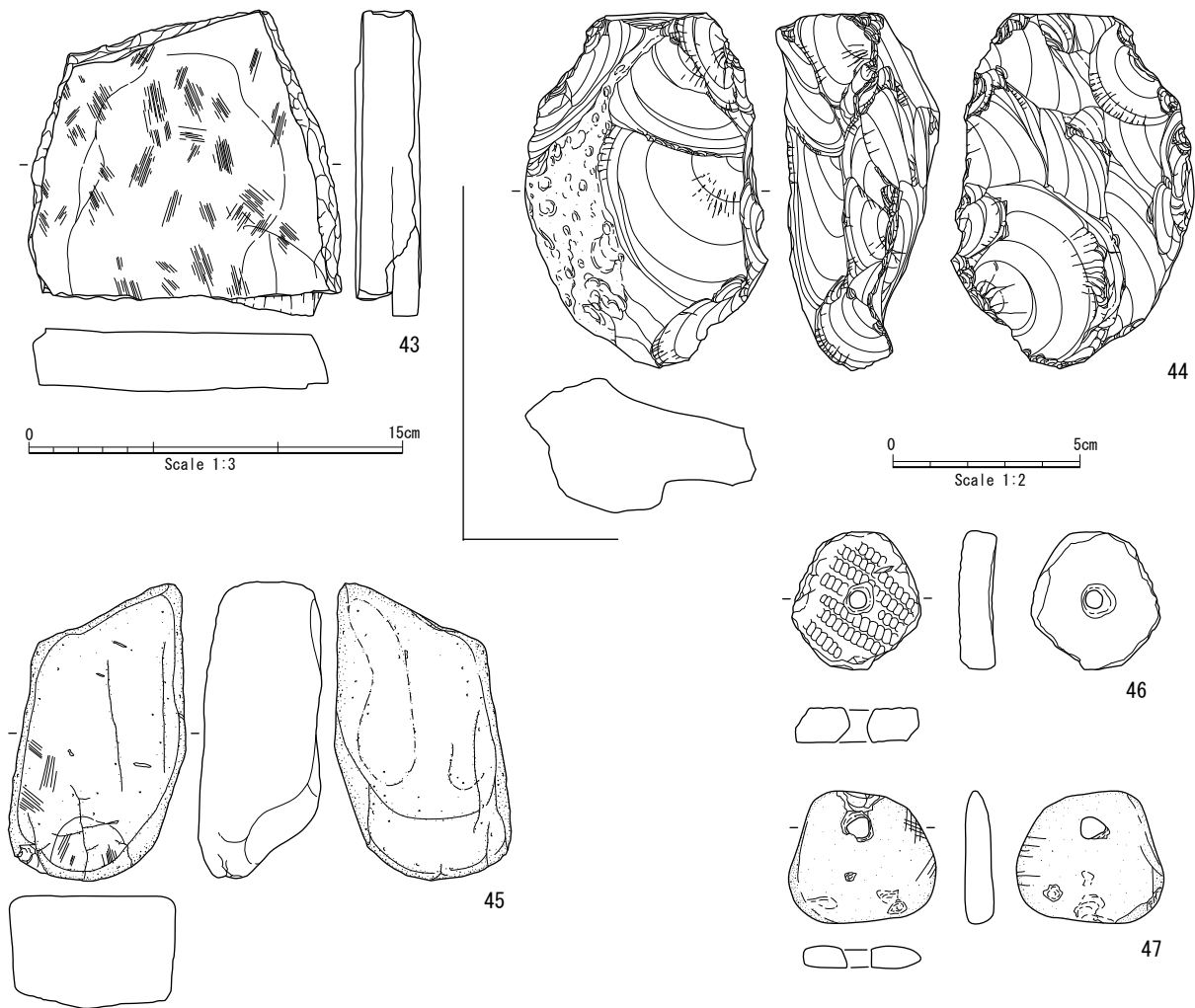
時期等 本遺構は調査の結果、地面をきちんと掘り込んでいないものの、石組炉の存在から住居跡と判断したものである。時期は、1層から出土した土器が5群であることからみると、当該期である可能性が高い。

竪穴建物跡45 (S I 45) (第20・21図)

位置 調査区北西端のBD・BE・BF-16・17区に位置する。遺構の北西部は調査区外に拡がり、竪穴の南東部とみられる部分を確認したにすぎない。南西側には土坑65が所在する。この土坑と本遺構との新旧関係については、不明である。

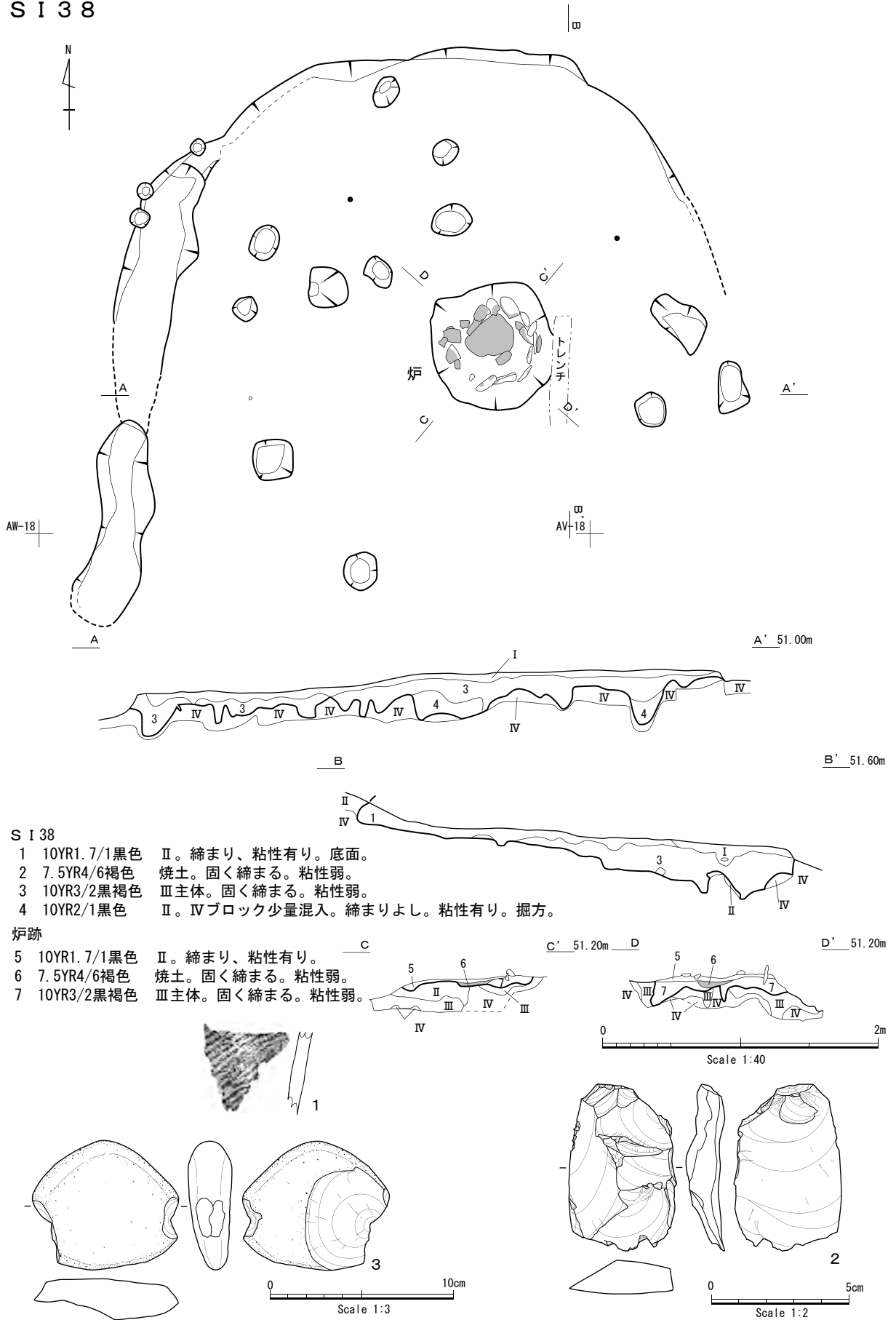
遺構 確認した部分の規模は、南東-北西方向が5mで、全容や平面形は一部を確認したにすぎず、不明である。確認面からの深さは35cm程である。

柱穴は竪穴内から2基 (P 1・P 2) 検出された。炉跡はない。

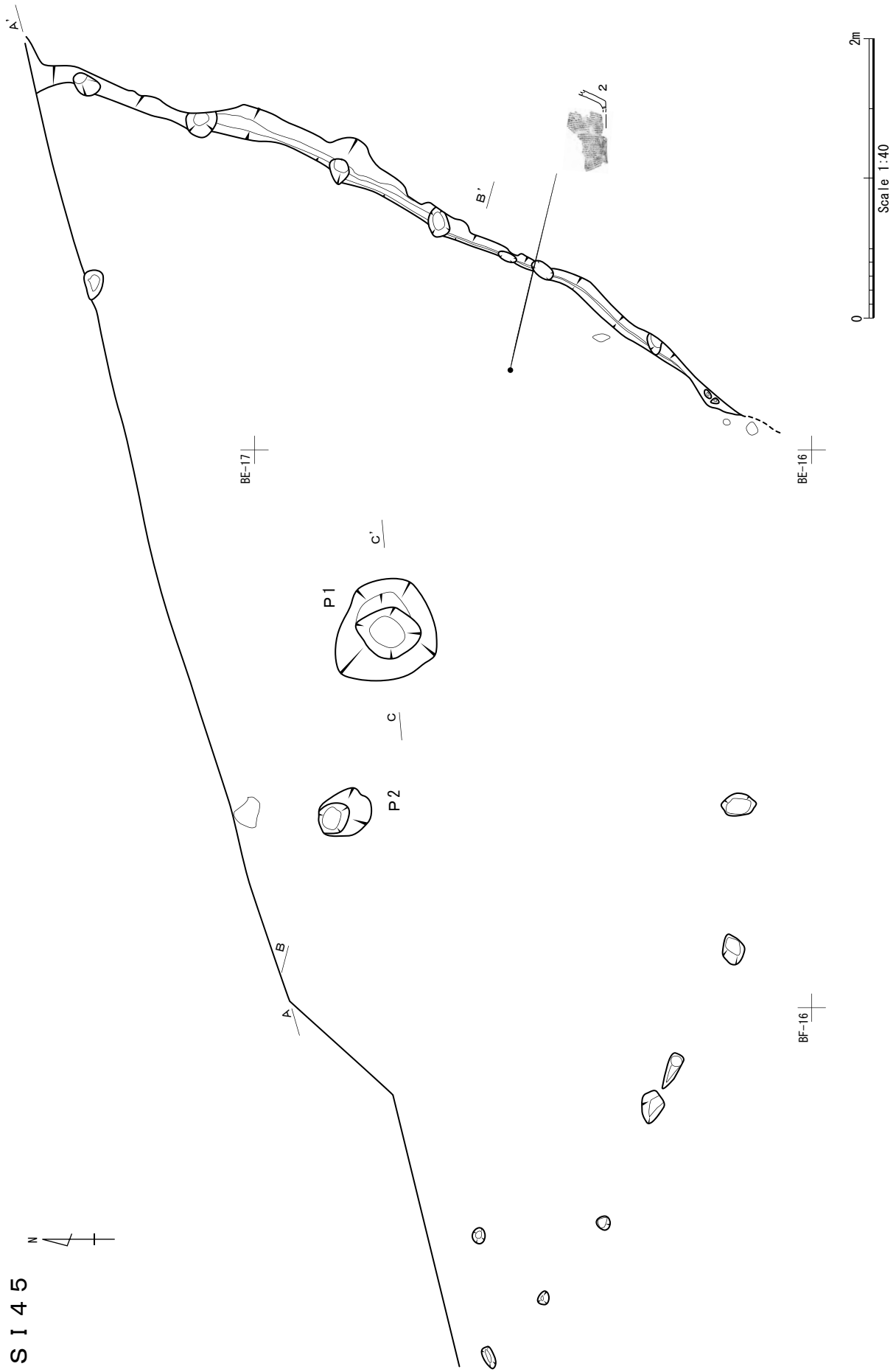


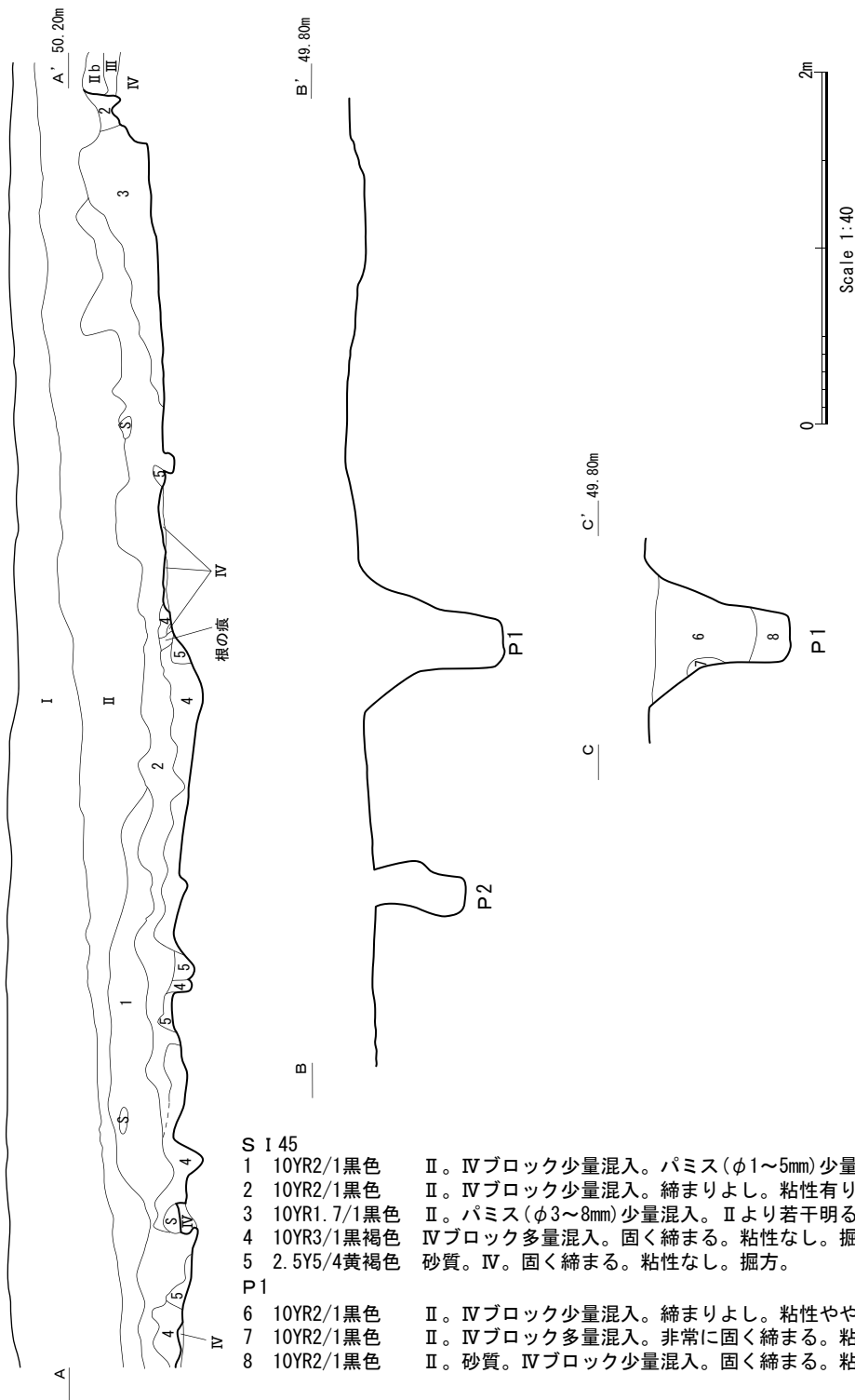
第18図 竪穴建物跡30出土遺物(5)

S I 38



第19図 住居跡38と出土遺物





S I 45

- 1 10YR2/1黒色 II。IVブロック少量混入。パミス(φ1~5mm)少量混入。締まり、粘性有り。
- 2 10YR2/1黒色 II。IVブロック少量混入。締まりよし。粘性有り。1より若干明るい。
- 3 10YR1.7/1黒色 II。パミス(φ3~8mm)少量混入。IIより若干明るい。締まりよし。粘性有り。
- 4 10YR3/1黒褐色 IVブロック多量混入。固く締まる。粘性なし。掘方。
- 5 2.5Y5/4黄褐色 砂質。IV。固く締まる。粘性なし。掘方。

P1

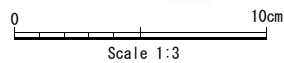
- 6 10YR2/1黒色 II。IVブロック少量混入。締まりよし。粘性やや強い。
- 7 10YR2/1黒色 II。IVブロック多量混入。非常に固く締まる。粘性弱。
- 8 10YR2/1黒色 II。砂質。IVブロック少量混入。固く締まる。粘性弱。



1



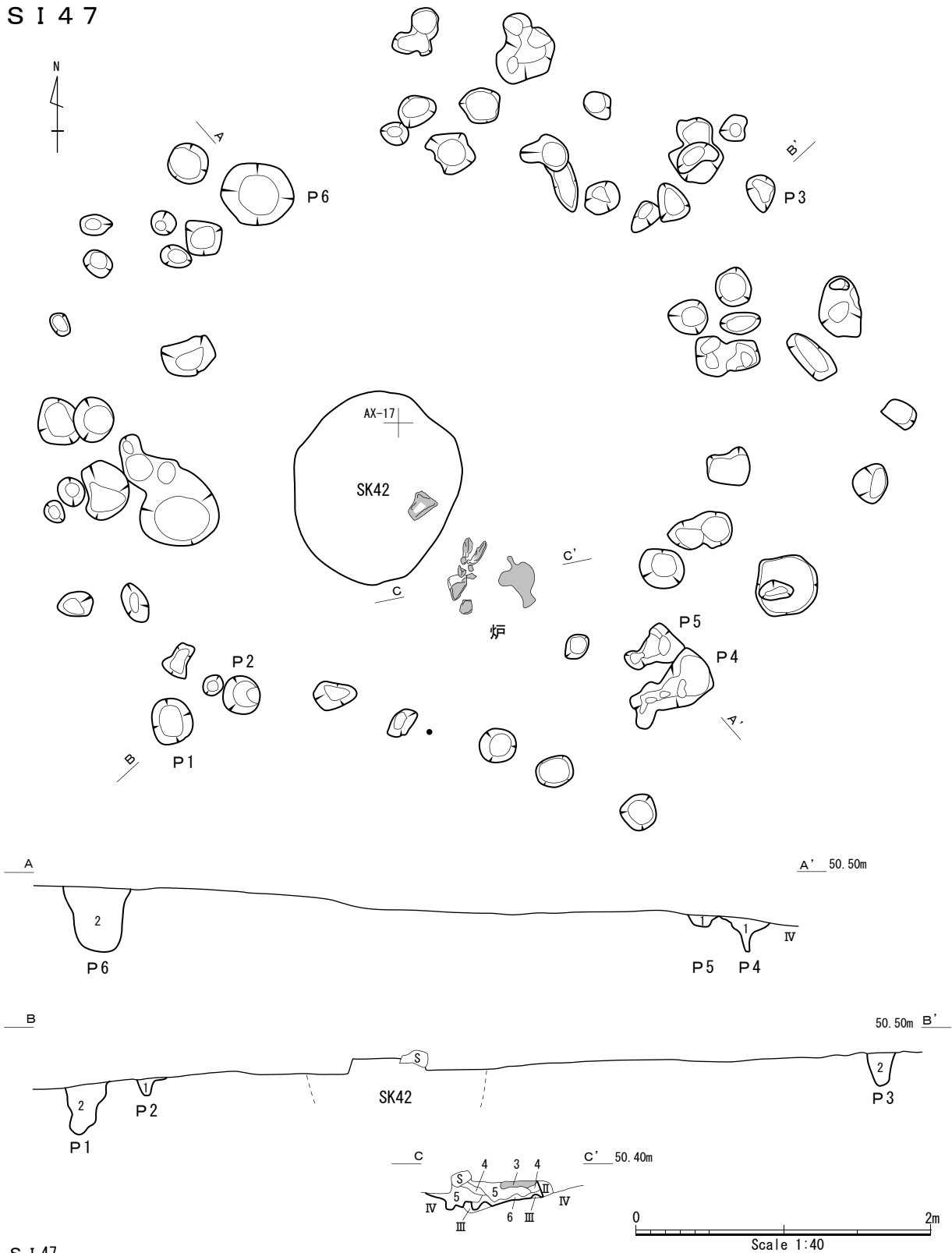
2



Scale 1:3

第21図 竪穴建物跡45と出土遺物

S I 47



S I 47

- 1 10YR2/1黒色 IV粒、パミス(φ2~4mm)微量混入。締まり、粘性有り。
- 2 10YR1.7/1黒色 IV粒、パミス(φ2~4mm)微量混入。締まり、粘性有り。
- 炉跡
- 3 7.5YR5/8明褐色 砂質。締まり有り。粘性なし。
- 4 10YR2/1黒色 締まり有り。粘性なし。
- 5 10YR1.7/1黒色 締まりなし。粘性弱。
- 6 10YR4/2灰黄褐色 炭化物少量混入。IV粒多量混入。締まり弱。粘性有り。

第22図 住居跡47

遺物 出土した遺物は3群土器2点、礫1点の総計3点である。このうち床面から1点の土器が得られた。第21図1・2は3群土器片。

時期等 本竪穴は、一部を確認したにすぎず、詳細を明らかにすることができなかった。時期は出土土器が3群に属することから、当該期に属する遺構である可能性が高い。

住居跡47 (S I 47) (第22・23図)

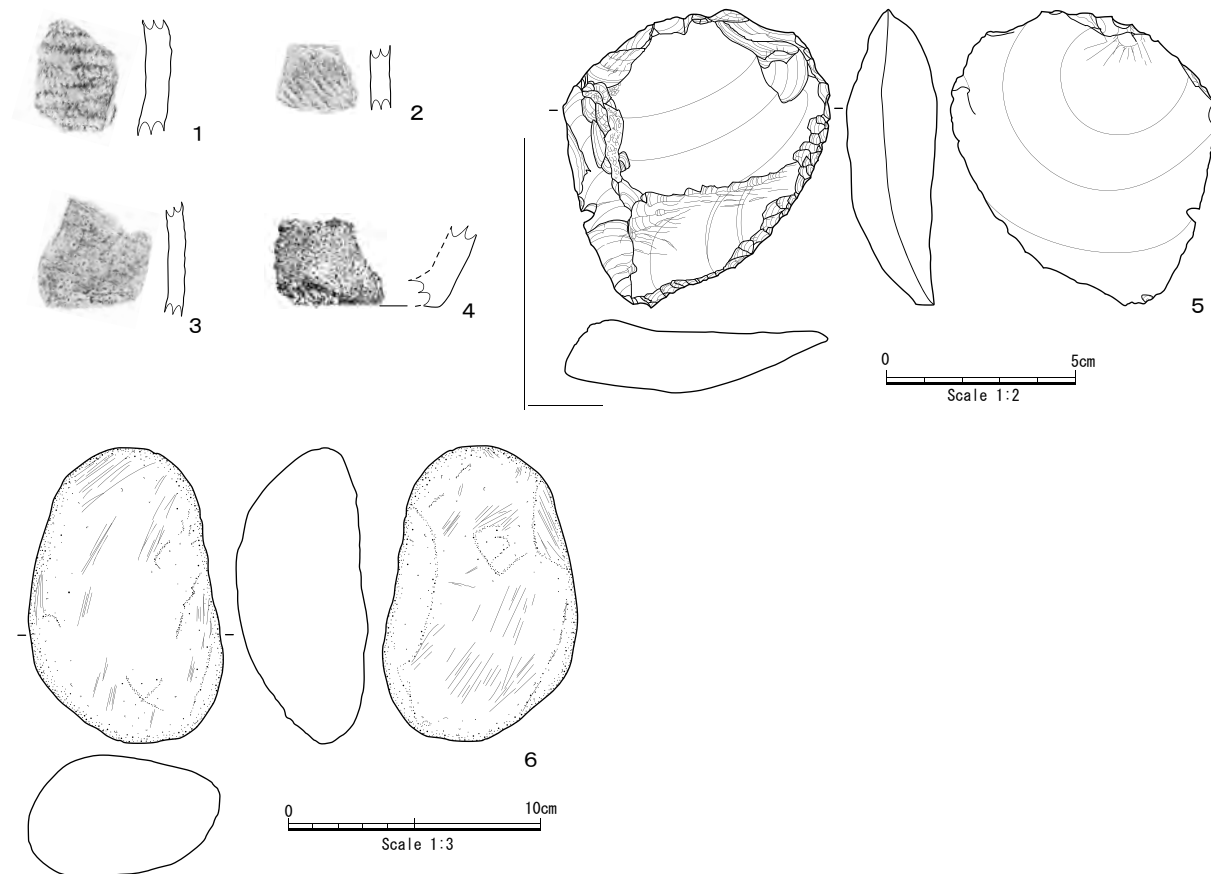
位置 調査区中央部のAW・AX-16・17区に位置し、土坑42と重複する。新旧関係は本遺構のほうが新しい。本遺構も削平を受け、明瞭な掘り込みは確認できなかったものの、石組炉の存在から住居跡と判断し、遺構としたものである。

遺構 柱穴の分布状況などから推測して、東西方向を主軸とする長径6m程の範囲を遺構のエリアと判断した。石組炉は住居中央部南よりに位置している。礫は、大半が消失しているが西側の一部に、長径40cm程の範囲に、配されている。柱穴は住居内に55基分布。二重に円形を呈して分布している。

遺物 エリア内から出土した遺物のうち、本遺構出土の遺物としたものは2群1点、3群1点、4群1点、5群3点の土器片、1群石器2点、計8点の遺物である。その多くは床からの出土。

第23図1は2群土器片。RL斜行縄文が施されている。2は4群とみられる斜行縄文が施された胴部破片。3は無文の5群土器胴部破片。4は5群土器底部破片。5は珪質頁岩製の削器。6は擦石で、石材はデイサイトである。

時期等 本遺構は石組炉の存在で、柱穴が円形にめぐる部分を遺構と認識したが、住居跡1・38と同様、ほとんど地面を掘り込まないで居住した施設と捉えられる。時期は柱穴出土土器が5群に属することから、当該期に属する可能性が高い。



第23図 住居跡47出土遺物

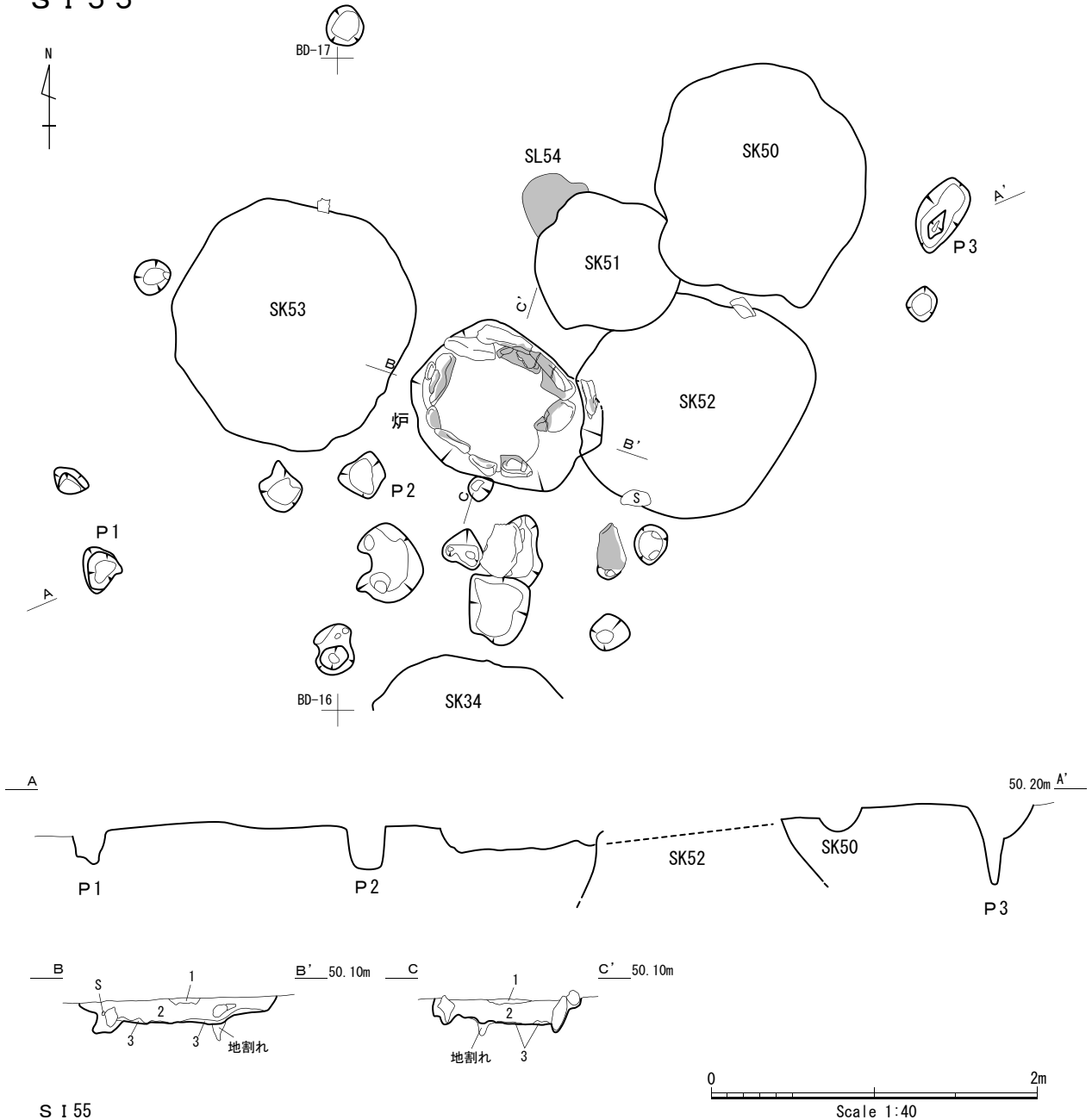
住居跡55 (S I 55) (第24図)

位置 調査区の西部BC・BD-16区に位置する中型の住居跡。本遺構も住居跡47などと同様、石組炉の存在から住居跡と判断し、遺構としたものである。

遺構 柱穴の分布状況などから推測して、長径6m程の範囲を遺構のエリアと判断した。石組炉を1ヵ所検出。石組炉は住居跡中央部やや南よりに位置している。礫は、南東側の一部を除き、径90cm程の範囲に、ほぼ間断なく配されている。柱穴は住居内に14基分布。

本遺構に明確に伴う遺物は確認されなかった。時期は炉跡の形態などから、5群期に属する可能性が高い。

S I 55



S I 55

- 1 10YR4/4褐色 IV主体。II少量混入。締まり有り。粘性なし。
- 2 10YR1.7/1黒色 II。締まりよし。粘性有り。
- 3 10YR4/4褐色 IV主体。固く締まる。粘性なし。

第24図 住居跡55

竪穴住居跡21 (S I 21) (第25・26図)

位置 調査区の東部AO・AP-17区に位置する。南側は畑地として利用されていた際の、道路により削平されていたが、平面形は方形を呈すると考えられる。

遺構 表土除去後、Ⅱ層面においてT o - a火山灰を伴う黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの中心を通るように土層観察のための畔を設定した。まず畔の東および南側にあたる部分に試掘溝を掘削して堆積状況を確認した。埋土は住居廃絶後に堆積したものである。Ⅳ層中を床構築面とする。規模は4 m以上の住居跡と思われる。壁は床構築面からの現高で約47cmでほぼ垂直に立ち上がる。

床面の調査では、支柱穴は確認されなかったが、床面北側にカマドが認められた。さらに住居の北端から約80cm離れた部分に煙出しとみられる円形の落ち込みを確認したため、トンネル状に煙道の掘られたカマドであることが予想された。そのため、煙出しに試掘溝を設定し、Ⅳ層まで掘り下げると煙道部分の堆積があることがわかった。さらにカマドと煙出しの中間に当たる部分に試掘溝を追加し、トンネル状に続く煙道の堆積を確認した。煙道は崩落せずに遺存していた。

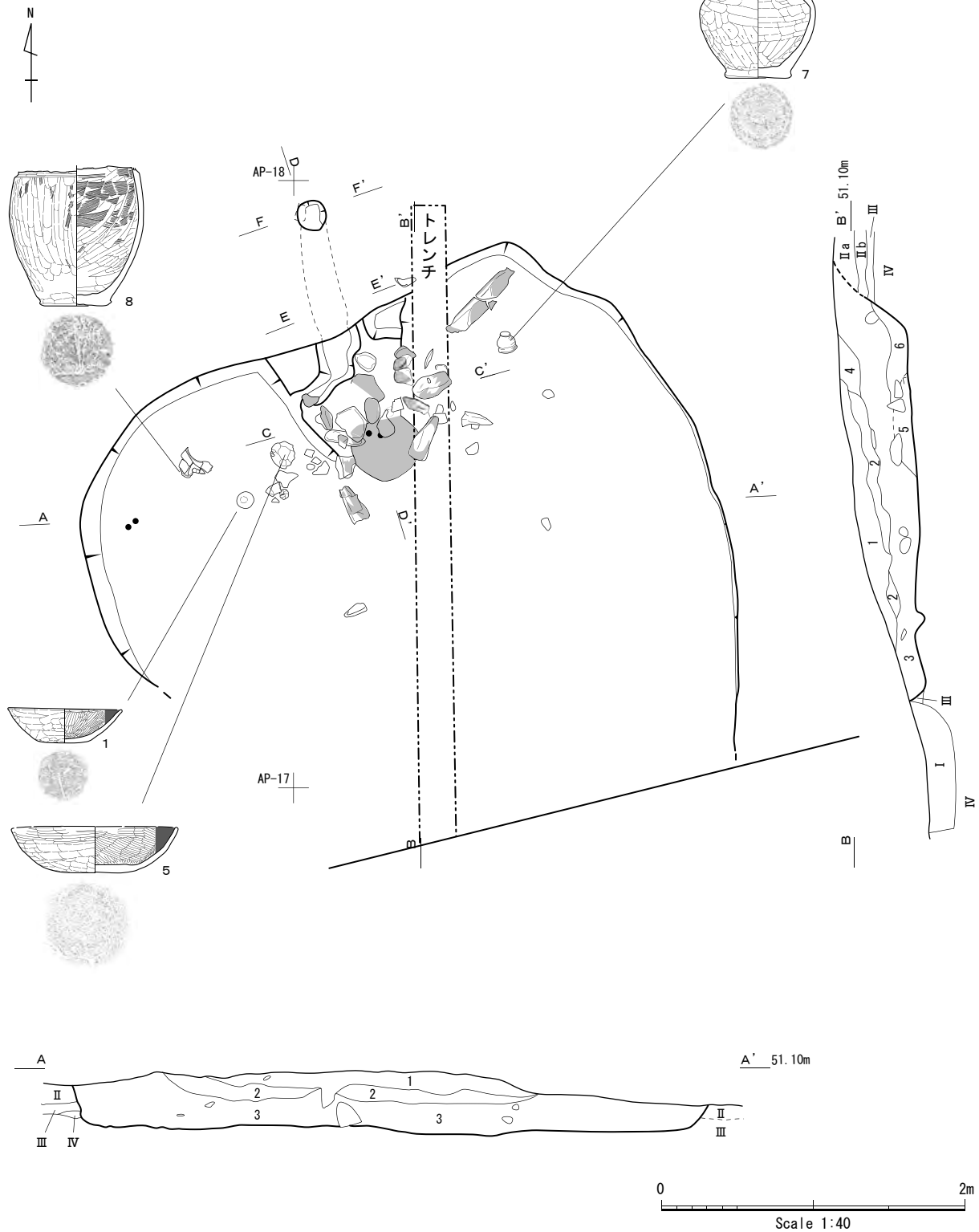
カマドの調査では、原形をとどめない袖・煙道・煙出しが確認された。カマドは右袖が壊され縣け口も遺存していない。右袖は左袖に比べて小さいので左袖よりも破壊が著しかったと考えられる。袖は褐色砂質土(袖の1層)と黒褐色土(袖の2層)で構築されている。

遺物 竪穴は縄文・続縄文時代の包含層を掘削しているため土器片、石器類が包含されていた。床面から土師器坏2点、小型甕2点が出土した。

第26図に示した土器のうちほぼ完形に復元できたのは1・5・7・8の4点で、他は図上復元である。1～6はすべて内面黒色処理のロクロ不使用の成形である。1は内湾して立ち上がる小型の内黒土師器坏。2は小型の坏で器内外面に明瞭な整形痕を残している。平底風丸底である。口縁部の成形は器外側が削られ口縁端部は薄く仕上げられ、わずかにナデ整形がある。体部には左下がり方向の調整痕がある。内面は良く磨かれ、上半部で横方向、下半部で左下がりとなる。他の土師器とは異なり、非常に薄いつくりとなっている。搬入品とみられる。3は底部を欠く土師器坏。1・2同様、口縁下は横方向のナデがみられ底部は丸底に近い平底を示すと考えられる。内部は黒色処理され、横または斜方向のミガキ痕が底部近くにみられる。4は坏底部破片。5は内黒の土師器坏。6は推定復元した土師器坏。外面はミガキが施されている。内面は黒色研磨される。7は土師器小型甕。口縁端部は丸くおさまる。口縁部はヨコナデ、頸部下には整形による段がみられる。体部外面は横・縦および斜め方向のヘラ状工具による調整がみられる。体部内面は横または斜め方向のナデ調整がみられる。8は口縁部が意図的に打ち欠かれているとみられるもので、体部上位が膨み、底部は明瞭に張り出す。内外面ともハケ目調整された後、外面はミガキ風ナデ、内面はナデが施される。9は6群土器胴部破片。10は半円状扁平打製石器で、石材はドレライトである。

時期等 床面から出土した土器から8世紀後半とみられる。

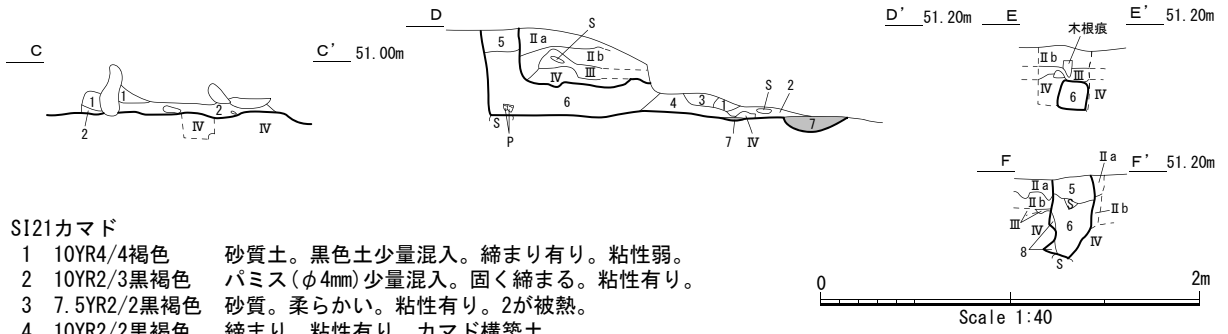
S I 2 1



S I 2 1

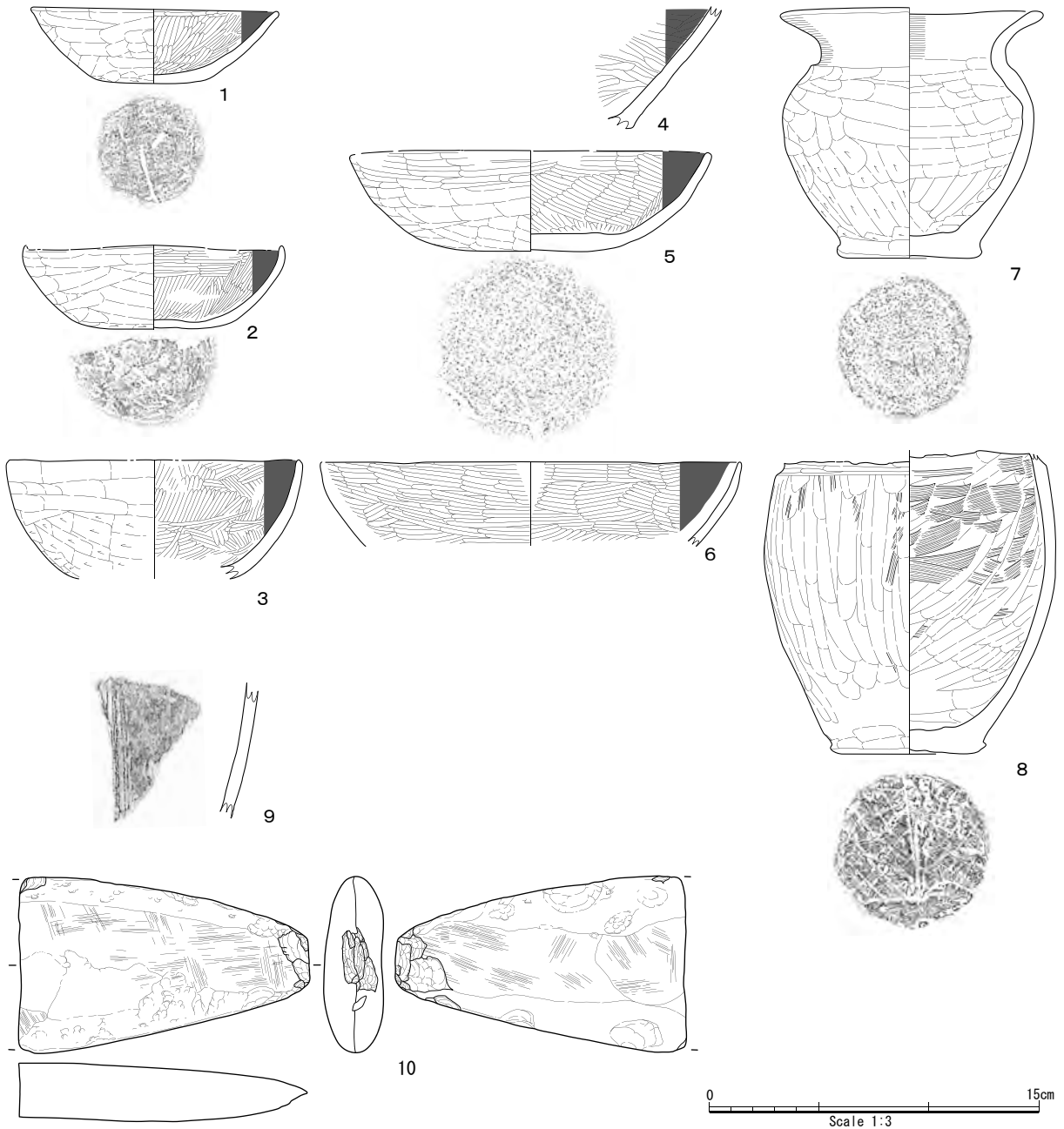
- | | | |
|---|-------------|-----------------------------------|
| 1 | 10YR2/1黒色 | IVブロック、パミス(φ2~5mm)少量混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 2 | 2.5Y4/2暗灰黄色 | 締まり、粘性なし。 |
| 3 | 10YR1.7/1黒色 | II。IV粒少量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 4 | 10YR2/2黒褐色 | 締まり有り。粘性弱。 |
| 5 | 10YR2/3黒褐色 | パミス(φ4mm)少量混入。固く締まる。粘性有り。カマドの2層。 |
| 6 | 10YR2/2黒褐色 | IVブロック少量混入。締まり有り。粘性弱。 |

第25図 竪穴住居跡21



SI21カマド

- | | | |
|---|-------------|---|
| 1 | 10YR4/4褐色 | 砂質土。黒色土少量混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 2 | 10YR2/3黒褐色 | パミス(φ4mm)少量混入。固く締まる。粘性有り。 |
| 3 | 7.5YR2/2黒褐色 | 砂質。柔らかい。粘性有り。2が被熱。 |
| 4 | 10YR2/2黒褐色 | 締まり、粘性有り。カマド構築土。 |
| 5 | 10YR2/1黒色 | 焼土(10YR2/3)粒、炭化物少量混入。To-a少量混入。柔らかい。粘性強。 |
| 6 | 10YR1.7/1黒色 | To-a粒少量混入。締まりなし。粘性強。 |
| 7 | 5YR4/6赤褐色 | 焼土。IV被熱。固く締まる。粘性なし。火床。 |
| 8 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒少量混入。締まりなし。粘性有り。 |



第26図 竪穴住居跡21と出土遺物

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡40 (第27図)

位置 調査区の西部A Z・B A・B B-17区に位置する。梁間は北側の調査区外に延びる可能性がある。

遺構 東西3間、南北1間の掘立柱建物跡である。東西は6.6m、南北は2mの東西棟建物で、方位はN-88°-Wである。柱間寸法は東西、南北それぞれほぼ等間である。柱掘方はややいびつながら、円形に近い。柱掘方は長径24~32cmである。柱痕跡は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡41 (第28図)

位置 調査区の西部A Z・B A・B B-16・17区に位置する。

遺構 4間(7.1m)×1間(1.7m)の東西棟建物で、方位はN-84°-Wである。Ⅳ層で確認された。柱間寸法は、桁行が西側より2間目が各々1.6mの他は、1.9mとほぼ等間となる。梁間は1.6~1.8mとなる。柱掘方は径20~30cm前後であまり大きくなく、埋土は黒色でしまりは比較的よい。柱痕跡は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

(3) 土坑

調査区内からは、フラスコ状ピットを含め45基の土坑が検出された。これらは全域に分布しているが、とくに調査範囲北東部と南西部に集中して分布している。

土坑3 (第29図)

位置 調査区の北東端A K-25区に位置する。

遺構 平面形は東西方向を長軸とするやや歪んだ円を呈する。規模は確認面で径70cm程、底面で径60cm程、底面の面積は0.33㎡である。確認面からの深さは25cm程で、底面はおおむね平坦である。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土は黒色土を主体とし、4層に区分される。

遺物 調査では、2群1点、5群1点の土器片と、1群2・3類各1点の石器、剥片1点、礫1点、計6点の遺物が出土した。第29図1・2は3層からの出土である。1は2群1類、2は5群1類土器の胴部破片。3は棒状石錐で、珪質頁岩製である。4は珪質頁岩の剥片の側縁部に簡単な刃部を作出しただけの削器。

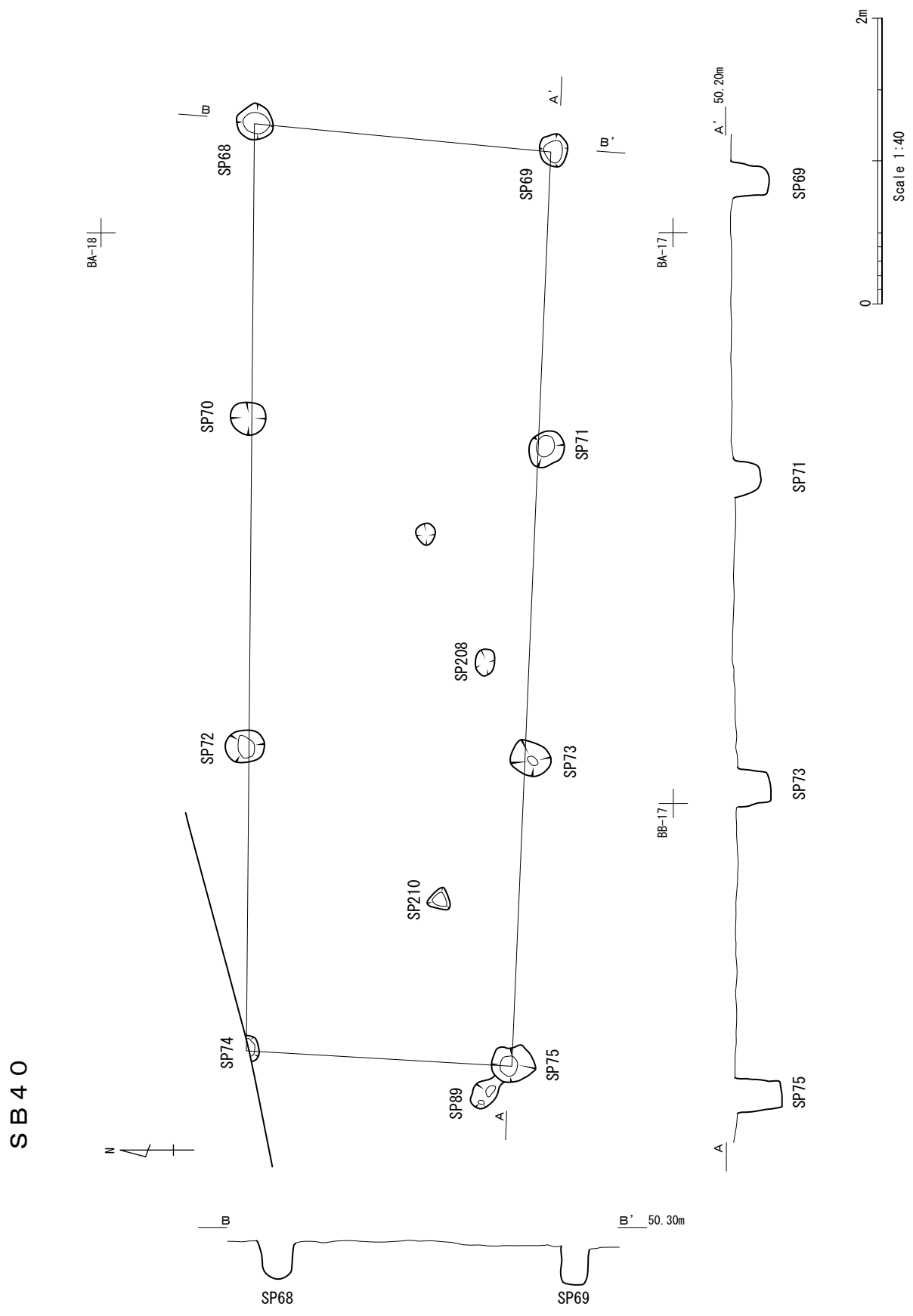
時期等 出土遺物や埋土の堆積状態から用途を特定する手がかりは得られていない。時期は伴出遺物がなく決め手に欠くものの、埋土の堆積状態や出土遺物からみて、5群土器期に構築された可能性が考えられる。

土坑4 (第30図)

位置 調査区の北東部A K-24区に位置する。

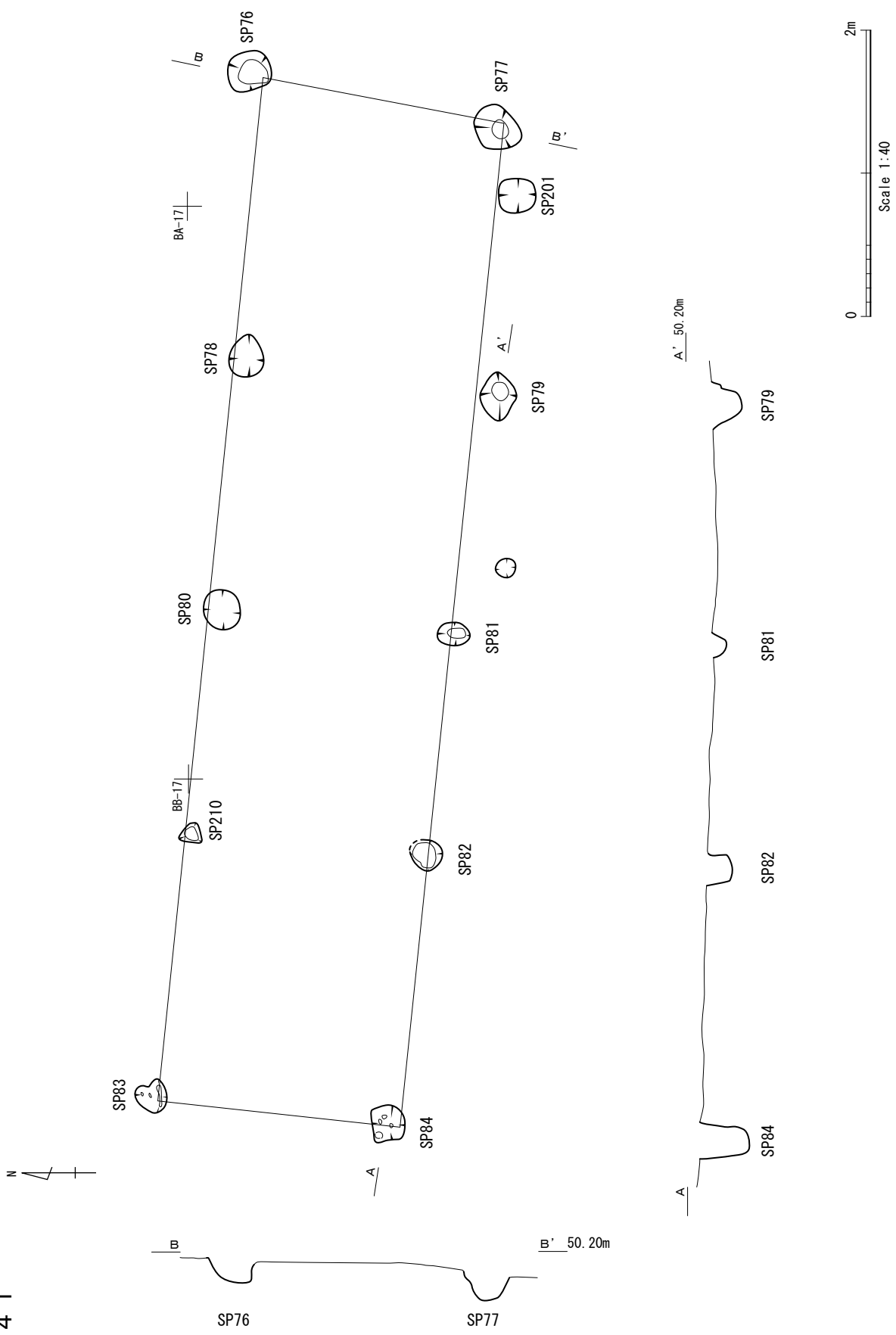
遺構 西半部は調査区外に拡がり、平面形は不明である。規模は確認部分で径1.3m程、底面では径1.2m程である。確認面からの深さは60cm程で、底面は2段構造となっており、南側へ傾斜している。壁の立ち上がりは大きくゆがむ。埋土は黒褐色土を主体とし、4層に区分される。

遺物 遺物量は3群土器1点、剥片2点、計3点である。



第27図 掘立柱建物跡40

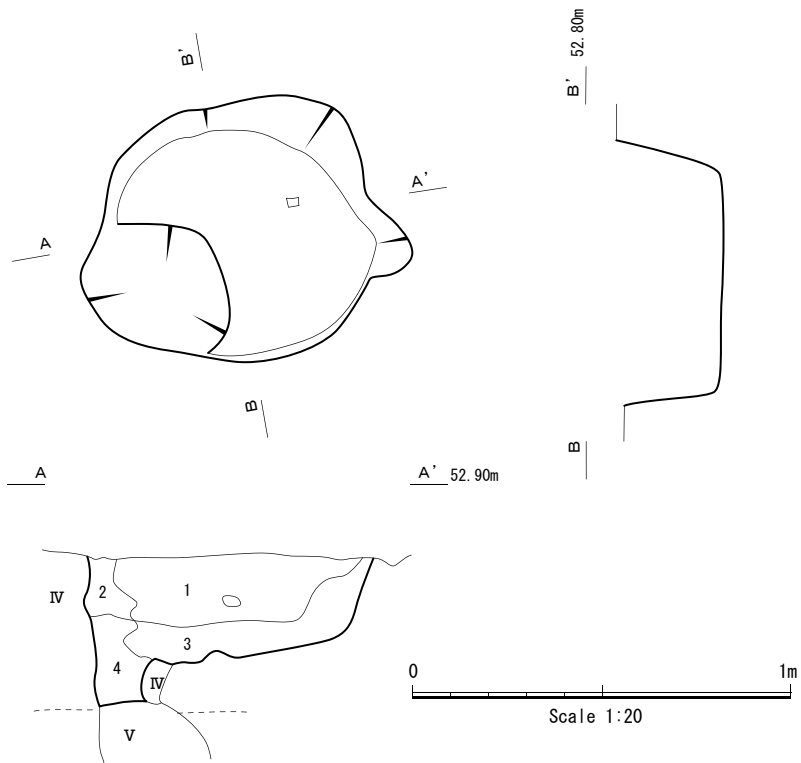
SB41



第28図 掘立柱建物跡41

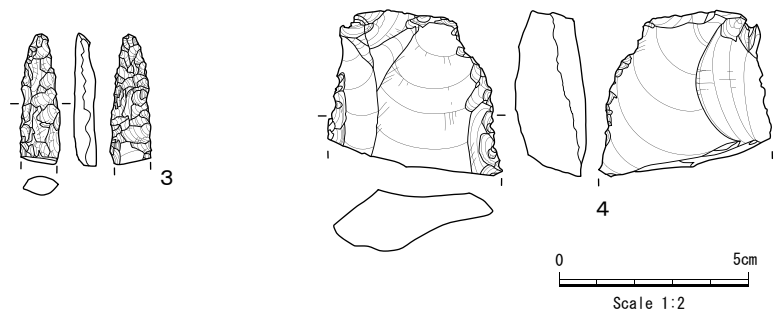
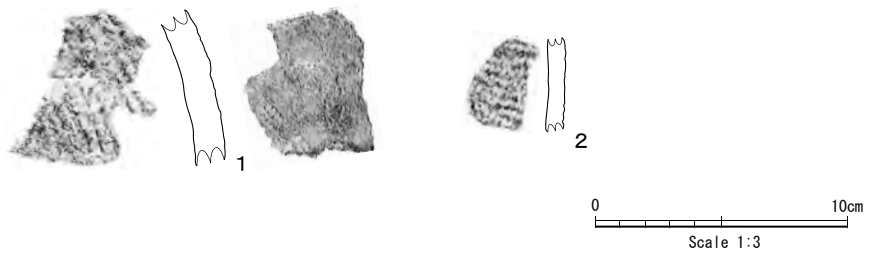
SK 3

AL-25b



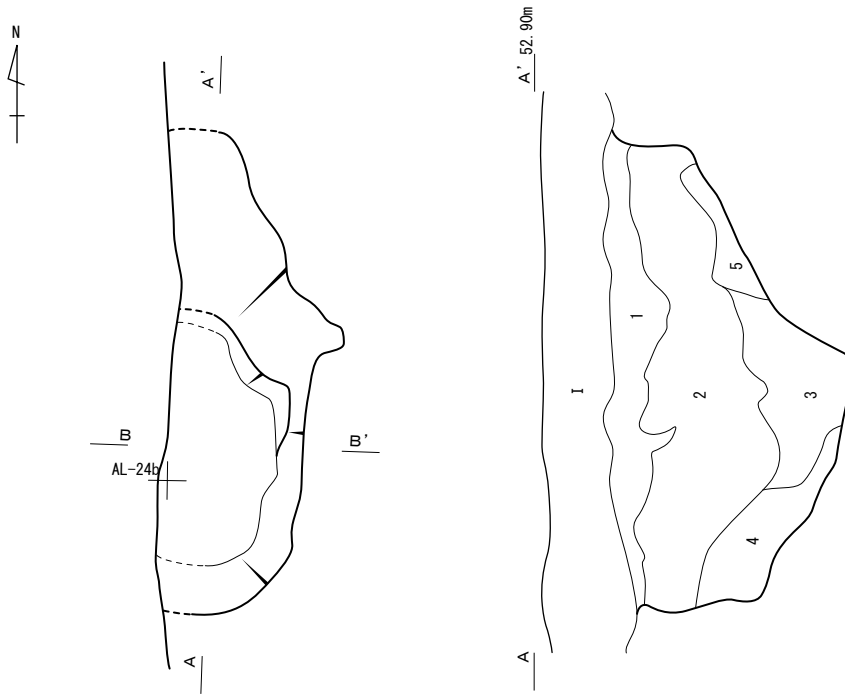
SK 3

- | | |
|-----------------|----------------------------|
| 1 10YR1.7/1黒色 | IV粒(φ1~5mm)少量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 2 2.5Y3/2黒褐色 | IV粒(φ2~3mm)少量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 3 10YR3/2黒褐色 | IV粒(φ2~3mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 4 10YR4/3にぶい黄褐色 | 固く締まる。粘性弱。 |



第29図 土坑3と出土遺物

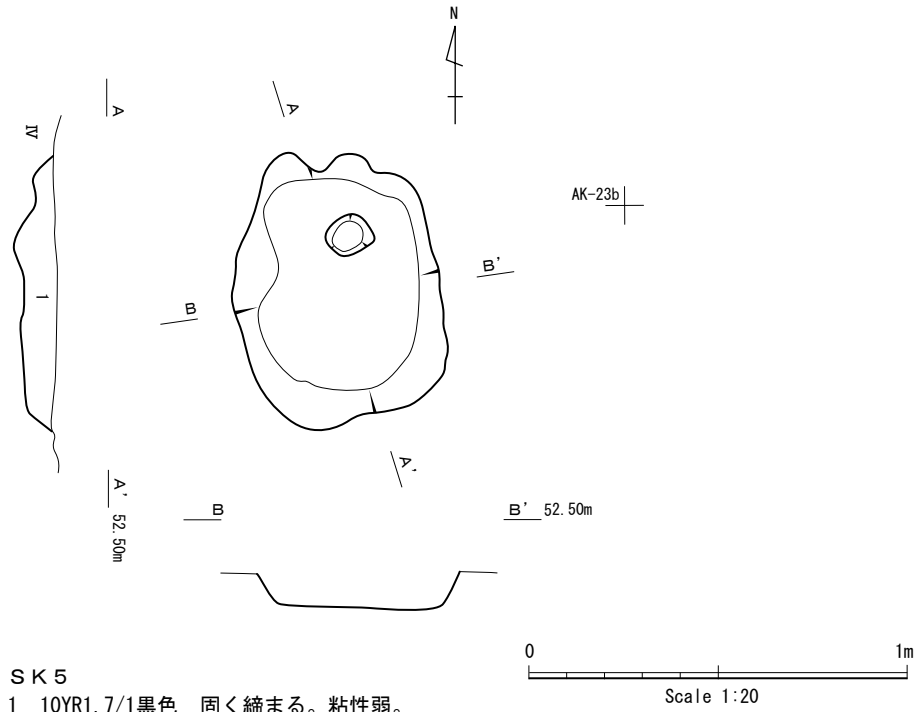
SK 4



SK 4

- 1 10YR1.7/1黒色 II。固く締まる。粘性弱。
- 2 10YR2/2黒褐色 パミス(φ1~5mm)微量混入。固く締まる。粘性弱。
- 3 10YR3/2黒褐色 パミス(φ1~2mm)微量混入。締まりよし。
- 4 10YR4/4褐色 シルト。IV>II。固く締まる。粘性なし。
- 5 10YR3/3暗褐色 シルト。IV主体。固く締まる。粘性なし。

SK 5



SK 5

- 1 10YR1.7/1黒色 固く締まる。粘性弱。

第30図 土坑4・5

時期等 出土遺物や埋土の堆積状態から時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑 5 (第30図)

位置 調査区の北東部 A K - 23 区に位置する。

遺構 平面形は南北方向を長軸とするやや歪んだ円を呈する。規模は確認面で長径70cm、短径50cm程、底面では長径50cm、短径40cm程で、底面の面積は0.19㎡である。確認面からの深さは10cm程と浅く、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒色土1層のみである。遺物は礫が1点出土したのみで、用途や時期は不明である。

土坑 6 (第31図)

位置 調査区の北東部 A I ・ A J - 23 ・ 24 区に位置する。

遺構 平面形はやや歪んだ円である。規模は確認面で径30cm、底面では径1.2m程で、底面の面積は4.4㎡である。底面は平坦である。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は、ロームを多く混じる黒色土と黒褐色を主体とし、10層に区分される。堆積状態は埋め戻された様相を示している。

遺物 遺物量は3群土器片4点、1群4・5・7類各1点の石器と、剥片類6点、計13点である。第31図1～3は3群土器胴部破片。4は水冷破碎岩製の石斧。5は泥岩製の石皿で坑底出土。

時期等 本土坑は、出土遺物や遺構の形態から、3群3～4類土器期の貯蔵穴とみなされる土坑である。

土坑 7 (第32・33図)

位置 調査区の北東部 A J - 22 ・ 23 区に位置する。

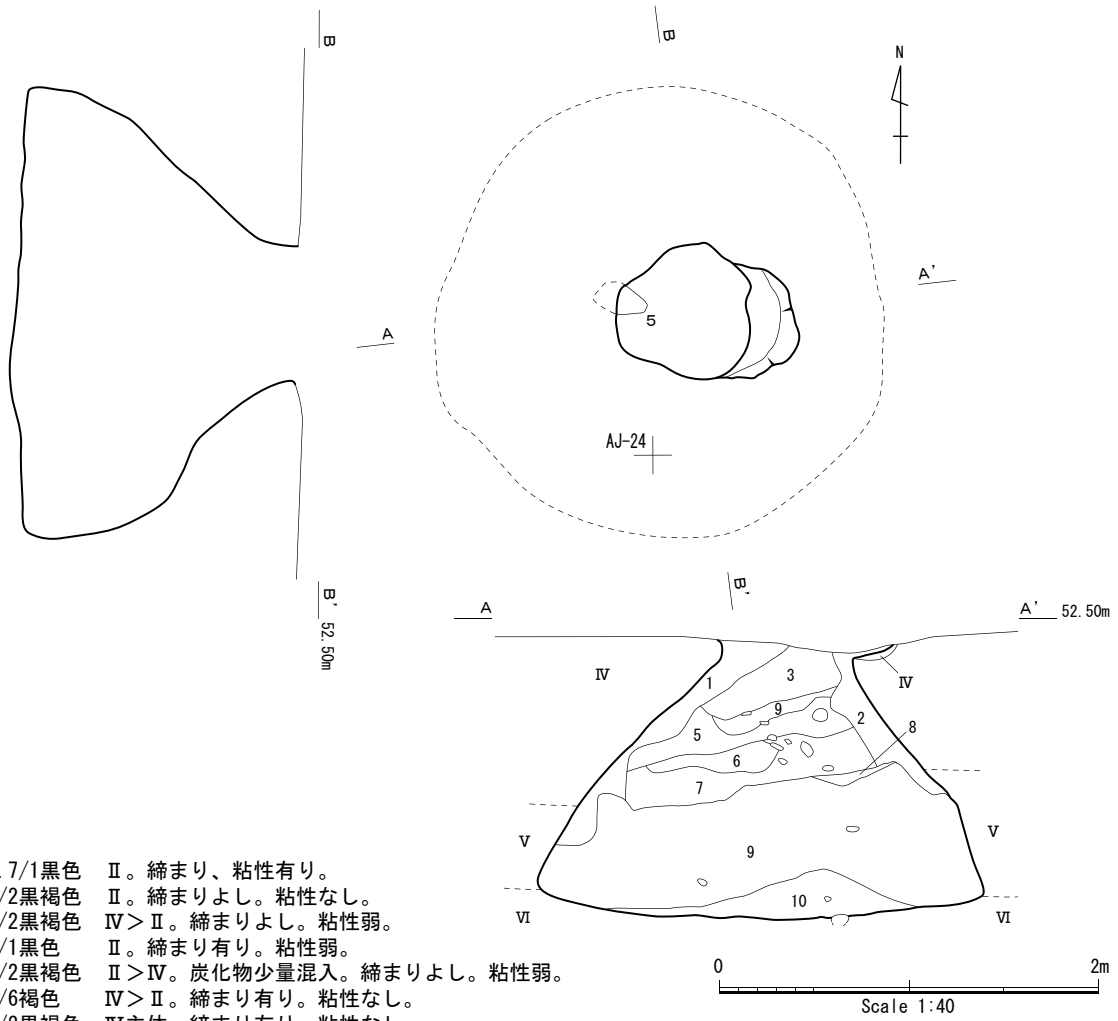
遺構 平面形はやや歪んだ円である。規模は確認面で径1.6m程、底面では径2.2m程で、底面の面積は3.72㎡である。確認面からの深さは1.63mと44基の土坑の中でもっとも深い。底面は平坦で、壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土と黒褐色土を主体とし、13層に区分される。堆積状態は、埋め戻された様相を示している。

遺物 土坑内からは、1群2点、2群1点、3群3～4類47点、5群2点の土器片、1群3類2点、4類1点、5類1点、6類1点の石器と剥片類5点、礫類3点、64点が出土した。このうち、3群土器は3個体分に相当し、下部の黒色土を主体とする土層からまとまった状態で出土している。

第33図は本遺構出土の遺物である。1は4群3類土器。口径19cm、器高26cm、底径10cm程の完形土器で、口縁部がわずかながら外反する器形である。口縁部に2条の縄線文がめぐり、その間に2列の刺突文がめぐり、胴上半部には結束羽状縄文、胴下半部は撚糸文が施文される。2は4群4類土器。口径25cm、器高27cm、底径14cm程の完形土器である。口縁部に4条の縄線文と、2列の刺突文がめぐり、地文は木目状撚糸文が施される。5は3群4類土器口縁。6～10は3群土器片。6の口縁には結束羽状縄文がめぐり、6～8は胴部破片。8は器形が異質であるが、繊維を多く含み、3群土器と考えたい。10は底縁の張り出しのないタイプである。3は1群土器胴部片。4は2群土器口縁部破片。11・12は珪質頁岩製の石匙。13は立方形状擦石で、石材はドレライトある。

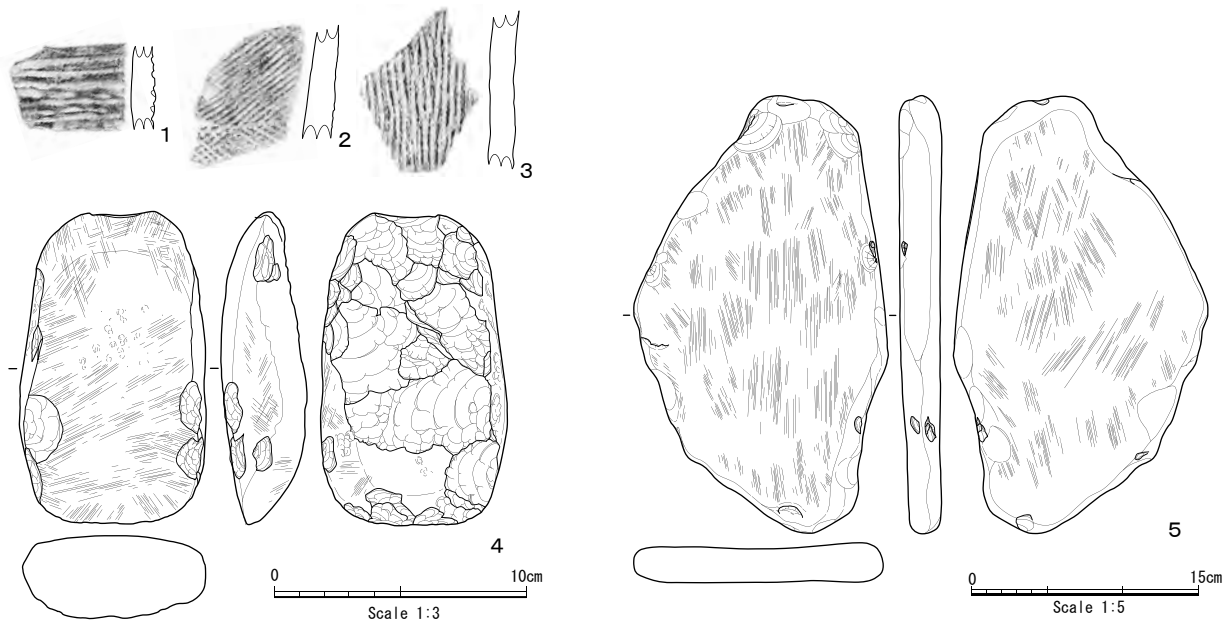
時期等 本土坑は、出土遺物や遺構の形態から、3群4類土器期の貯蔵穴とみなされる土坑である。

SK 6



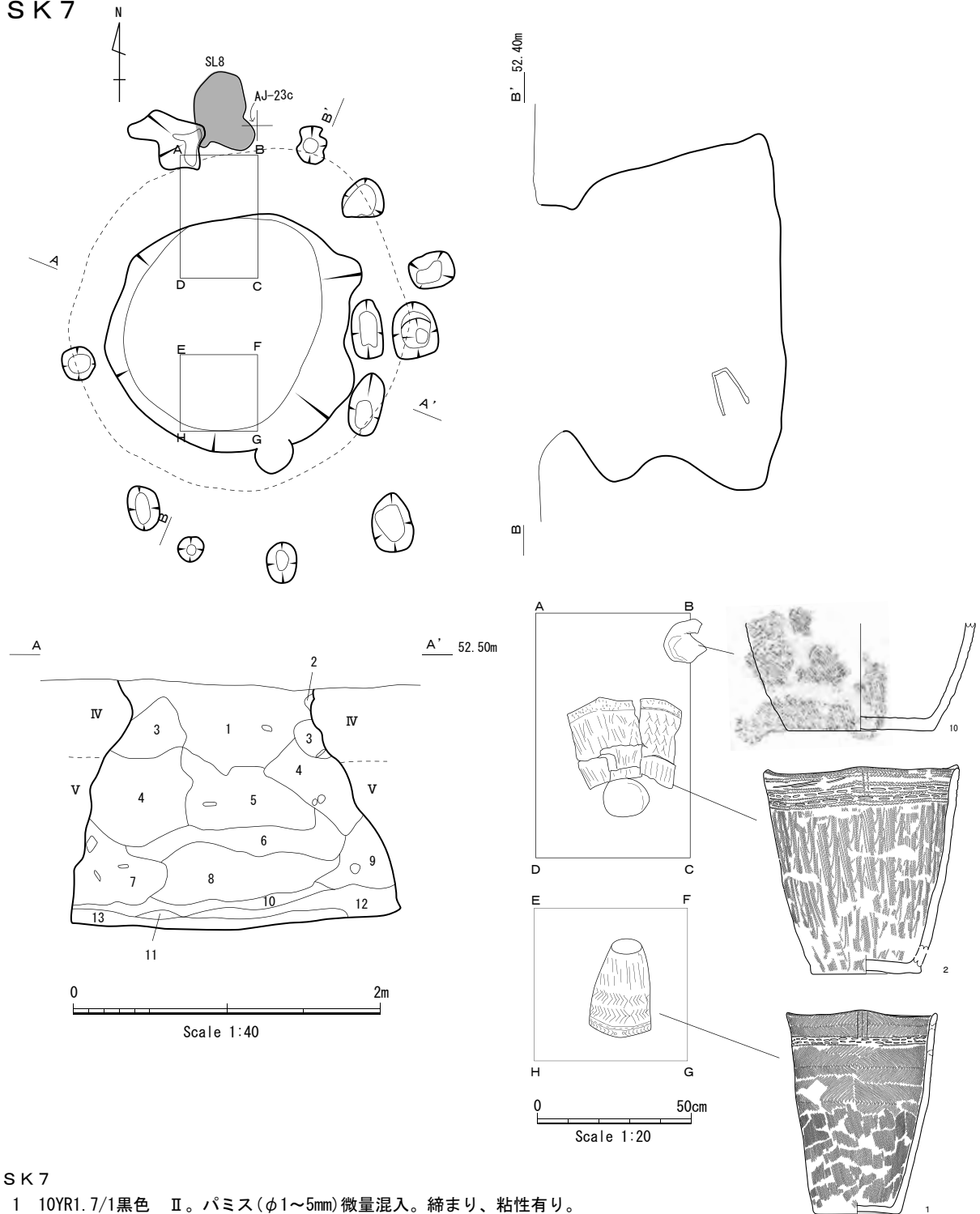
SK 6

- 1 10YR1.7/1黒色 II。締まり、粘性有り。
- 2 10YR2/2黒褐色 II。締まりよし。粘性なし。
- 3 10YR2/2黒褐色 IV>II。締まりよし。粘性弱。
- 4 10YR2/1黒色 II。締まり有り。粘性弱。
- 5 10YR2/2黒褐色 II>IV。炭化物少量混入。締まりよし。粘性弱。
- 6 10YR4/6褐色 IV>II。締まり有り。粘性なし。
- 7 10YR2/2黒褐色 IV主体。締まり有り。粘性なし。
- 8 10YR1.7/1黒色 II>IV。締まりよし。粘性有り。
- 9 10YR1.7/1黒色 II。締まりよし。粘性有り。
- 10 10YR2/2黒褐色 V主体。砂質。礫多量混入。固く締まる。粘性弱。



第31図 土坑6と出土遺物

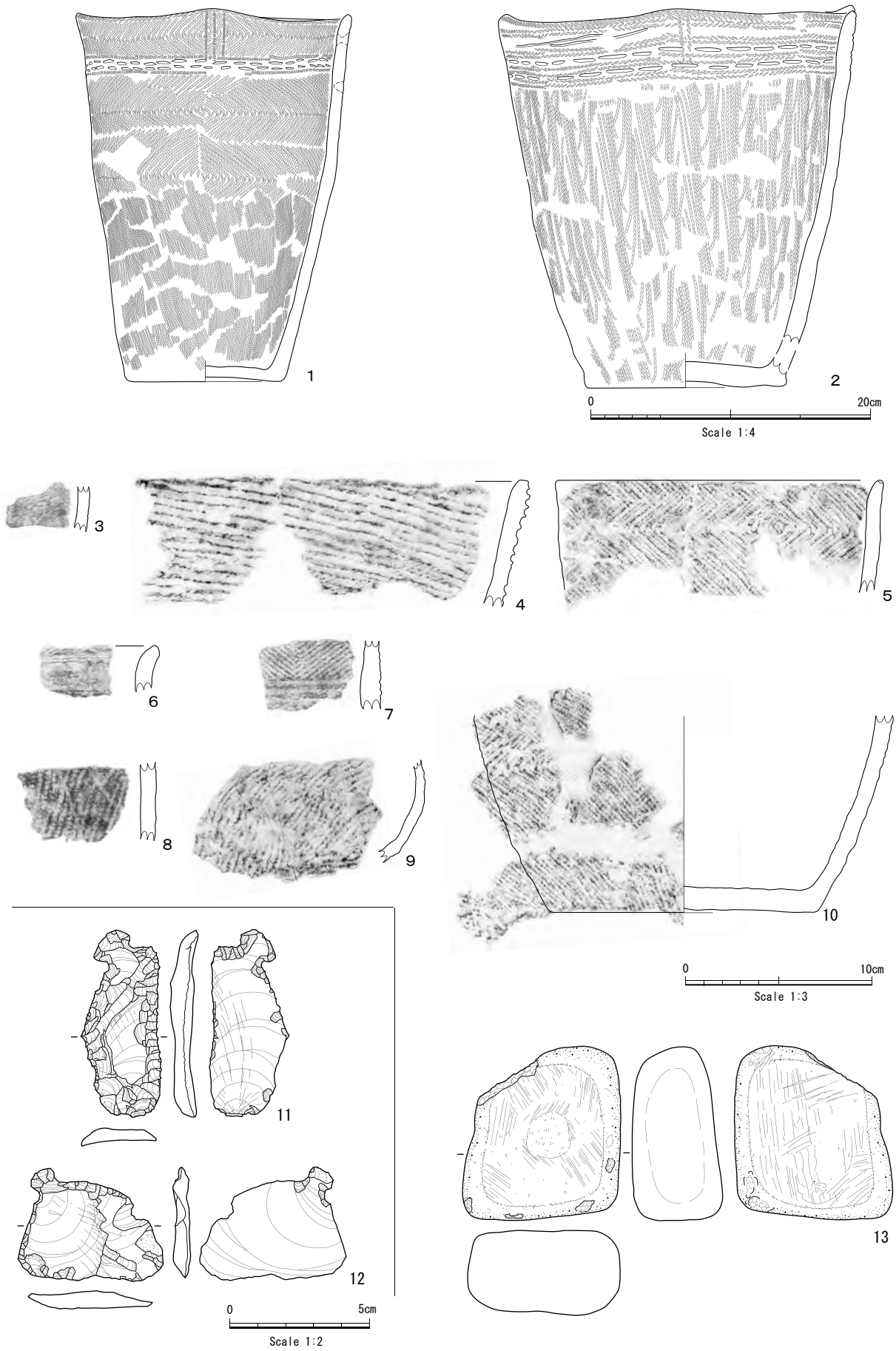
SK 7



SK 7

- | | | |
|----|-------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1黒色 | II。パミス(φ1~5mm)微量混入。締まり、粘性有り。 |
| 2 | 10YR2/3黒褐色 | 締まりよし。粘性弱。 |
| 3 | 10RY4/6褐色 | IV。固く締まる。粘性なし。崩落土。 |
| 4 | 10YR2/2黒褐色 | II > IV。締まり、粘性有り。 |
| 5 | 10YR2/1黒色 | IV粒混入。締まり、粘性有り。 |
| 6 | 10YR1.7/1黒色 | 炭化物、IVブロック少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 7 | 10YR1.7/1黒色 | IVブロック少量混入。締まりよし。粘性有り。 |
| 8 | 10YR2/1黒色 | 炭化物やや多い。IVブロック少量混入。締まりよし。粘性有り。 |
| 9 | 10YR2/1黒色 | IV粒少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 10 | 10YR2/2黒褐色 | 炭化物少量混入。V主体。締まり、粘性有り。 |
| 11 | 10YR4/6褐色 | IV。締まり、粘性有り。 |
| 12 | 10YR2/2黒褐色 | 締まり有り。粘性弱。 |
| 13 | 10YR3/2黒褐色 | V主体。締まりよし。粘性有り。 |

第32図 土坑 7



第33図 土坑7出土遺物

土坑9（第34図）

位置 調査区の北東部A I - 23区に位置する。

遺構 平面形は東西方向を長軸とするやや歪んだ円である。規模は確認面で径1.6m、底面で径2m程、底面の面積は3.04㎡である。確認面からの深さは1.24mで、底面は平坦である。中央に底面ピットを有する。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土と黒褐色土を主体とし、11層に区分される。堆積状態は土砂が人為的に廃棄されて埋まっていった様相を示しており、各層には礫が多量に含まれている。

遺物 土坑の北西隅にはほぼ完形の3群4類土器が1個置かれている。土坑内から出土した遺物はこの土器1個のほか、2群1点、3群4点、5群2点の土器片、剥片類9点、礫類2点、計19点である。第34図1は口径20cm、器高31cm、底径11cm程の完形土器で、頸部が内側へ屈折し、口縁部が外反する器形である。口縁～頸部にかけて横位の縄線文が11条めぐり、縦位の縄線文が3条施される。縦横の縄線文の間には刺突文が施される。地文は胴上半部が結束羽状縄文、胴下半部が撚糸文である。2は3群4類土器と考えられる口縁。土坑7から出土した第33図8と同一個体である。3は2と類似した土器であるが、無文である。4は3群土器片。底縁は張出しのないタイプである。

時期等 出土遺物および遺構の形態から、3群4類土器期の貯蔵穴とみなされる土坑である。

土坑10（第35図）

位置 調査区の北東端A I - 24区に位置し、土坑の北部は調査区外に広がる。土坑11を切って構築している。

遺構 平面形は円を呈するものと思われ、規模は確認面で、径2m程と土坑65に次いで大きい。確認面からの深さは1.41mと土坑7・6に次いで深く掘り込まれている。底面は平坦で、壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒褐色土を主体とし、16層に区分される。堆積状態は土砂が人為的に廃棄されて埋まっていった様相を示している。

遺物 土坑内から出土した遺物は、2群1点、3群3点の土器片、1群6類1点の石器と剥片類12点、計17点である。第35図1は2群土器胴部破片。

時期等 本土坑は、出土遺物や遺構の形態からみて、3群土器期の貯蔵穴と考えられる。

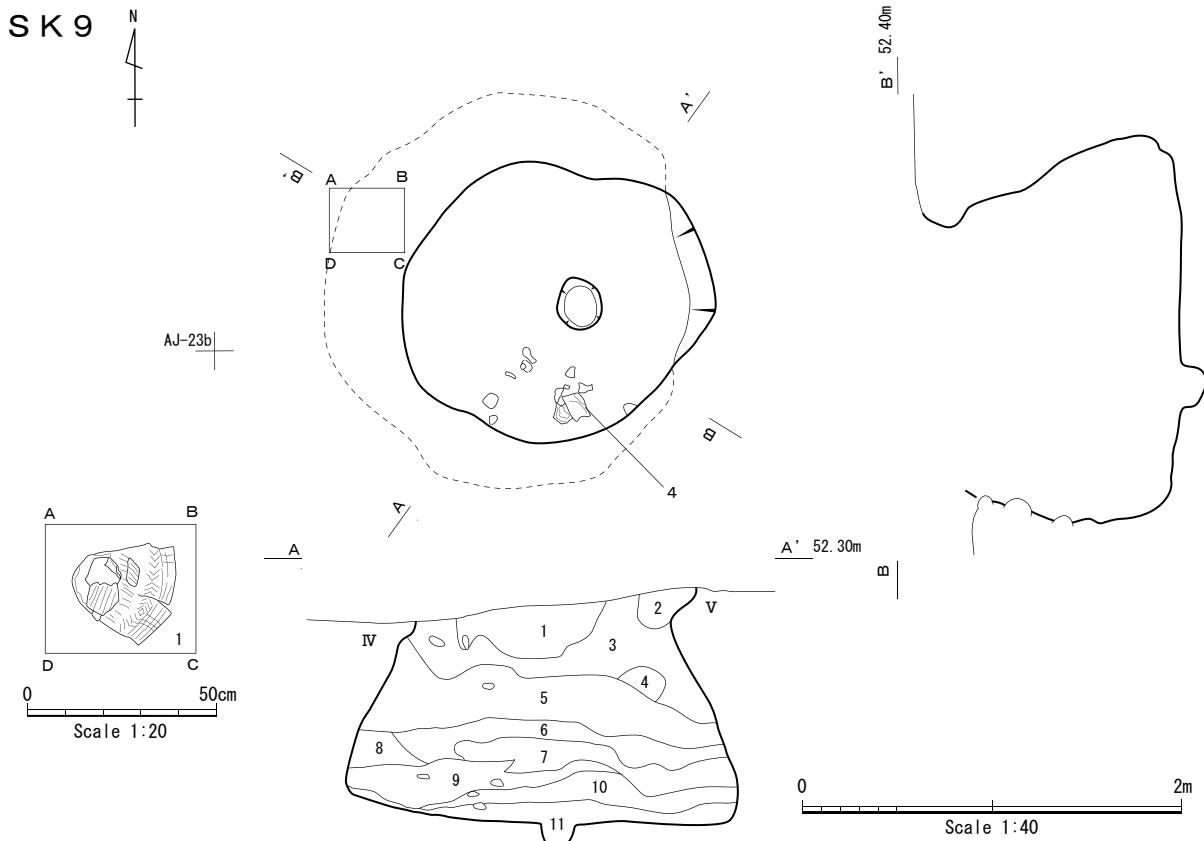
土坑11（第35図）

位置 前述した土坑10の北西側に重複し、新旧関係は本土坑が古い。

遺構 北東半部は調査区外に拡がり、平面形は不明である。規模は、確認面で径1.1m程、底面で0.9m程である。確認面からの深さは40cm程で、底面は南東へと傾斜する。浅皿状に撓み、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒色土を主体とし、2層に区分される。堆積状態は、流れ込みによる自然堆積の様相を示している。

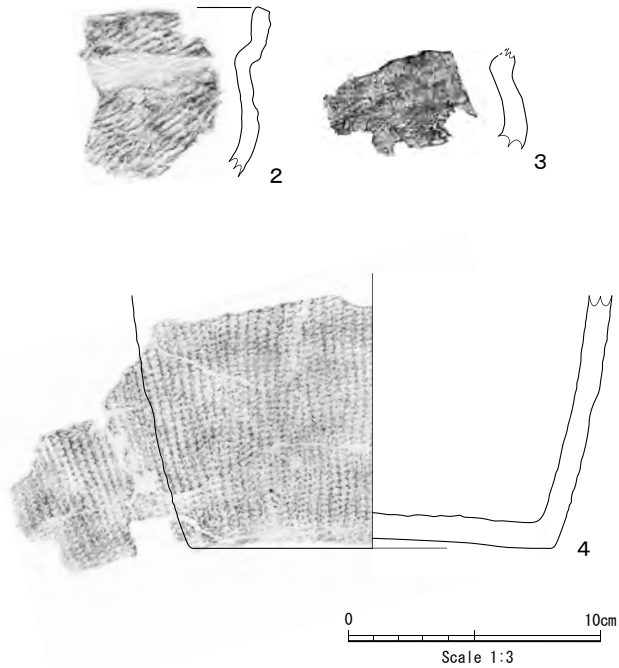
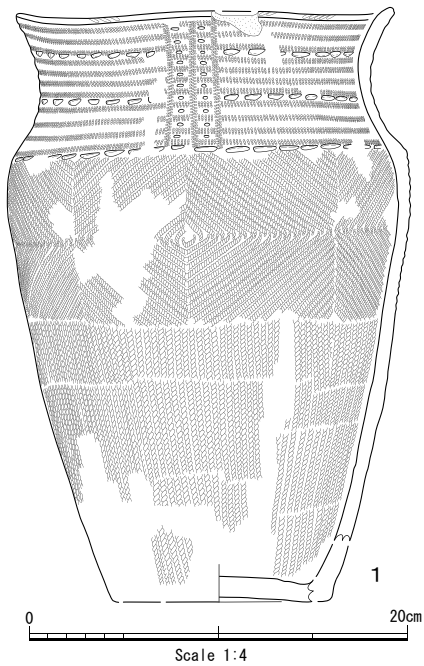
遺物 土坑内からは、1群1点、2群3点の土器片と、1群3類1点の石器、剥片類6点、計11点の遺物が出土した。第35図2・3は内外面とも縄文が付く。ともに2群1類の早稲田5類土器。4は珪質頁岩製の削器。

時期等 埋土の堆積状態からみると掘りっぱなしであったことが窺えるものの、用途を特定するには至っていない。時期は伴出遺物がなく決め手に欠くものの、2群土器期に属する可能性がある。



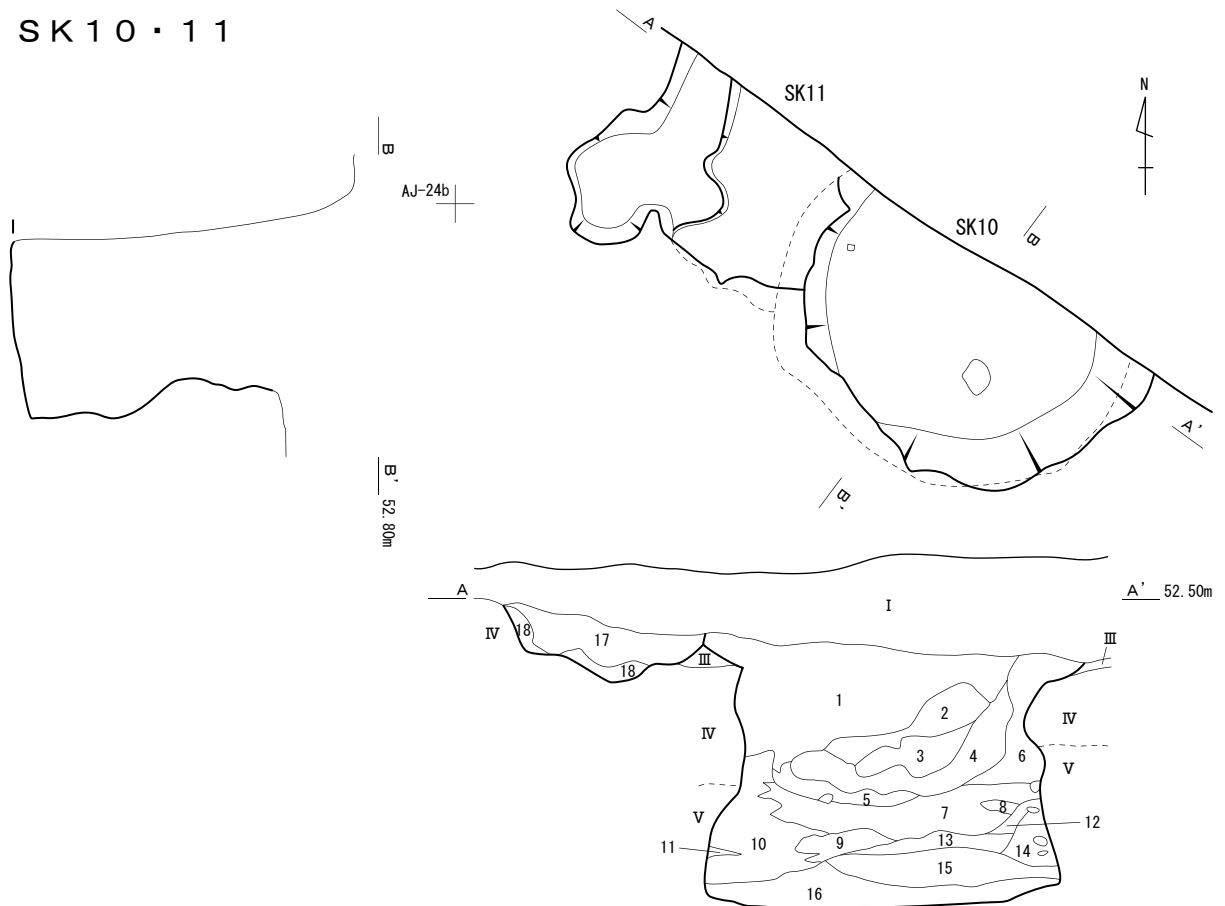
SK 9

- | | | |
|----|-------------|---|
| 1 | 10YR1.7/1黒色 | II。黒褐色土少量、IV粒、パミス(φ3~12mm)微量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 2 | 10YR5/6黄褐色 | IV>III。砂質。固く締まる。粘性なし。 |
| 3 | 10YR2/2黒褐色 | IV粒、パミス(φ2~3mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 4 | 10YR2/2黒褐色 | IVブロック少量混入。締まり有り。粘性なし。 |
| 5 | 10YR2/1黒色 | 炭化物少量、礫(φ5~30mm)やや多量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 6 | 10YR3/2黒褐色 | 砂質。V主体。炭化物、礫(φ3~10mm)少量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 7 | 10YR1.7/1黒色 | II。炭化物、IV少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 8 | 10YR2/1黒色 | 炭化物少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 9 | 10YR3/3暗褐色 | V主体。砂質。炭化物微量、礫少量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 10 | 10YR2/2黒褐色 | 炭化物少量混入。締まり有り。粘性やや強い。 |
| 11 | 10YR3/4暗褐色 | V主体。締まりよし。粘性弱。 |



第34図 土坑9と出土遺物

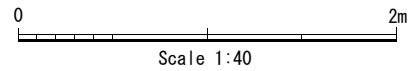
SK10・11



SK10

- 1 10YR1. 7/1黒色
- 2 10YR2/2黒褐色
- 3 10YR3/2黒褐色
- 4 10YR2/2黒褐色
- 5 10YR1. 7/1黒色
- 6 10YR2/2黒褐色
- 7 10YR2/2黒褐色
- 8 10YR5/6黄褐色
- 9 10YR1. 7/1黒色
- 10 10YR4/6褐色
- 11 10YR1. 7/1黒色
- 12 10YR2/2黒褐色
- 13 10YR4/4褐色
- 14 7. 5YR2/3極暗褐色
- 15 7. 5YR1. 7/1黒色
- 16 7. 5YR1. 7/1黒色

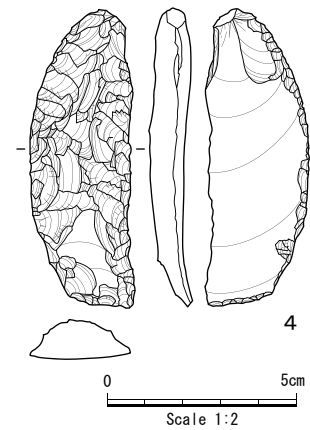
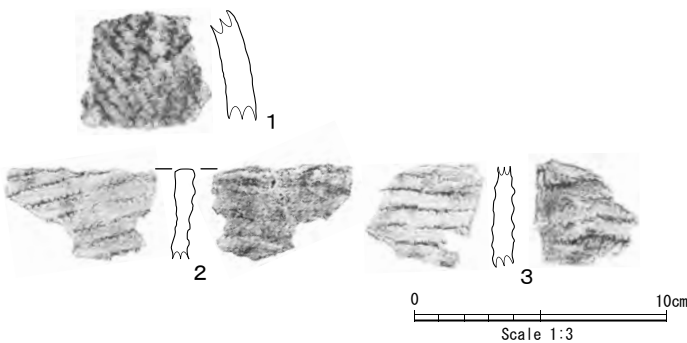
- II。パミス(φ2~5mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。
- II。パミス(φ2~5mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。
- IV>III。締まり有り。粘性なし。
- III主体。シルト質。締まり有り。粘性なし。
- IV粒少量混入。締まり、粘性有り。
- 締まり弱。粘性なし。
- IV粒少量混入。締まり、粘性有り。
- IV。砂質。締まり、粘性なし。
- II。締まりよし。粘性有り。
- IV主体。砂質。柔らかい。粘性なし。崩落土。
- II。締まり有り。粘性強。
- 礫混入。締まり、粘性なし。
- IV>II。砂質。締まり有り。粘性なし。
- V。砂。締まり有り。粘性なし。
- II。IVブロック少量混入。締まり、粘性有り。
- II。IV粒少量混入。固く締まる。粘性有り。



SK11

- 17 10YR1. 7/1黒色
- 18 10YR3/2黒褐色

- II。固く締まる。粘性弱。
- III。パミス(φ2~3mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。



第35図 土坑10・11と出土遺物

土坑12 (第36図)

位置 調査区の北東部A J - 22区に位置する。土坑7の南側、上位平坦面より検出した。

遺構 平面形は東西方向を長軸とするやや歪んだ長円を呈する。規模は確認部分で径70cm程、底面では径40cm程で、底面の面積は0.1㎡である。確認面からの深さは40cm程で、底面は南西へと傾斜する。壁の立ち上がりは上部は外へ大きく開く。埋土はII層を主体とする1層のみである。

遺物 埋土中に含まれる礫は20点以上にのぼる。これ以外の遺物は出土しなかった。

時期等 出土遺物や埋土の堆積状態からは時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑13 (第37図)

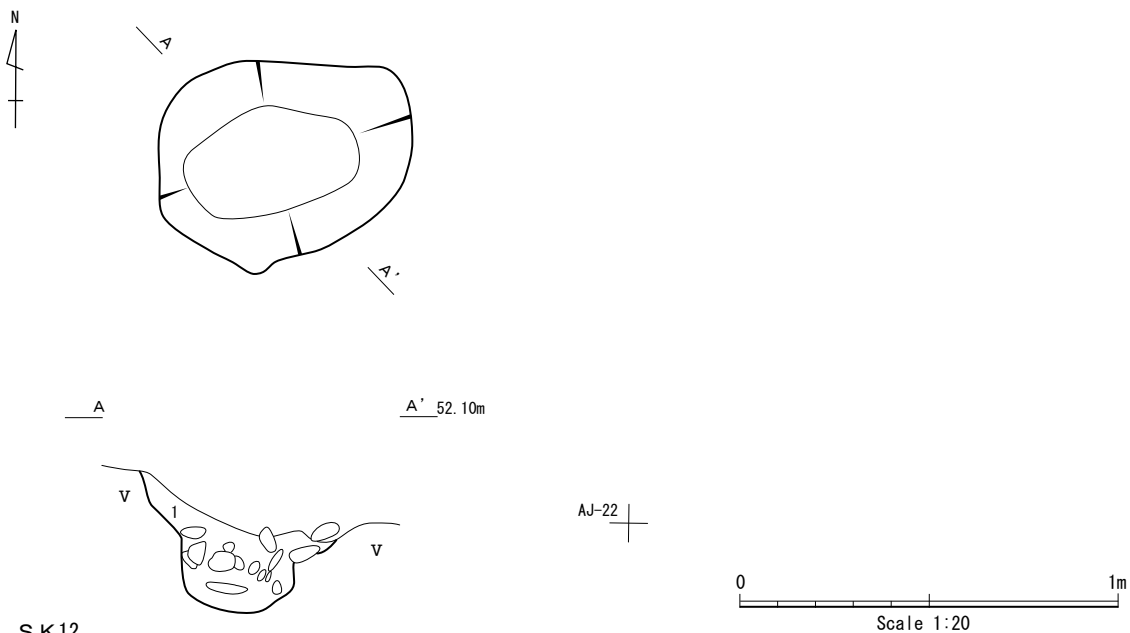
位置 調査区の北東部A I・A J - 21区に位置する。土坑93の北東側で検出した。

遺構 平面形はやや歪んだ円である。規模は確認面で径70cm程、底面では径1.8m程で、底面の面積は2.64㎡である。確認面からの深さは1.2m程で平坦である。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒褐色土を主体とし、10層に区分される。堆積状態は、流れ込みによる自然堆積の様相を示している。

遺物 土坑内からは、1群1点と2群4点、3群15点の土器片、剥片類13点、計33点の遺物が出土した。第37図1～6はすべて3群の円筒下層式土器。1は口縁がやや外反し、結末羽状縄文が施文される。2～4は胴部破片。5・6は撚糸文を地文とする底部破片。7は凝灰岩で自然の穿孔を利用した石製品である。長さ6cm。

時期等 出土遺物や埋土の堆積状態からみて、貯蔵穴とみなされる土坑である。時期は伴出遺物がなく決め手に欠くものの、埋土の土器片の中に3群土器が7点含まれていることから推測すれば、少なくとも当該期以降に構築されたものと考えられる。

SK 12

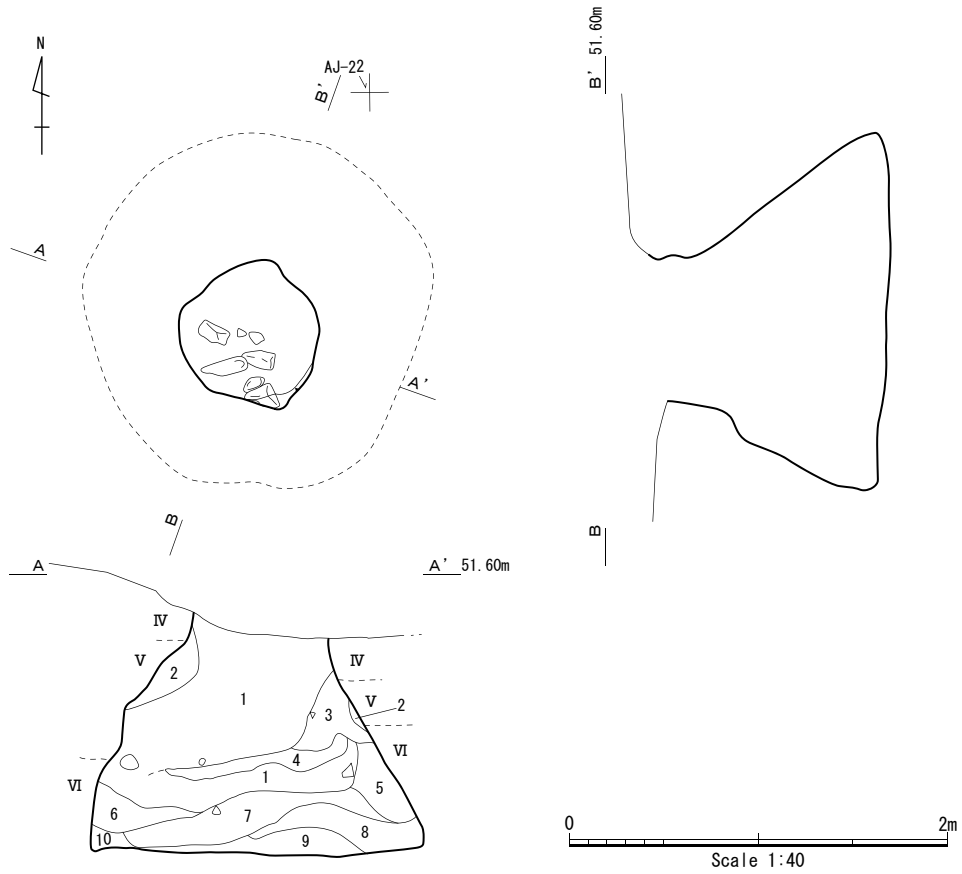


SK 12

1 10YR2/1黒色 礫非常に多量混入。締まりよし。粘性弱。

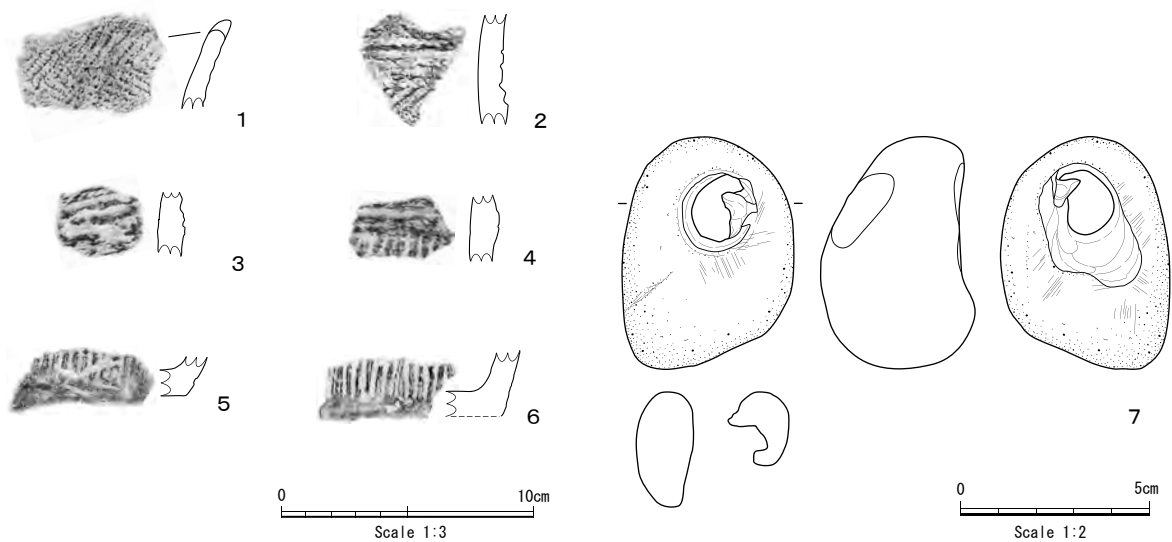
第36図 土坑12

SK13



SK13

- | | | |
|----|-------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR2/1黒色 | II。礫(φ5~30mm)やや多量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 2 | 10YR3/2黒褐色 | II>IV。礫少量混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 3 | 10YR2/2黒褐色 | 炭化物、礫混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 4 | 10YR3/2黒褐色 | IV主体。礫非常に多量混入。砂質。締まり弱い。粘性なし。 |
| 5 | 10YR2/2黒褐色 | 締まり、粘性有り。 |
| 6 | 10YR2/1黒色 | II。締まり、粘性有り。 |
| 7 | 10YR3/2黒褐色 | IV主体。固く締まる。粘性有り。 |
| 8 | 10YR1.7/1黒色 | II。締まりよし。粘性有り。 |
| 9 | 10YR3/2黒褐色 | IV主体。締まりよし。粘性有り。 |
| 10 | 10YR6/6明黄褐色 | IV主体。締まりよし。粘性有り。 |



第37図 土坑13と出土遺物

土坑19 (第38・39図)

位置 調査区の北東部A J - 23・24区に位置する。土坑7の北側に隣接する。

遺構 平面形は東西方向を長軸とするやや歪んだ長円を呈する。規模は確認面で径80cm程、底面では径2.3m程、底面の面積は4.16㎡で、45基の土坑の中では大きい部類の土坑である。確認面からの深さは1.4m程である。底面は平坦で、中央に底面ピットを有する。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒褐色土と黒色土を主体とし、14層に区分される。堆積状態は土坑6と同様に埋め戻された様相を呈している。

遺物 土坑内からは2群3点と3群44点、5群4点の土器片、剥片類16点、計67点の遺物が出土した。第38図1・2は2群土器胴部破片。2は縄文を両面に施文する。3～5・第39図6～12は3群の円筒下層式土器。3～6は口縁で、4・5は縄線文が施される。7～10は胴部破片。11・12は底部破片。13は5群と考えられる口縁。14・15は珪質頁岩製の削器。

時期等 出土遺物や埋土の堆積状態から、3群土器期の貯蔵穴と考えられる。

土坑20 (第40図)

位置 調査区の東部A L - 20区に位置する。住居跡1と隣接する。

遺構 平面形はやや歪んだ円を呈する。規模は、規模は確認面で径70cm程、底面で径60cm程、底面の面積は0.32㎡である。確認面からの深さは40cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。埋土は黒色土を主体とし、4層に区分される。

遺物 土坑内からは剥片類6点、礫類数点が出土したのみである。

時期等 出土遺物や埋土の堆積状態からは時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑24 (第40図)

位置 調査区の東部A P - 18区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ隅丸五角形を呈する。規模は確認面で径1m程、底面で径90cm程、底面の面積は0.68㎡である。確認面からの深さは10cm程と浅く、底面は東側へと傾斜している。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は、黒色土1層のみである。遺物は出土していないため、時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑25 (第41図)

位置 調査区の中央部A R - 17区に位置する。

遺構 平面形は不整円を呈する。規模は確認面で径1.3m程、底面では径1.1m程、底面の面積は1.12㎡である。確認面からの深さは50cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は西部分では若干オーバーハングし、ほかは急角度で立ち上がる。埋土は黒色土を主体とし、5層に区分される。堆積状態は、自然堆積とみなされる様相を示している。

遺物 土坑内からは剥片類3点が出土したのみである。

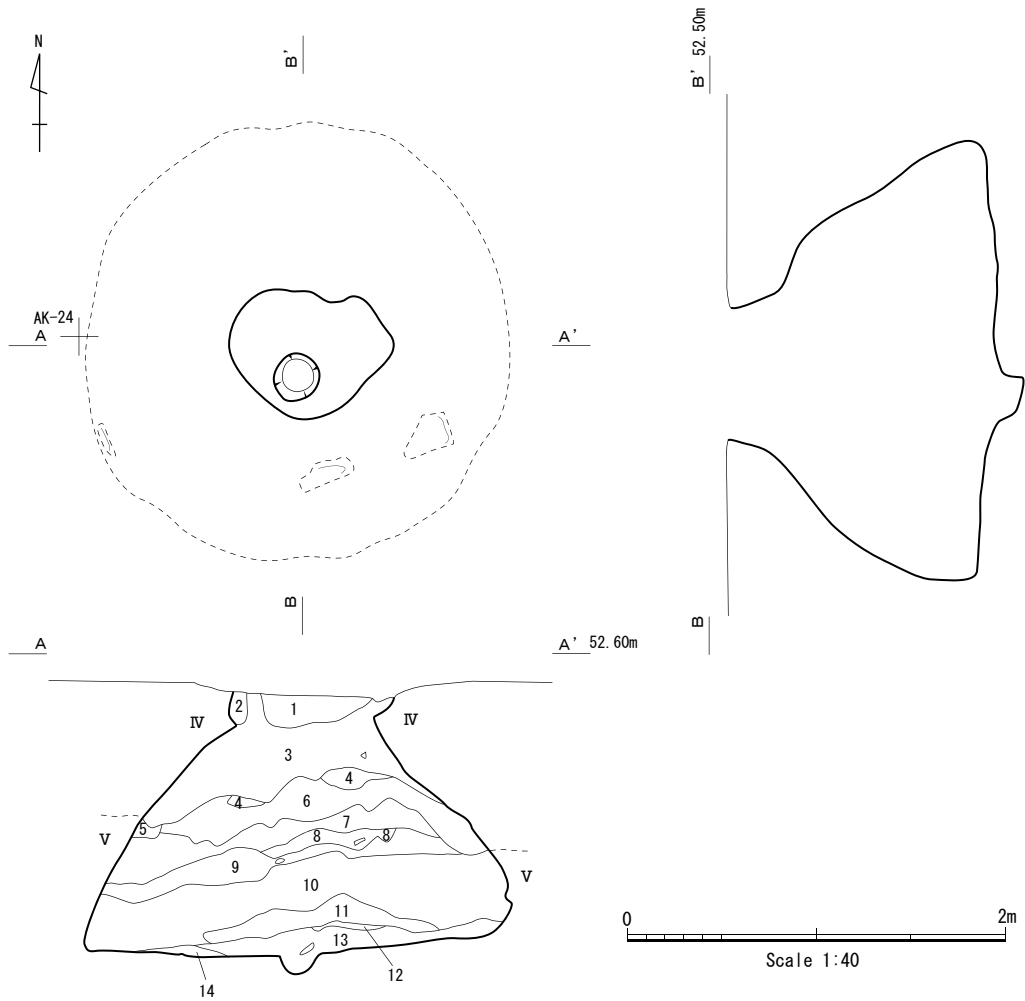
時期等 遺構の形態からみて、貯蔵穴と考えられる。時期は伴出遺物がなく不明である。

土坑26 (第41図)

位置 調査区の東部A P - 16区に位置し、土坑27を切って構築している。

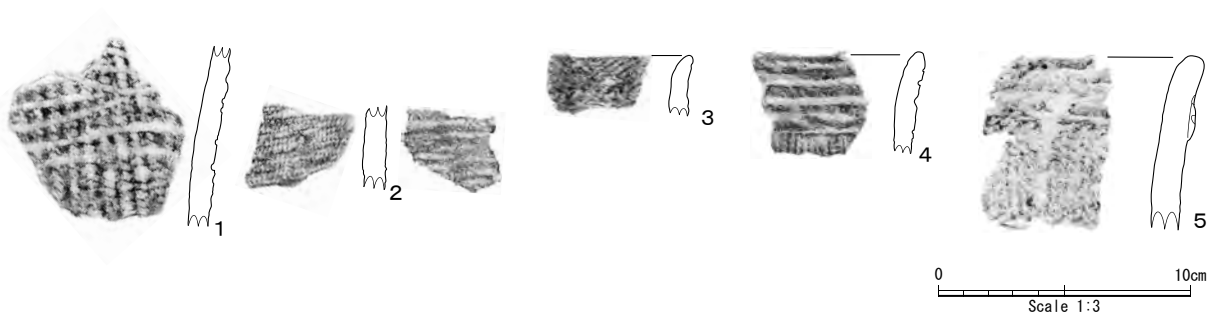
遺構 平面形は東西方向を長軸とする長円である。規模は確認面で長径75cm程、短径50cm程、底面で

SK19

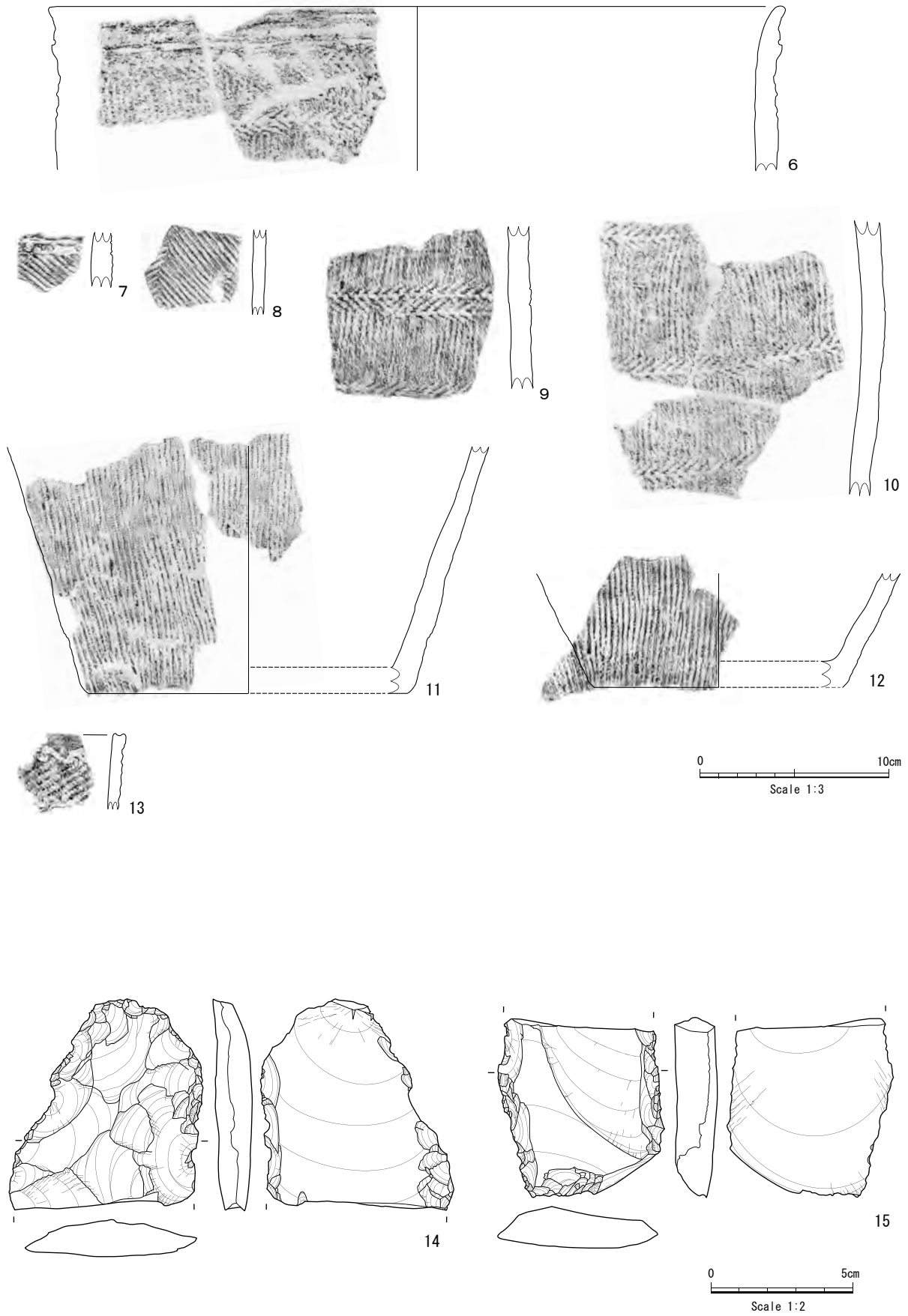


SK19

- | | | |
|----|-------------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR2/2黒褐色 | II。IV粒微量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 2 | 10YR2/2黒褐色 | III主体。炭化粒微量、IV粒少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 3 | 10YR2/2黒褐色 | IVブロック多量、パミス(φ3~5mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 4 | 10YR1.7/1黒色 | II主体。IV粒少量混入。締まり有り。粘性有り。 |
| 5 | 10YR2/2黒褐色 | IV粒少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 6 | 10YR2/2黒褐色 | IVブロック多量混入。締まりよし。粘性有り。 |
| 7 | 10YR1.7/1黒色 | II。IV粒微量混入。締まりよし。粘性有り。 |
| 8 | 10YR1.7/1黒色 | IV > II。礫少量混入。固く締まる。粘性有り。 |
| 9 | 10YR2/2黒褐色 | II > IV。固く締まる。粘性有り。 |
| 10 | 10YR1.7/1黒色 | II。IVブロック微量混入。締まり、粘性有り。 |
| 11 | 10YR2/2黒褐色 | IV主体。炭化物少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 12 | 10YR1.7/1黒色 | II。締まり、粘性有り。 |
| 13 | 10YR2/3黒褐色 | V主体。IV粒少量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 14 | 10YR2/1黒色 | 締まりよし。粘性有り。 |

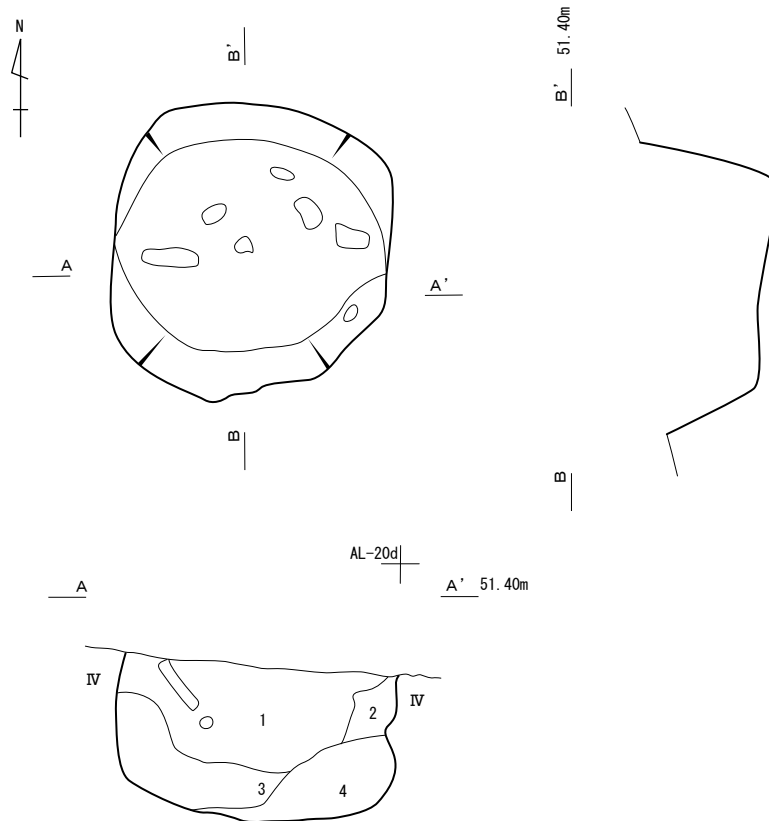


第38図 土坑19と出土遺物(1)



第39図 土坑19出土遺物(2)

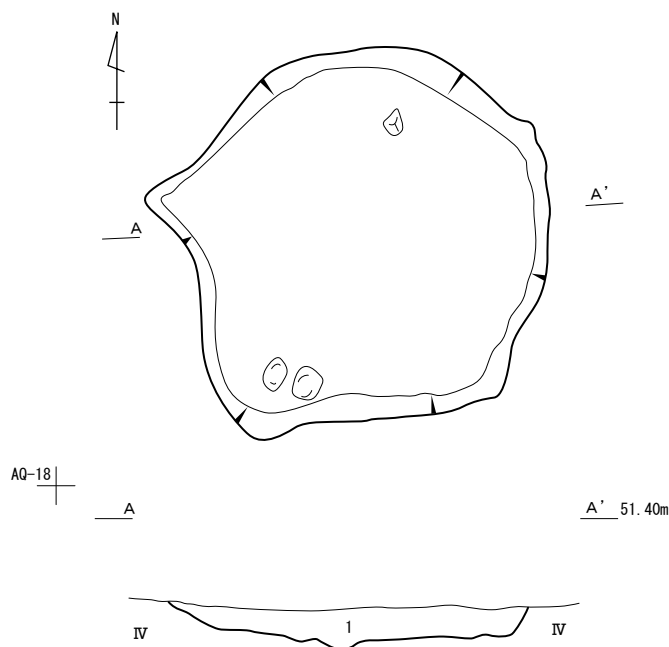
SK20



SK20

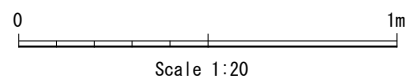
- | | | |
|---|--------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1 黒色 | Ⅱ。パミス(φ1~3mm)少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色 | パミス(φ1~5mm)少量混入。締まり、粘性なし。 |
| 3 | 10YR2/1 黒色 | 締まり有り。粘性弱。 |
| 4 | 10YR1.7/1 黒色 | Ⅳ粒混入。締まりよし。粘性有り。 |

SK24



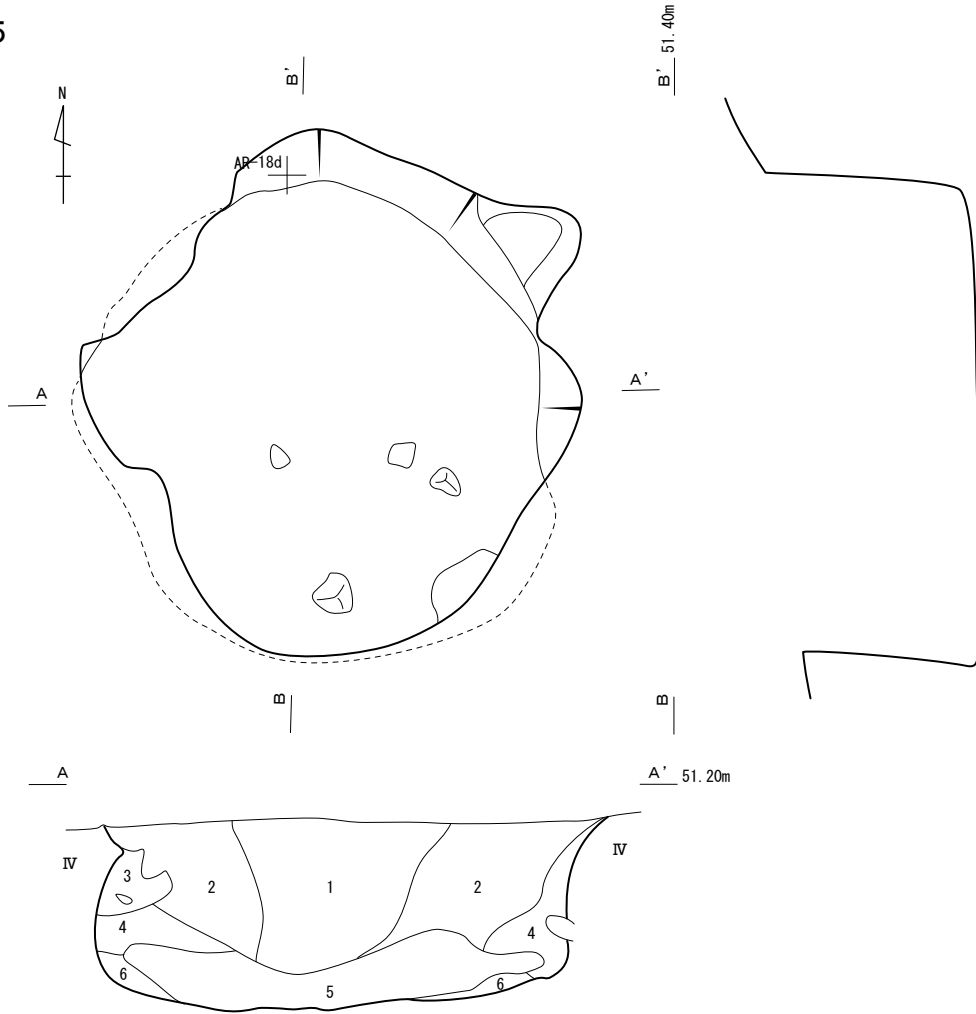
SK24

- | | | |
|---|--------------|---------------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1 黒色 | Ⅱ。Ⅳ粒、パミス(φ1~2mm)微量混入。締まりよし。粘性弱。 |
|---|--------------|---------------------------------|



第40図 土坑20・24

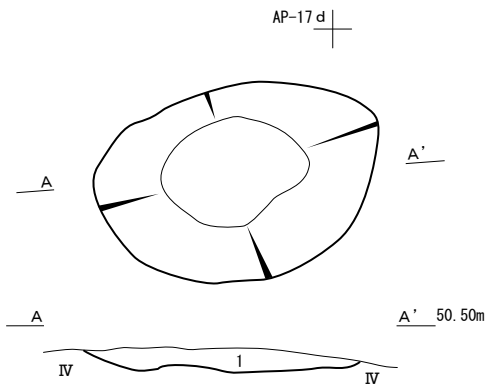
SK25



SK25

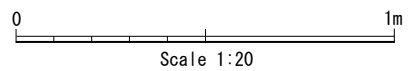
- 1 10YR1.7/1黒色 IV粒やや多量混入。締まり、粘性有り。
- 2 10YR1.7/1黒色 II。締まり、粘性有り。
- 3 10YR4/4褐色 IV。締まり有り。粘性なし。崩落土。
- 4 10YR2/1黒色 II > IV。締まり有り。粘性弱。
- 5 10YR1.7/1黒色 II。IV粒微量混入。締まりよし。粘性有り。2より暗い。
- 6 10YR2/2黒褐色 締まりよし。粘性有り。

SK26



SK26

- 1 10YR2/1黒色 IV粒少量混入。固く締まる。粘性弱。



第41図 土坑25・26

は長径40cm程、短径30cm程で、底面の面積は0.08㎡である。確認面からの深さは5cm程と非常に浅く、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土中は黒色土1層のみである。遺物は出土していないため、用途を特定する手がかりは得られていない。時期は伴出遺物がなく決め手に欠くものの、土坑27を切って構築していることから、少なくとも縄文前期以降に構築されたものと考えられる。

土坑27 (第42・43図)

位置 前述した土坑26の西側に重複し、土坑28とも重複する。土坑28を切って構築し、土坑26によって切られている。

遺構 平面形は北東-南西方向を長軸とするやや歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1.2m程、底面では径1.3m程、底面の面積は1.2㎡である。確認面からの深さは50cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は東部分では若干オーバーハングし、ほかは急角度で立ち上がる。埋土は黒色土を主体とし、4層に区分される。堆積状態は、自然堆積とみなされる様相を示している。

遺物 土坑内からは、2群4点、3群2点、5群5点の土器片、1群3類1点、4類2点、6類1点の石器と剥片類13点、石核2点の計30点が出土している。第43図1・2は2群の早稲田5類土器。3・4は4群の円筒下層式土器。5・6はUフレイクで珪質頁岩製。

時期等 遺構の形態や出土遺物からみて、5群土器期の貯蔵穴と考えられる。

土坑28 (第42図)

位置 前述した土坑27の南西側に重複し、土坑27によって切られている。

遺構 土坑の南部は調査区外に拡がり、全容は不明である。規模は確認部分で径1.4m程、底面では1.2m程である。確認面からの深さは30cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。埋土は黒色土を主体とし、2層に区分される。

遺物 土坑内からは2群土器片1点が出土したのみである。

時期等 出土遺物や埋土の堆積状態から用途を特定する手がかりは得られていない。時期は伴出遺物がなく決め手に欠くものの、土坑27に切られていることからみて、2群土器期以前に構築されたものと考えられる。

土坑29 (第44図)

位置 調査区の中央部A S - 17・18区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径60cm程、底面では径80cm程で、底面の面積は0.52㎡である。確認面からの深さは40cm程で、底面はほぼ平坦で、中央に底面ピットを有する。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土を主体とし、4層に区分される。堆積状態は、自然堆積とみなされる様相を示している。遺物は出土しなかった。

遺物 遺物は、礫類が10数点出土したのみである。

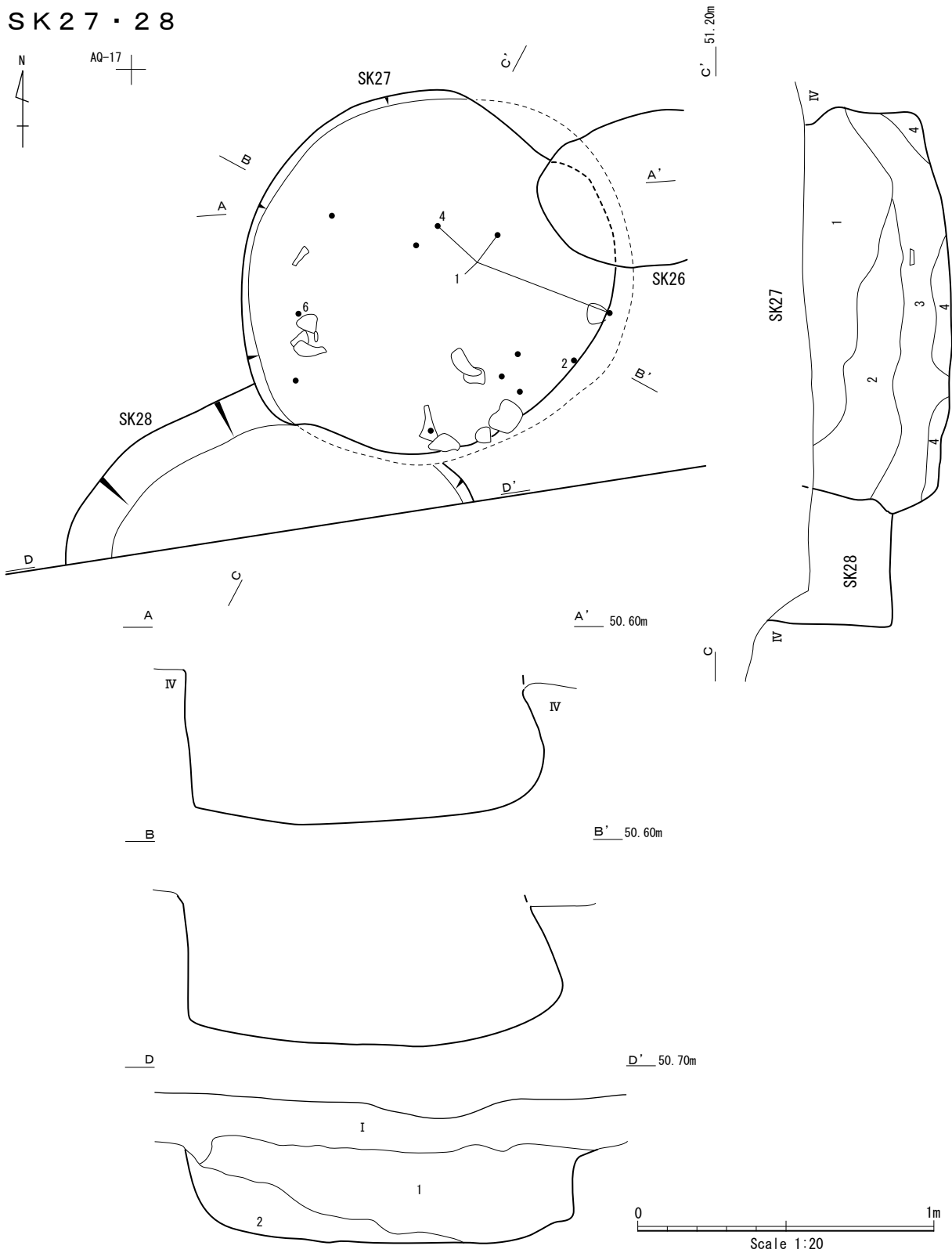
時期等 遺構の形態からみて、貯蔵穴と考えられる。時期は伴出遺物がなく不明である。

土坑31 (第44図)

位置 調査区の中央部A S - 17区、竪穴建物跡30に隣接し検出した。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径55cm程、底面では径35cm程で、底面の面積は

SK27・28



SK27

- 1 10YR1.7/1黒色 パミス粒微量混入。締まりなし。粘性有り。
- 2 10YR2/1黒色 パミス粒、IV粒少量混入。締まり有り。粘性弱。
- 3 10YR1.7/1黒色 パミス粒、IV粒微量混入。締まりなし。粘性有り。
- 4 10YR3/2黒褐色 パミス粒、IV粒混入。固く締まる。粘性弱。

SK28

- 1 10YR2/1黒色 II。IV粒微量混入。締まり、粘性有り。
- 2 10YR1.7/1黒色 II。IV粒微量混入。締まり、粘性有り。

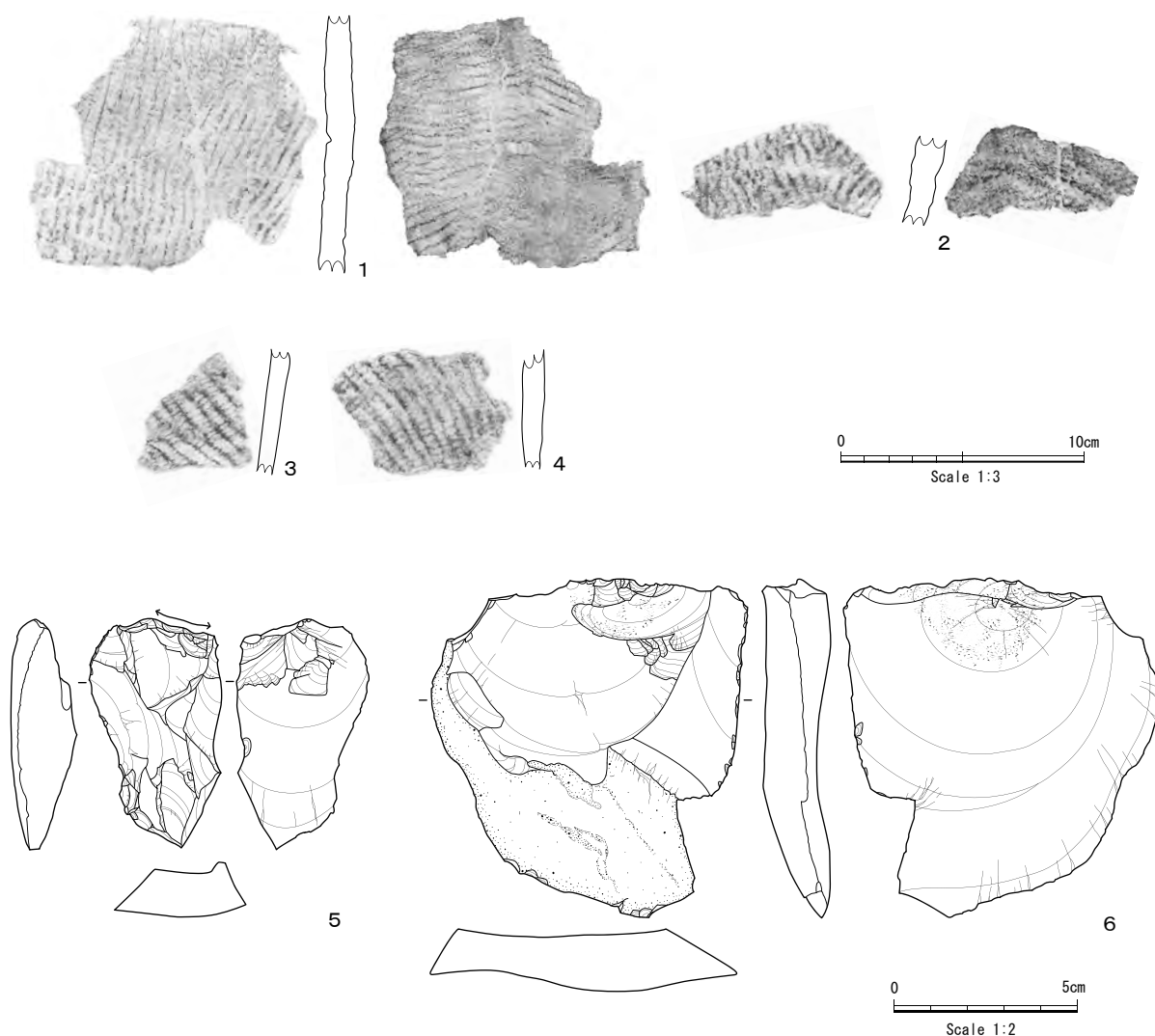
第42図 土坑27・28

0.11㎡である。確認面からの深さは5cm程と浅く、底面は南側へと傾斜している。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土1層のみである。遺物は出土していないため、用途や時期を特定する手がかりは得られていない。

土坑32 (第45図)

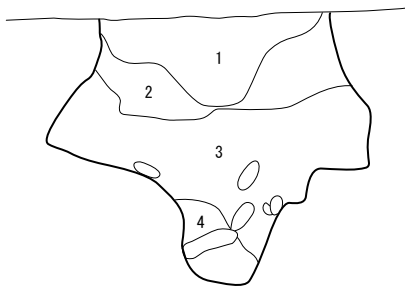
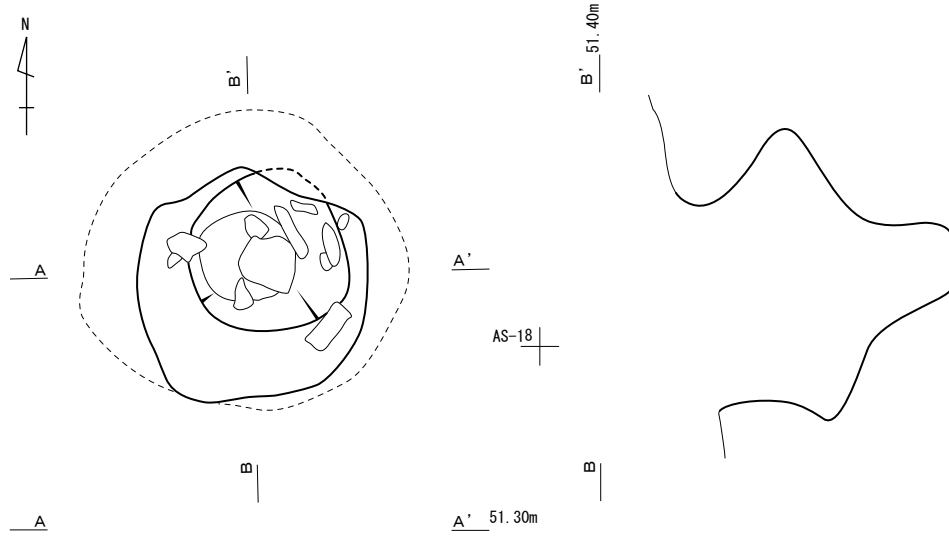
位置 調査区の中央部AR-18区に位置する。

遺構 平面形は北西-南東方向を長軸とする歪んだ長円である。規模は、長径1.2m、短径1m程、底面では長径80cm、短径70cm程で、底面の面積は0.48㎡である。確認面からの深さは20cm程で、底面は南側へと傾斜している。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒色土と黒褐色土の2層に区分される。遺物は出土していないため、用途や時期を特定する手がかりは得られていない。



第43図 土坑27出土遺物

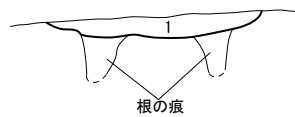
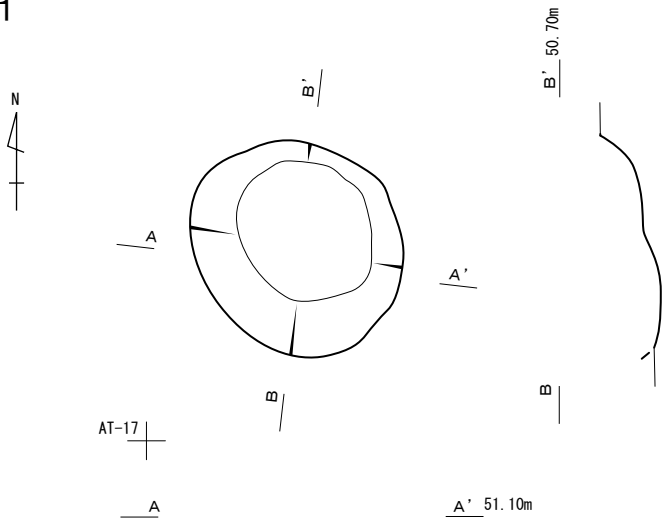
SK29



SK29

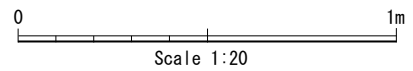
- 1 10YR1.7/1黒色 パミス粒微量混入。締まり有り。粘性弱。
- 2 10YR1.7/1黒色 パミス粒微量混入。IV粒少量混入。締まり、粘性有り。
- 3 10YR2/2黒褐色 IV粒少量混入。固く締まる。粘性有り。
- 4 10YR2/1黒色 IVブロック多量混入。締まりなし。粘性弱。

SK31



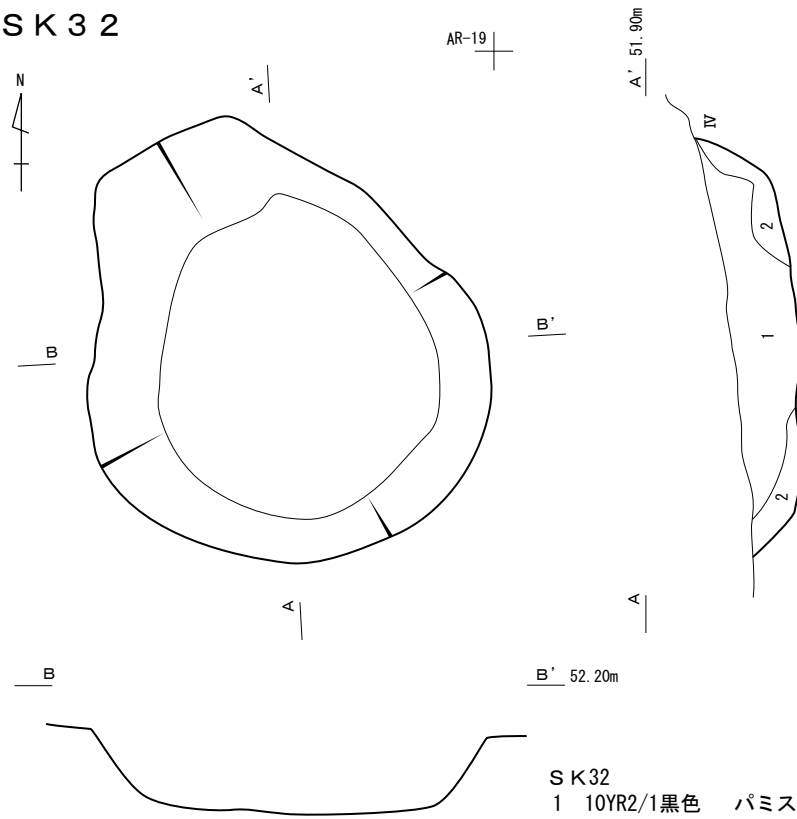
SK31

- 1 10YR2/2黒褐色 パミス粒、IV粒微量混入。締まり有り。粘性なし。



第44図 土坑29・31

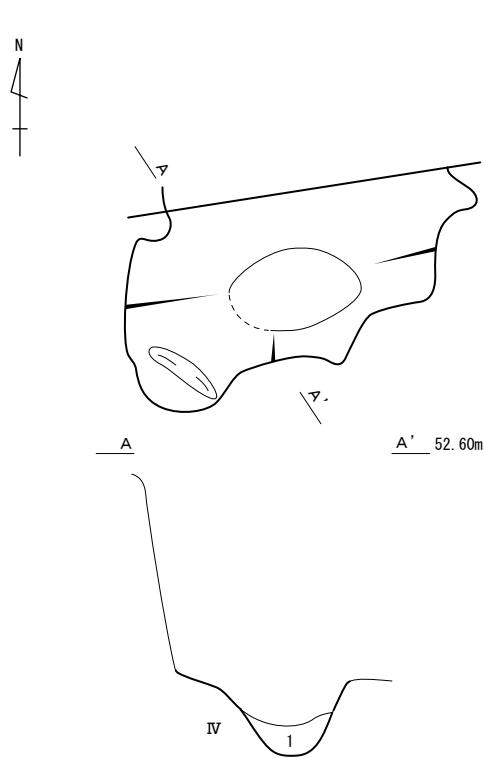
SK 32



SK 32

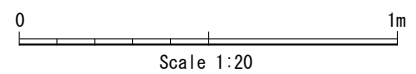
- 1 10YR2/1黒色 パミス粒、小礫微量混入。固く締まる。粘性有り。
- 2 10YR3/3暗褐色 パミス粒、小礫微量混入。固く締まる。粘性弱。

SK 33



SK 33

- 1 10YR2/2黒褐色 パミス粒、IV粒少量混入。固く締まる。粘性弱。



第45図 土坑32・33

土坑33 (第45図)

位置 調査区の東部A N - 20区、集石39の東側に位置する。本土坑の北部は調査区外に拡がる。

遺構 北半部は調査区外に拡がり、平面形は不明である。規模は確認部分で径90cm程、底面では径35cm程である。確認面からの深さは20cm程で、底面は2段構造となっている。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土の1層のみである。遺物は出土していないため、用途や時期を特定する手がかりは得られていない。

土坑34 (第46図)

位置 調査区の西部B C - 15・16区、土坑52・53の南側に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1.2m程、底面では径2m程で、底面の面積は3.08㎡である。確認面からの深さは1.2m程で、底面は平坦である。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は、ロームを多く混じる黒色土を主体とし、5層に区分される。堆積状態は自然堆積とみなされる様相を示している。

遺物 土坑内からは3群土器片1点、1群3類2点、4類1点の石器と剥片類4点、計8点が出土している。第46図1は撚糸文が施文された胴部破片。2は珪質頁岩製の削器。3はUフレイク。

時期等 本土坑は、出土遺物や遺構の形態からみて、3群土器期の貯蔵穴と考えられる。

土坑37 (第47図)

位置 調査区の西部A Y・A Z - 15・16区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1.3m程、底面では径80cm程で、底面の面積は0.56㎡である。確認面からの深さは1m程で、底面はほぼ平坦である。壁は大きく歪む。埋土は黒色土を主体とし、7層に区分される。堆積状態は埋め戻された様相を示している。遺物は出土していないため、時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑42 (第48図)

位置 調査区の中央部A W・A X - 16区に位置し、住居跡47によって切られている。

遺構 平面形は南北方向を長軸とする歪んだ長円である。規模は確認面で長径1.3m、短径1.1m程、底面では長径1.1m、短径1m程で、底面の面積は0.88㎡である。確認面からの深さは30cm程で、底面および壁は大きく歪む。埋土は黒色土を主体とし、4層に区分される。堆積状態は自然堆積とみなされる様相を示している。

遺物 土坑内からは、埋土から5群土器の底部破片1点が出土したのみである。

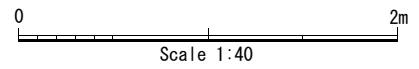
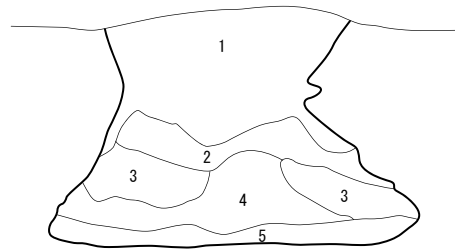
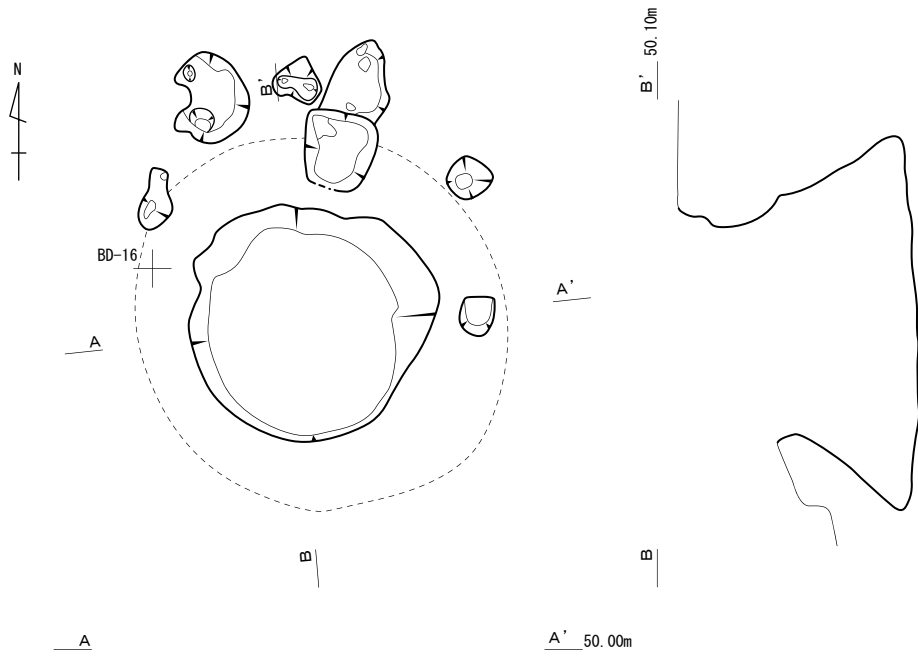
時期等 出土遺物や埋土の堆積状態からは用途を特定する手がかりは得られていない。時期は伴出遺物がなく決め手に欠くものの、5群土器期に構築されたものと考えられる。

土坑43 (第49図)

位置 調査区の中央部A X・A Y - 16・17区に位置する。

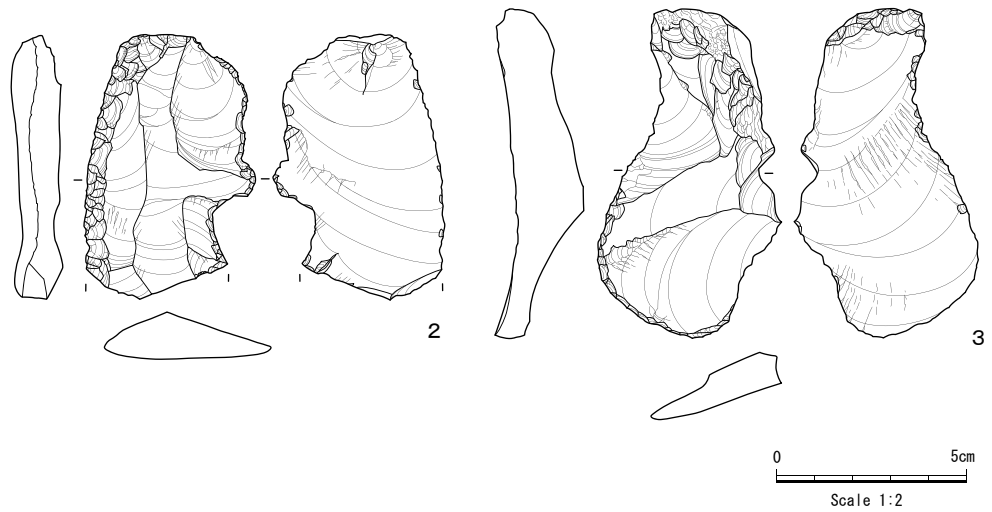
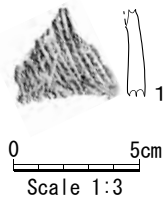
遺構 平面形は不整形である。規模は確認面で径1.2m程、底面では径2.3m程、底面の面積は4.04㎡と土坑65・6に次いで大きい。確認面からの深さは1m程で、底面はほぼ平坦である。中央に底面ピットを有する。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土を主体とし、8層に区分される。堆積状態は埋め戻された様相を呈している。

SK34



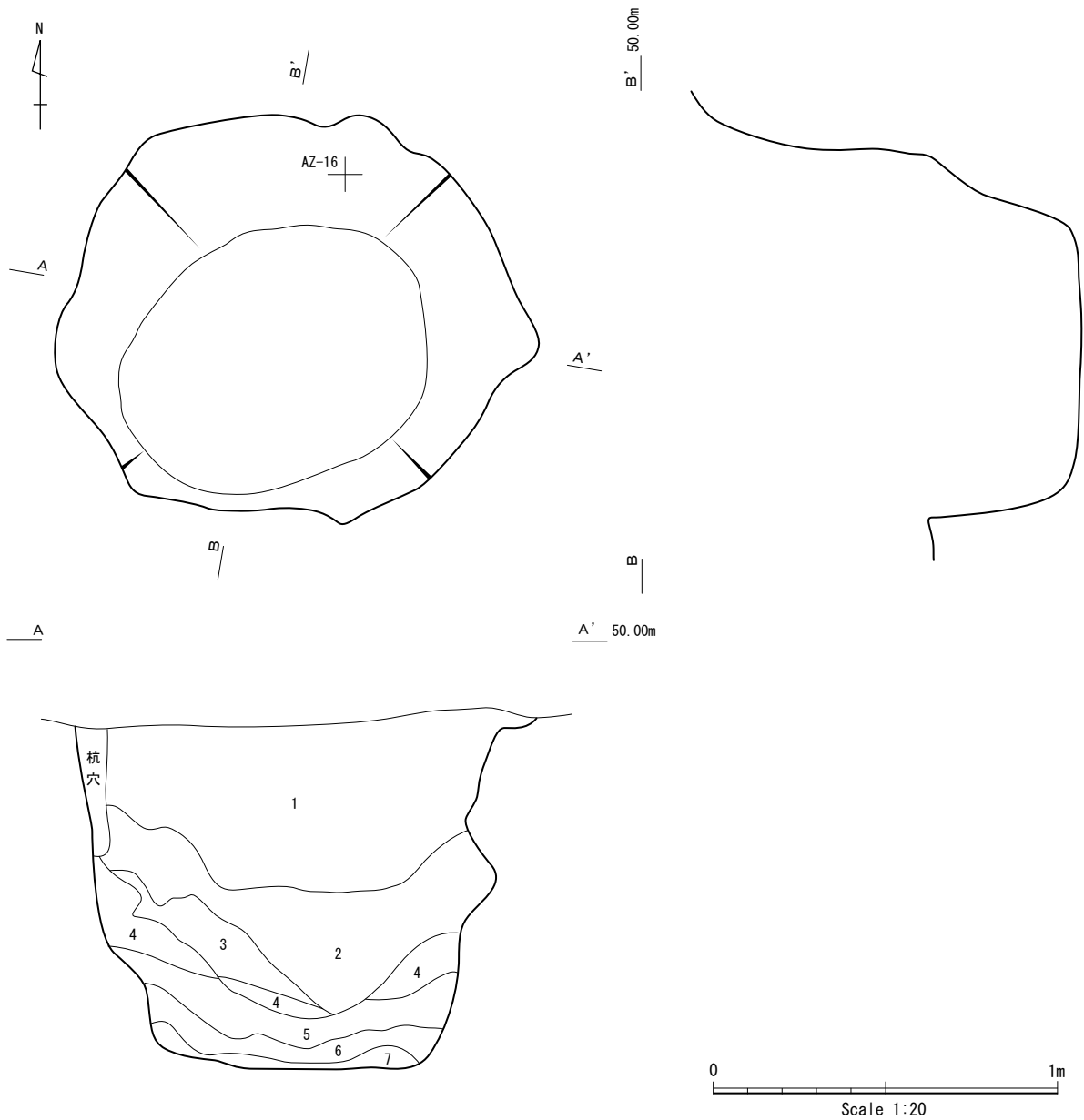
SK34

- | | | |
|---|-------------|-------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1黒色 | Ⅱ。Ⅳ粒少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 2 | 10YR2/1黒色 | Ⅱ。Ⅳブロック多量混入。締まり、粘性有り。 |
| 3 | 10YR2/1黒色 | Ⅱ>Ⅳ。締まり、粘性有り。 |
| 4 | 10YR1.7/1黒色 | Ⅱ。Ⅳブロック少量混入。締まりよし。粘性有り。 |
| 5 | 10YR1.7/1黒色 | Ⅱ。Ⅳブロック微量混入。固く締まる。粘性有り。 |



第46図 土坑34と出土遺物

SK37

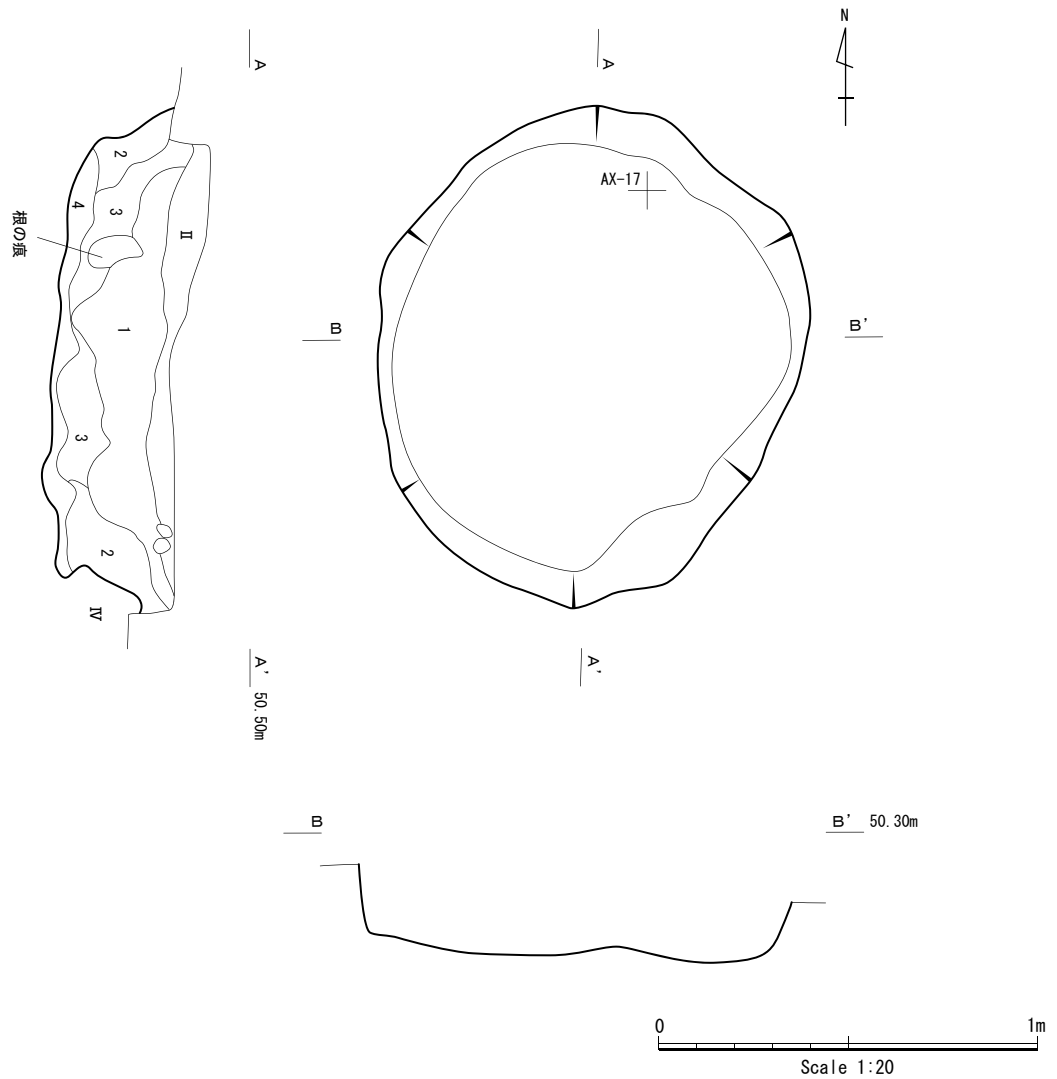


SK37

- 1 10YR1.7/1黒色 II。IVブロック下位に微量混入。締まり、粘性有り。
- 2 10YR1.7/1黒色 II>IV。IVブロック非常に多量混入。固く締まる。粘性有り。人為的埋土。
- 3 10YR2/2黒褐色 IV>II。固く締まる。粘性弱。人為的埋土。
- 4 10YR5/6黄褐色 IV主体。砂質。非常に固く締まる。粘性なし。人為的埋土。
- 5 10YR1.7/1黒色 II>IV。非常に固く締まる。粘性強。人為的埋土。
- 6 2.5Y5/4黄褐色 IV主体。締まり有り。粘性なし。人為的埋土。
- 7 10YR1.7/1黒色 II>IV。固く締まる。粘性有り。人為的埋土。

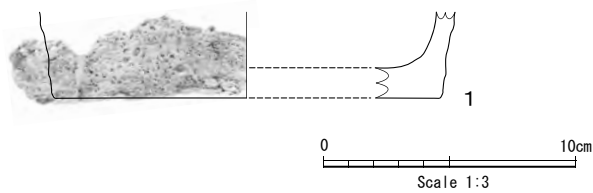
第47図 土坑37

SK42



SK42

- | | | |
|---|-------------|-------------------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒微量、パミス(φ1~3mm)少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 2 | 10YR2/1黒色 | IV粒微量、パミス(φ1~3mm)少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 3 | 10YR2/2黒褐色 | IV粒、パミス(φ1~3mm)少量混入。固く締まる。粘性有り。 |
| 4 | 10YR3/3暗褐色 | IV粒多量、パミス(φ1~3mm)少量混入。非常に固く締まる。粘性弱。 |



第48図 土坑42と出土遺物

遺物 土坑内からは、坑底より5群11点の土器片が出土した。このほか、2群土器1点、剥片類4点、礫類1点、計17点が出土した。第49図1は横位の縄文が付く早稲田5類土器。2～6は5群1類土器。2は突起をもつ深鉢。2本単位の沈線で弧状に描き、口縁に竹管状の円形刺突が付く。3は2と同一個体とみられる。4は弥栄平(2)式とみられる胴部破片。5・6は無文の底部破片。

時期等 本土坑は、出土遺物や遺構の形態からみて、5群1類土器期の貯蔵穴と考えられる。

土坑49 (第50図)

位置 調査区の西部BC-17区に位置し、住居跡55の北側に隣接する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径95cm程、底面では径1.35m程、底面の面積は1.4㎡である。確認面からの深さは1.2m程で、底面はほぼ平坦である。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土を主体とし、6層に区分される。堆積状態は埋め戻された様相を呈している。

遺物 遺物は1群3類1点の石器と剥片類1点、礫類1点が出土したのみである。第50図1は珪質頁岩の剥片の端部と側縁に簡単な刃部を作出しただけの削器。

時期等 本土坑は、遺構の形態から、貯蔵穴とみなされる。時期は伴出遺物がなく不明である。

土坑50 (第51図)

位置 調査区の西部BC-16区に位置し、土坑51を切って構築している。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面、底面ともに径1.4m程、底面の面積は1.36㎡である。確認面からの深さは80cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は東部分では若干オーバーハングする。埋土は黒色土を主体とし、4層に区分される。堆積状態は埋め戻された様相を呈している。

遺物 土坑内からは、5群土器の一括資料と、1群4類1点の石器、剥片類1点が出土した。第51図1は壺の復元土器で、下半が水平に打ち欠かれており、炉に転用された可能性をもつ。使用後、本土坑に廃棄されたと考えられる。内面には赤色物質が付着する。2は珪質頁岩の剥片。

時期等 本土坑は、出土遺物や埋土の堆積状態からみて、5群1類土器期の貯蔵穴と考えられる。

土坑51 (第51図)

位置 前述した土坑50の西側に隣接する。焼土54を切って構築し、東側は土坑50によって切られている。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径85cm程、底面では径70cm程、底面の面積は0.4㎡である。確認面からの深さは20cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。埋土は黒褐色土と黄褐色土を主体とし、3層に区分される。堆積状態は埋め戻された様相を呈している。

遺物 土坑内からは剥片類2点が出土したのみである。

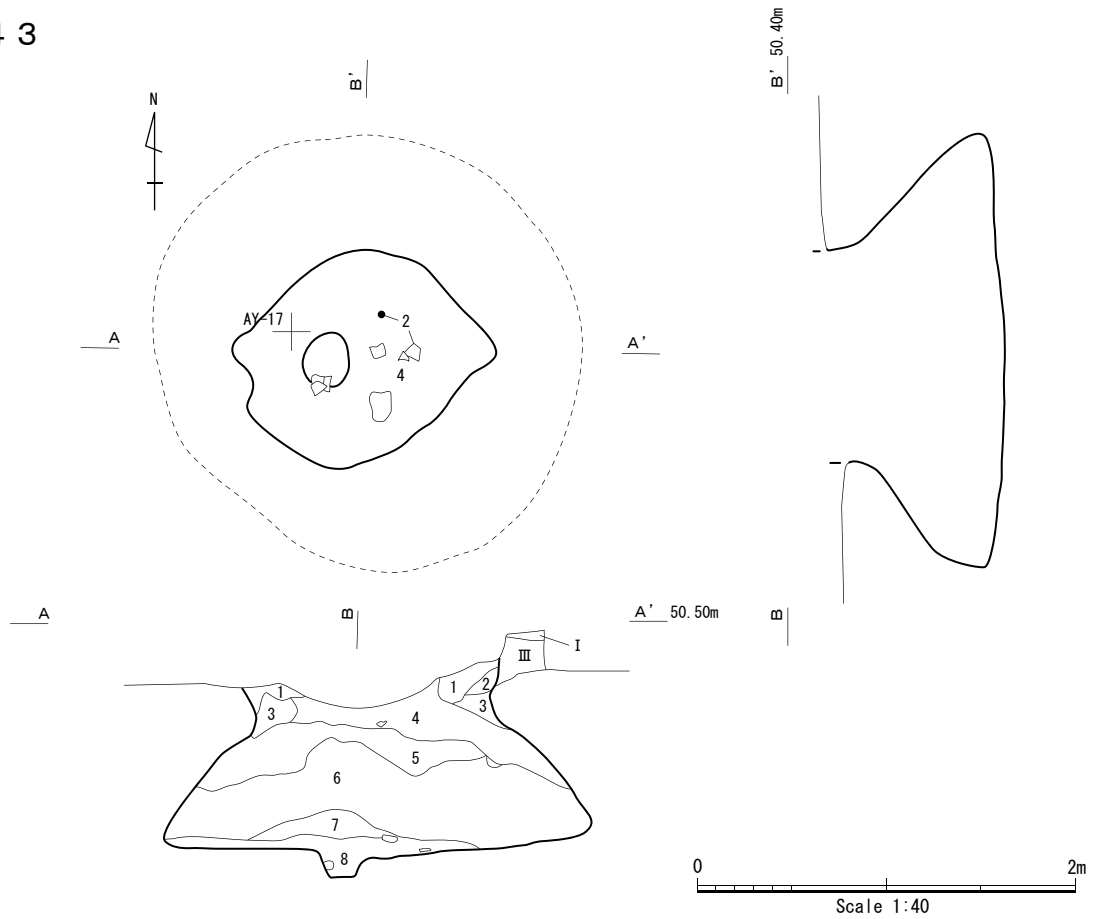
時期等 出土遺物や埋土の堆積状態からは時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑52 (第52図)

位置 前述した土坑51の南東側に位置し、土坑51によって切られている。

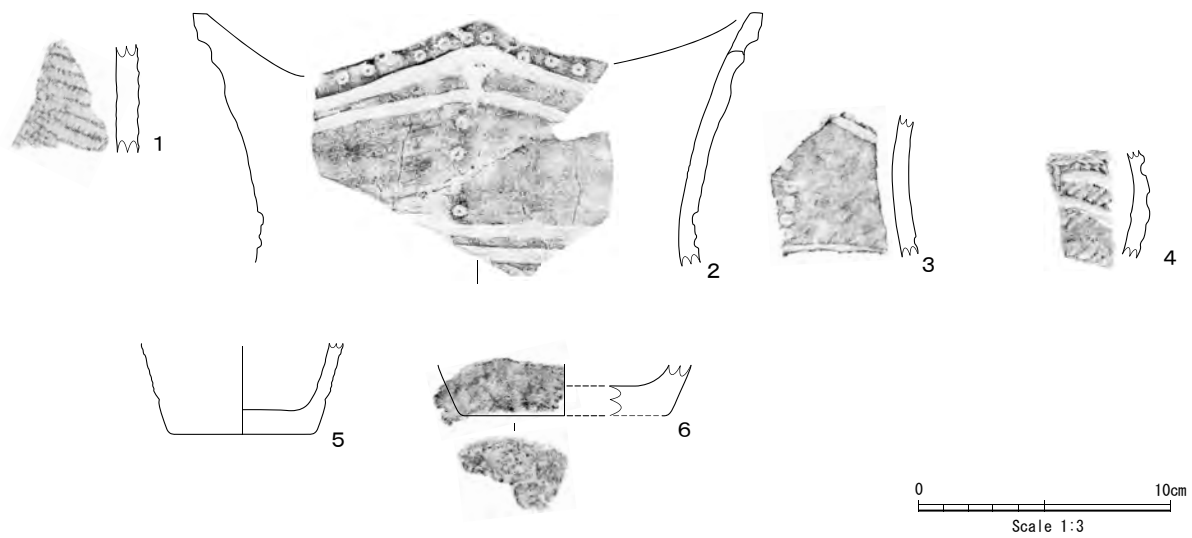
遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1.5m程、底面では径1.7m程、底面の面積は2.2㎡である。確認面からの深さは1.1m程で、底面は平坦である。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土を主体とし、13層に区分される。堆積状態は埋め戻された様

SK43



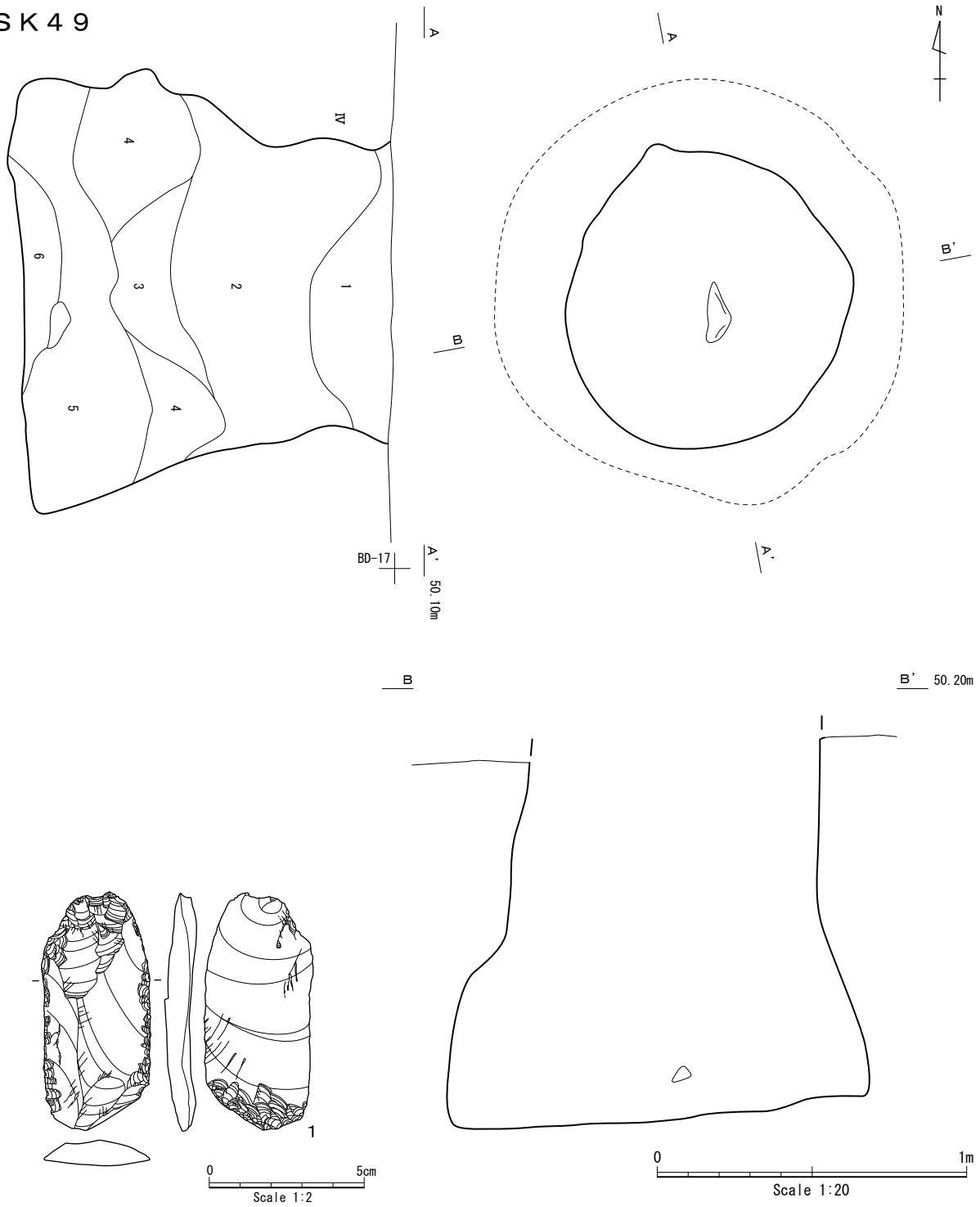
SK43

- | | |
|-----------------|--------------------------------|
| 1 10YR2/1黒色 | III。パミス(φ1~3mm)微量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 2 10YR2/1黒色 | II>IV。締まり有り。粘性弱。 |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色 | IV>III。固く締まる。粘性なし。 |
| 4 10YR1.7/1黒色 | II。パミス(φ1~10mm)微量混入。締まり、粘性有り。 |
| 5 10YR1.7/1黒色 | II>IV。締まりよし。粘性有り。 |
| 6 10YR5/6黄褐色 | IV。締まりよし。粘性なし。 |
| 7 10YR2/1黒色 | III>IV。締まりよし。粘性有り。 |
| 8 10YR1.7/1黒色 | II。締まり有り。粘性強。 |



第49図 土坑43と出土遺物

SK49

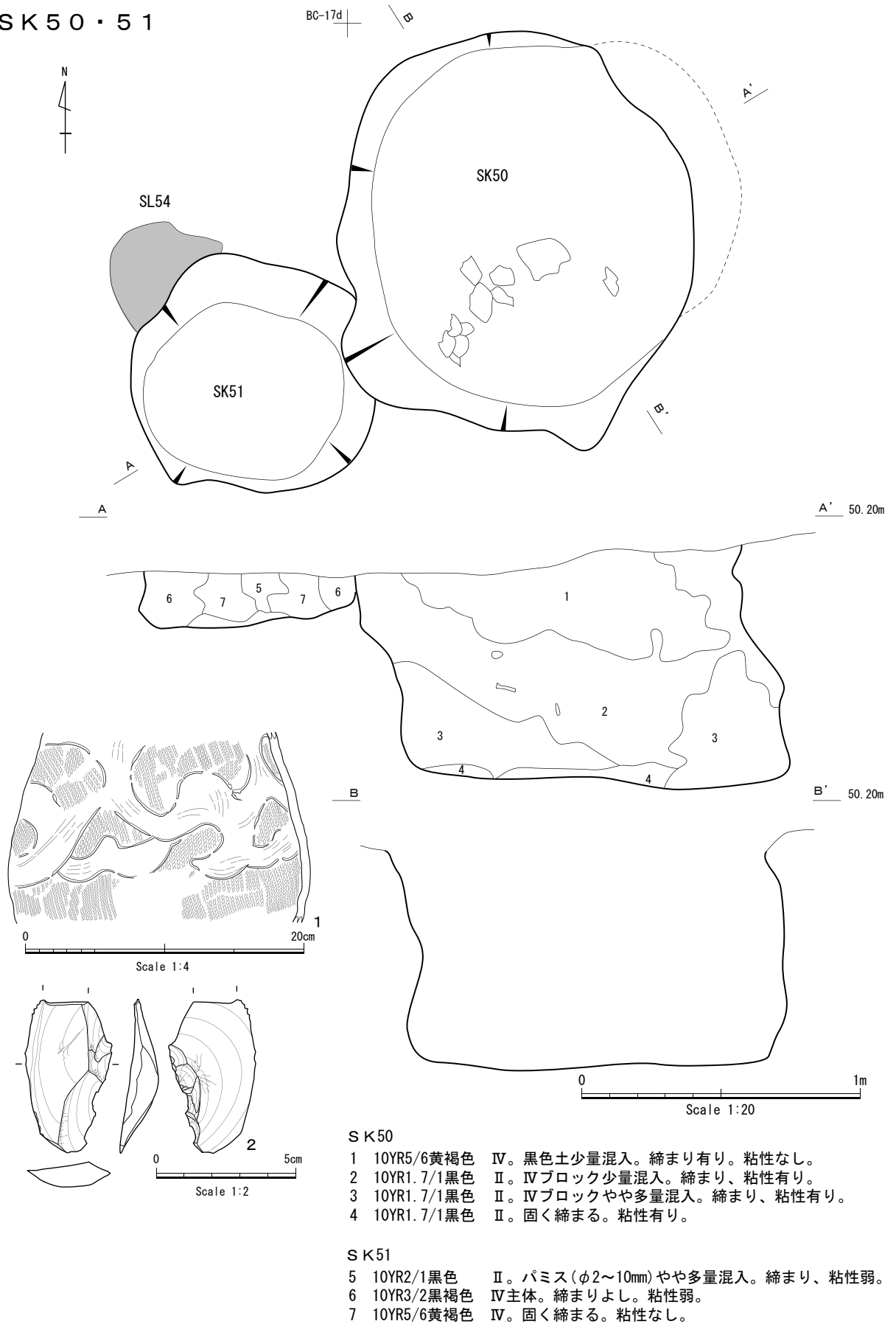


SK49

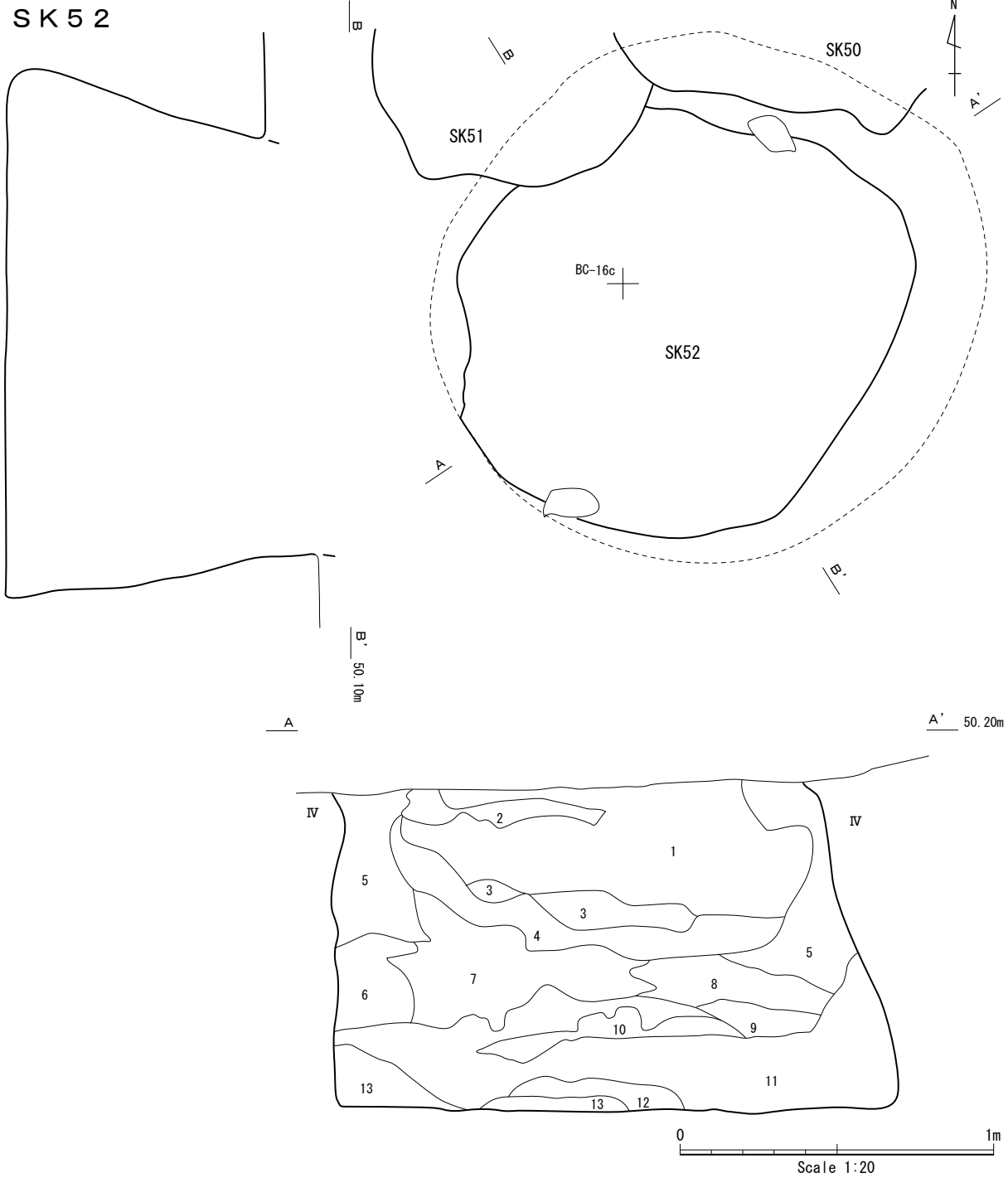
- 1 10YR2/2黒褐色 II。IVブロック非常に多量混入。炭化物少量混入。締まり有り。粘性弱。
- 2 10YR1.7/1黒色 II。IV粒微量混入。締まり、粘性有り。
- 3 10YR1.7/1黒色 II。IVブロック少量混入。締まり、粘性有り。
- 4 10YR1.7/1黒色 II。IVブロック多量混入。締まり、粘性有り。
- 5 10YR1.7/1黒色 II。IVブロック少量混入。3より暗い。締まり、粘性有り。
- 6 10YR2/1黒色 II。IVブロック多量混入。締まりよし。粘性有り。

第50図 土坑49と出土遺物

SK50・51



第51図 土坑50・51と出土遺物



SK52

- | | | |
|----|-------------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR4/4褐色 | IV。黑色土少量、パミス(φ2~8mm)多量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 2 | 10YR2/2黒褐色 | IV粒。パミス(φ2~5mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 3 | 10YR2/1黒色 | IVブロック多量、パミス(φ2~5mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 4 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒、パミス(φ2~5mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 5 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒少量、パミス(φ3~8mm)多量混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 6 | 10YR1.7/1黒色 | IVブロック、パミス(φ1~3mm)多量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 7 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒多量、パミス(φ1~3mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 8 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒微量、パミス(φ1~3mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 9 | 10YR2/1黒色 | IV粒多量、パミス(φ1~3mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 10 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒、パミス(φ1mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 11 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒、パミス(φ1mm)少量混入。非常に固く締まる。粘性有り。 |
| 12 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒非常に多量混入。非常に固く締まる。粘性なし。 |
| 13 | 10YR1.7/1黒色 | IV粒、パミス(φ1mm)少量混入。締まり、粘性有り。 |

第52図 土坑52

相を呈している。遺物は出土していない。本土坑は、遺構の形態からみて、貯蔵穴と考えられる。時期は伴出遺物がなく不明である。

土坑53 (第53図)

位置 調査区の西部BC・BD-16区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1.4m程、底面では径2.1m程、底面の面積は3.64㎡である。確認面からの深さは1.1m程で、底面は平坦である。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土を主体とし、5層に区分される。堆積状態は自然堆積とみなされる様相を示している。

遺物 土坑内からは、5群の土器片が5点出土している。第53図1は底径4cm程の斜行縄文が施文された小型土器。

時期等 本土坑は、出土遺物や埋土の堆積状態からみて、5群土器期の貯蔵穴と考えられる。

土坑56 (第54図)

位置 調査区の東部BD-15区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径60cm、底面では径55cmである。確認面からの深さは10cm程と浅く、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒色土1層のみである。

遺物 土坑の中央部に安山岩の大型礫が2個、1群7類の石器1点が配されている。第54図1は緑泥片岩製とみられる石皿。

時期等 出土遺物や埋土の堆積状態からは時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑57 (第54図)

位置 調査区の南西部BD-14区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径70cm程、底面では径50cm程、底面の面積は0.26㎡である。確認面からの深さは20cm程で、底面は北西側へと傾斜している。壁は北部分では若干オーバーハングする。埋土は黒色土1層のみである。遺物は出土していないため、時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑58 (第55図)

位置 調査区の西部BD-15区に位置する。

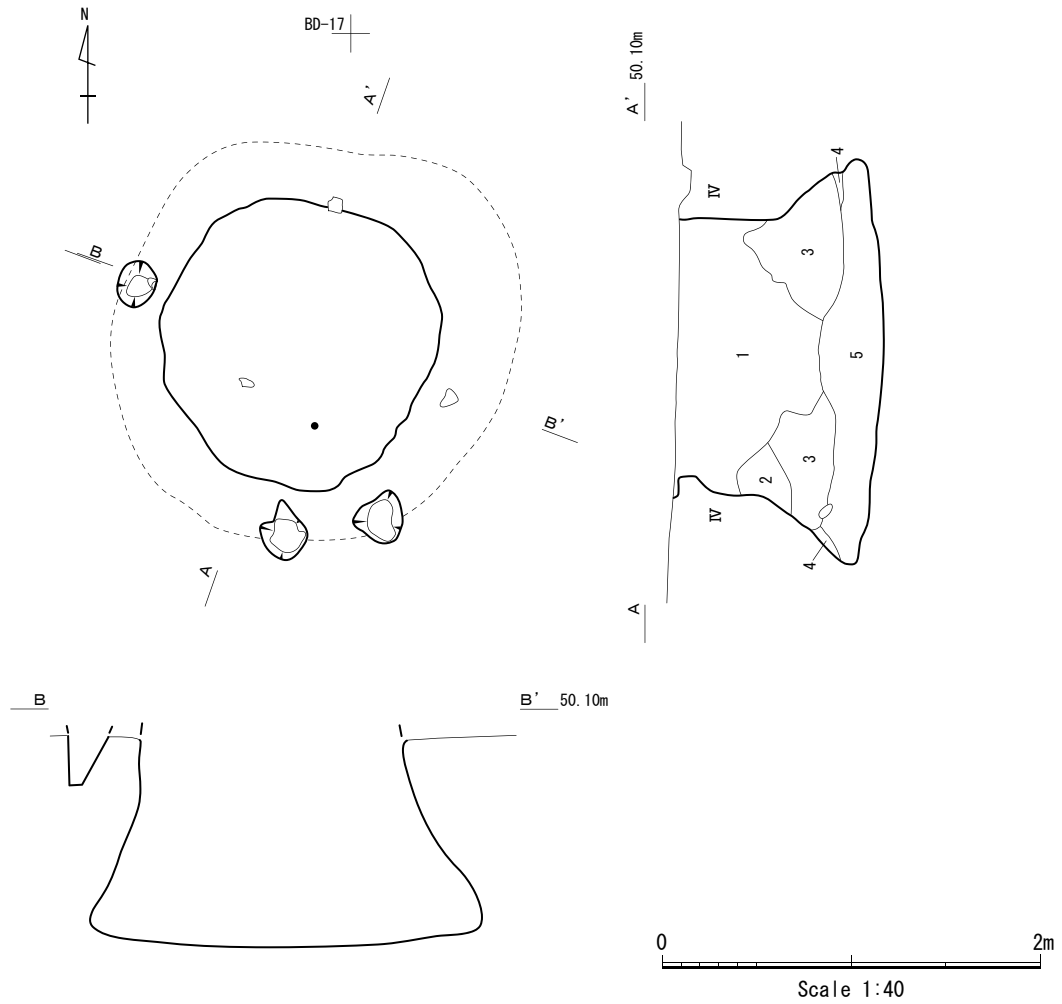
遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1.2m程、底面では径1.3m程、底面の面積は1.3㎡である。確認面からの深さは50cm程で、底面は東側へ傾斜する。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。西壁は急角度で立ち上がる。埋土は黒色土を主体とし、5層に区分される。遺物は出土していない。本土坑は、遺構の形態から、貯蔵穴とみなされる。時期は伴出遺物がなく不明である。

土坑59 (第56図)

位置 調査区の南西部BD-14区に位置する。南側の一部が調査区外に拡がる。

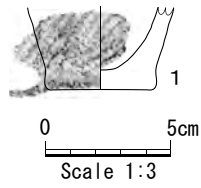
遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径90cm程、底面では径1.3m程である。確認面から

SK53



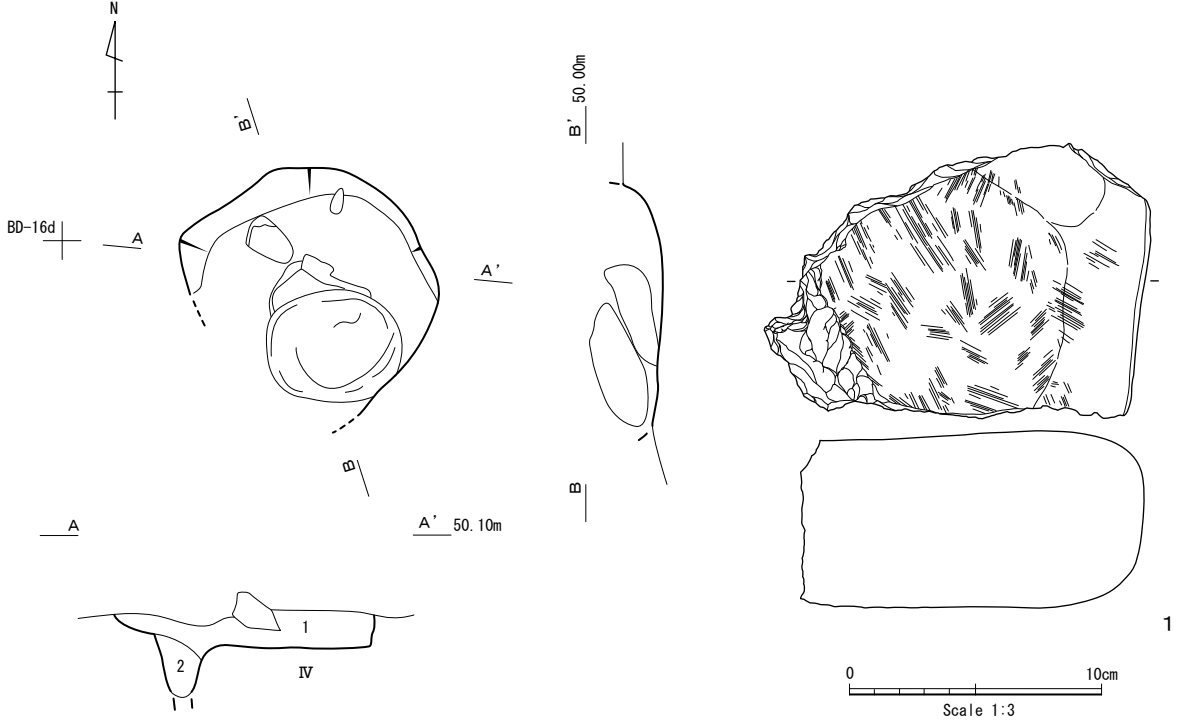
SK53

- 1 10YR1.7/1黒色 IV粒、パミス(φ1~2mm)微量混入。締まり有り。粘性強。
- 2 10YR1.7/1黒色 IV粒、パミス(φ1~2mm)少量混入。締まり、粘性有り。
- 3 10YR2/1黒色 IVブロック非常に多量、パミス(φ1~5mm)少量混入。締まりなし。粘性弱。
- 4 10YR2/1黒色 IV粒、パミス(φ1~2mm)多量混入。締まりなし。粘性弱。
- 5 10YR1.7/1黒色 IV粒。パミス(φ1~2mm)微量混入。固く締まる。粘性やや強。



第53図 土坑53と出土遺物

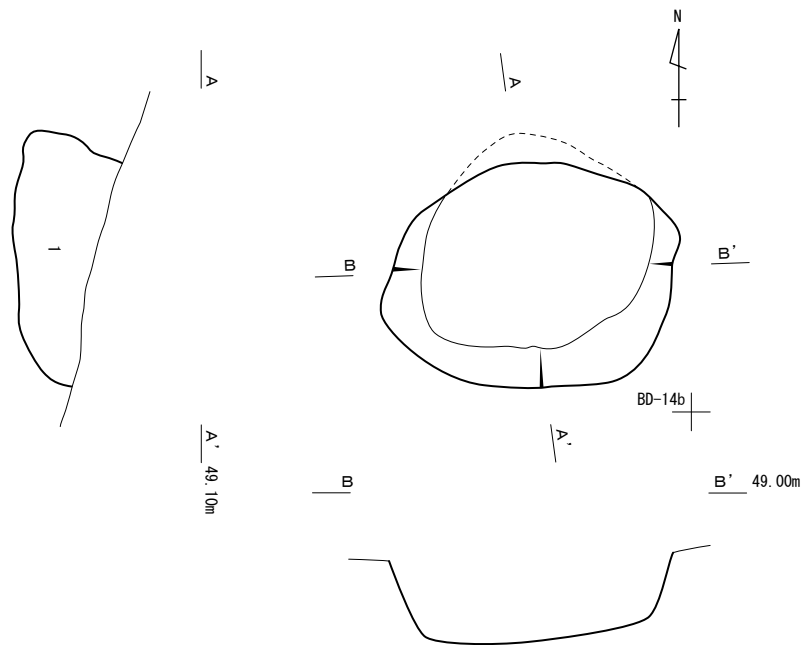
SK 56



SK 56

- 1 10YR1.7/1黒色 締まり有り。粘性有り。
- 2 10YR2/1黒色 IV層ブロック少量混入。締まりなし。粘性有り。

SK 57

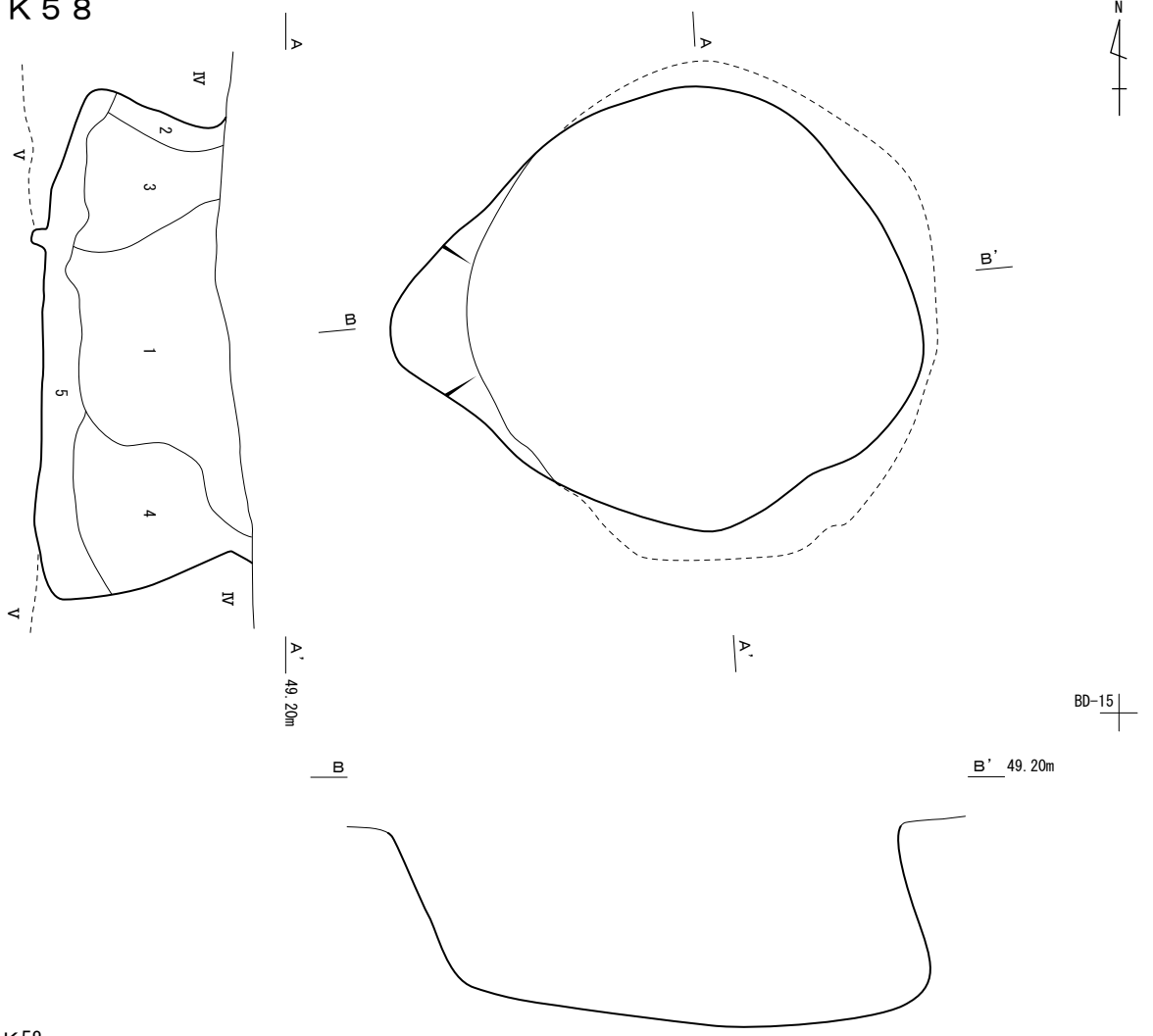


SK 57

- 1 10YR1.7/1黒色 IV粒、パミス粒微量混入。締まりなし。粘性有り。

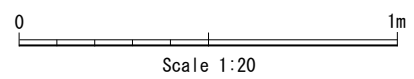
第54図 土坑56・57と出土遺物

SK58



SK58

- 1 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。締まり有り。粘性弱。
- 2 10YR2/1黒色 IV粒微量混入。締まりなし。粘性なし。
- 3 10YR1.7/1黒色 IVブロック多量混入。締まりなし。粘性弱。
- 4 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。締まり、粘性有り。
- 5 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。固く締まる。粘性強。

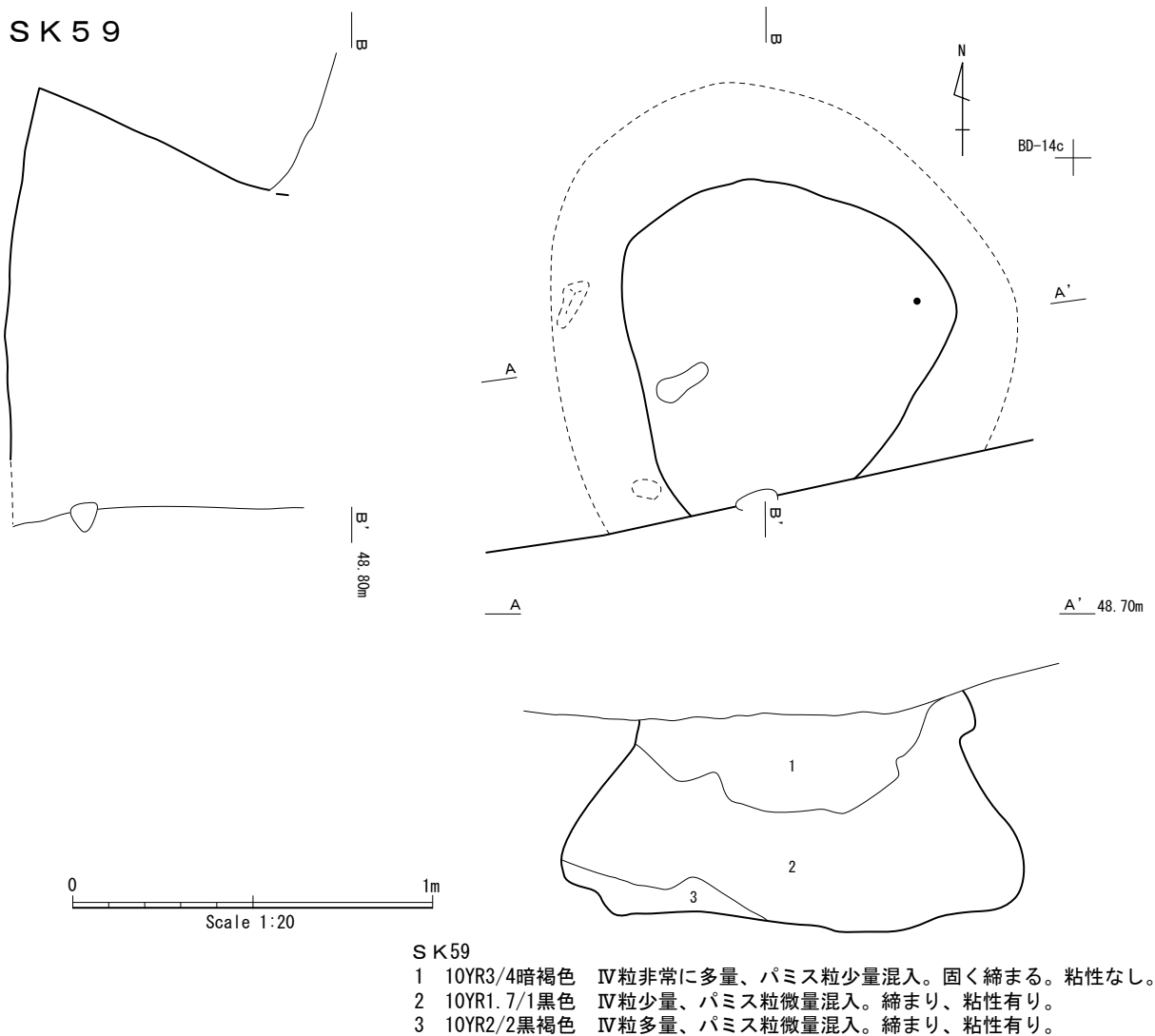


第55図 土坑58

の深さは70cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は暗褐色土と黒色土、黒褐色土の3層に区分される。埋土は埋め戻された様相を呈している。

遺物 土坑内からは、剥片類と礫類各1点が出土したのみである。

時期等 本土坑は、遺構の形態からみて、貯蔵穴と考えられる。時期は伴出遺物がなく不明である。



第56図 土坑59

土坑60 (第57図)

位置 調査区の南西部B E - 14区に位置する。

遺構 平面形は不整形である。規模は確認面で1 m程、底面では径1.2m程、底面の面積は1.28㎡である。確認面からの深さは60cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土の堆積状況は不詳である。遺物は出土していない。本土坑は、遺構の形態からみて、貯蔵穴と考えられる。時期は伴出遺物がなく不明である。

土坑62 (第57図)

位置 調査区の西端B G - 16区に位置する。土坑65と重複するが、新旧関係は不明である。

遺構 東側1/2が消失しており、平面形は不明である。規模は確認面で径70cm前後と思われる。確認面からの深さは50cm程で、底面および壁は、大きく歪む。埋土は黒色土1層のみである。出土遺物や埋土の堆積状態からは時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑63 (第58図)

位置 調査区の南西端B E・B F - 14区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1.4m程、底面では径1.3m程、底面の面積は1.24㎡である。確認面からの深さは70cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土を主体とし、4層に区分される。堆積状態は自然堆積とみなされる様相を示している。遺物は出土していない。本土坑は、遺構の形態からみて、貯蔵穴と考えられる。時期は伴出遺物がなく不明である。

土坑64 (第58図)

位置 調査区の南西端B G - 14区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1.1m程、底面では径1.2m程、底面の面積は1.24㎡である。確認面からの深さは60cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒褐色土を主体とし、5層に区分される。堆積状態は自然堆積とみなされる様相を示している。遺物は出土していない。本土坑は、遺構の形態からみて、貯蔵穴と考えられる。時期は伴出遺物がなく不明である。

土坑65 (第59図)

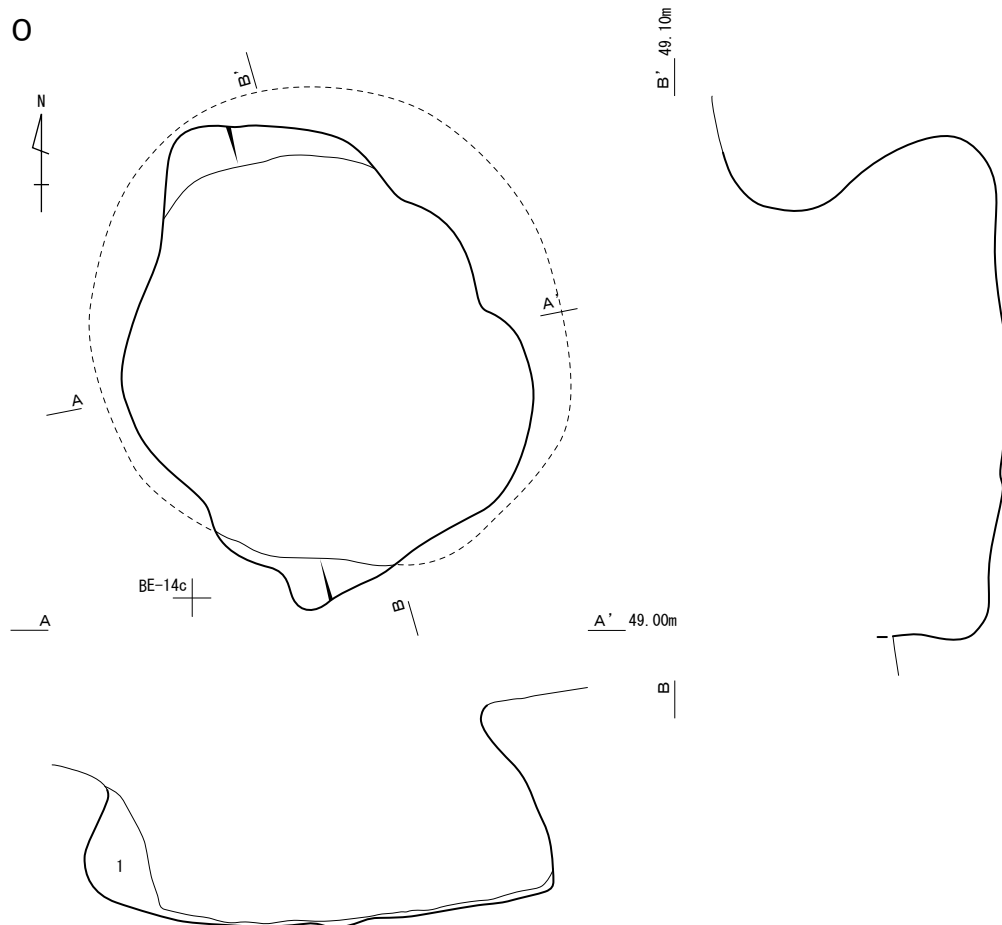
位置 調査区の西端B F - 16区に位置し、土坑62と重複する。新旧関係は不明である。また、土坑67を切って構築している。

遺構 平面形は北西 - 南東方向を長軸とする歪んだ長円である。規模は確認面で長径2.3m程、短径1.7m程、底面では径2.4m程、底面の面積は4.68㎡と44基の土坑の中ではもっとも大きい。確認面からの深さは90cm程で、底面はほぼ平坦である。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土を主体とし、9層に区分される。堆積状態は埋め戻された様相を呈している。

遺物 土坑内からは、剥片類4点が出土したのみである。

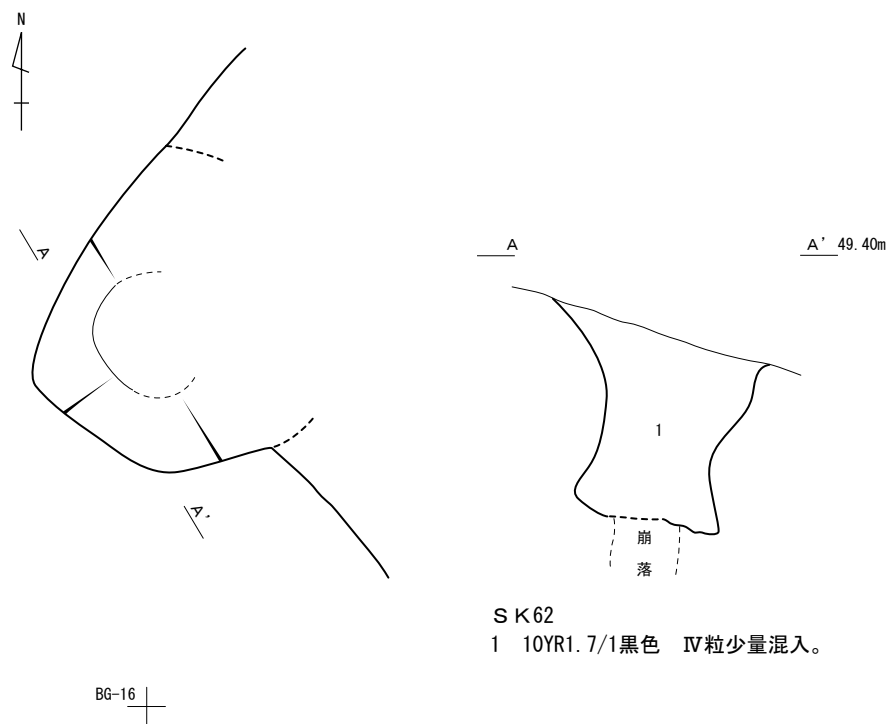
時期等 本土坑は、遺構の形態からみて、貯蔵穴と考えられる。時期は伴出遺物がなく不明である。

SK60

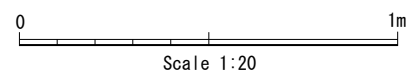


SK60
1 10YR1.7/1黒色 IV粒少量、パミス粒微量混入。締まりなし。粘性有り。

SK62

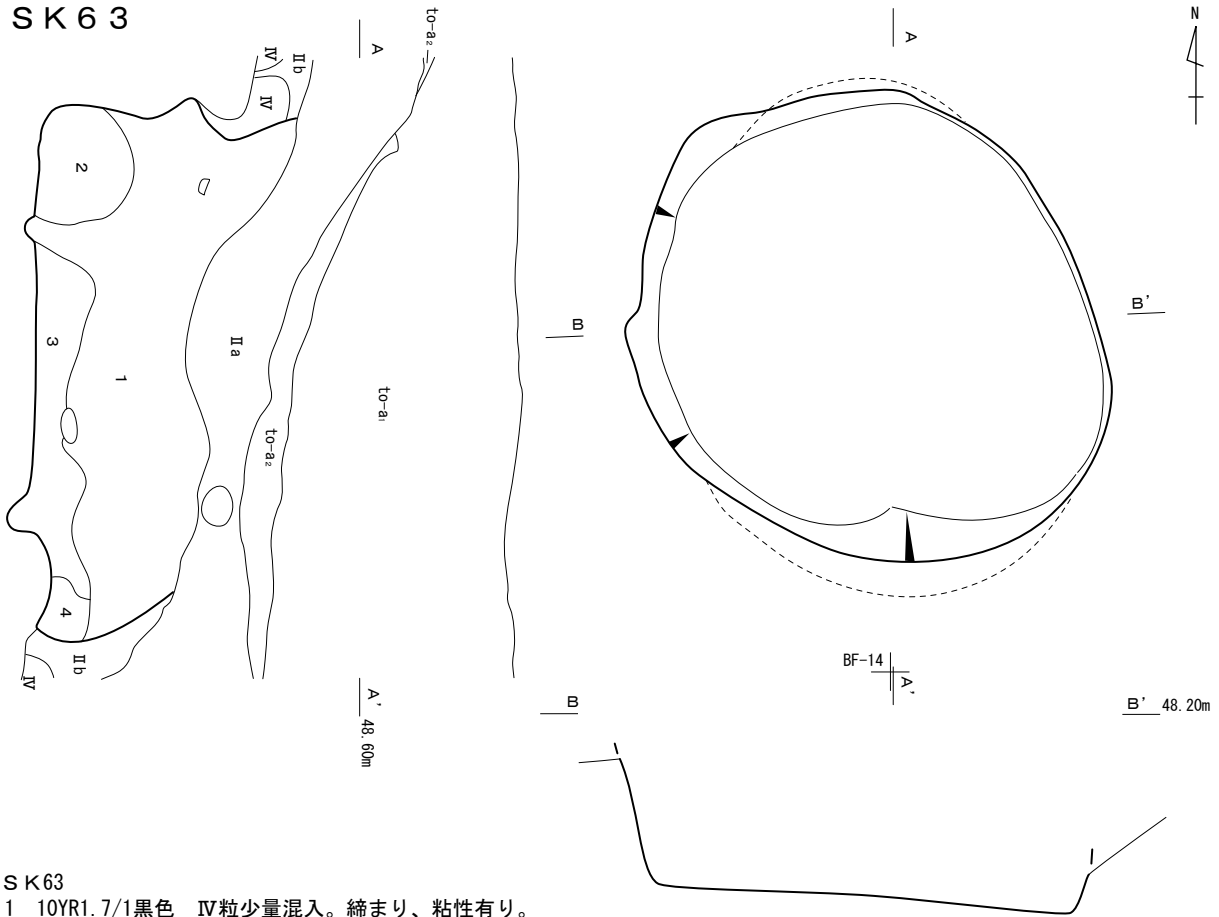


SK62
1 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。



第57図 土坑60・62

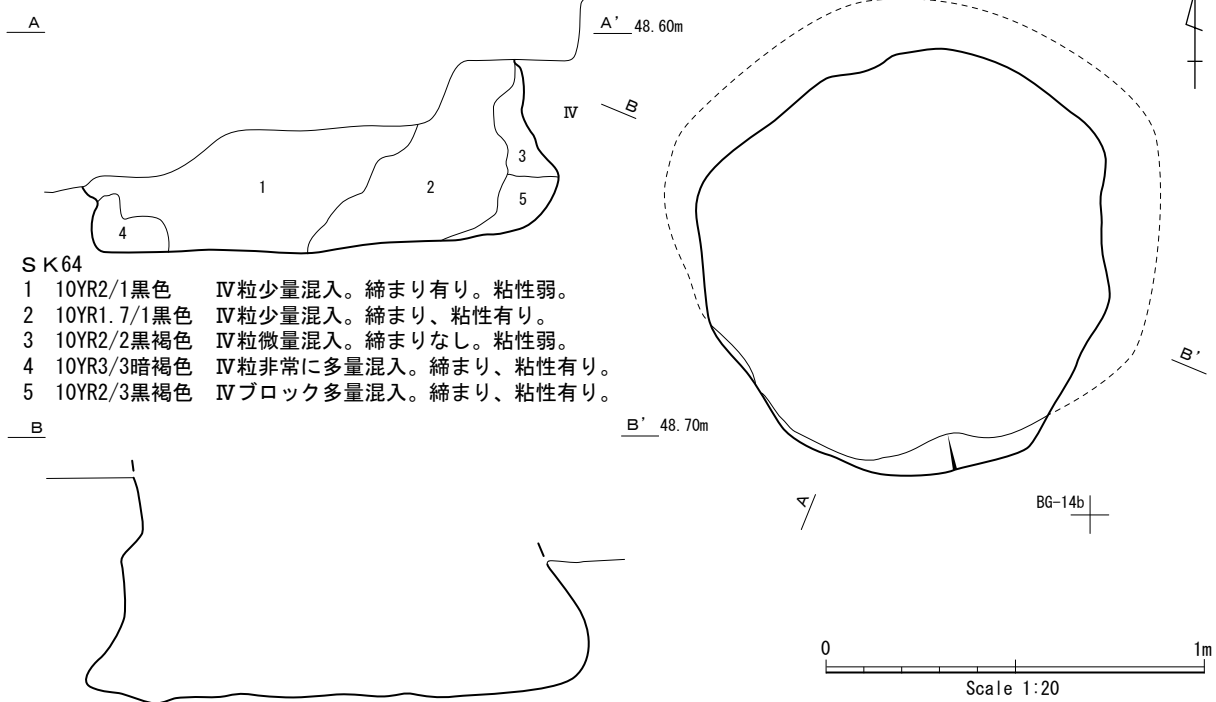
SK63



SK63

- 1 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。締まり、粘性有り。
- 2 10YR2/2黒褐色 IV粒非常に多量、IVブロック少量混入。締まりなし。粘性やや強。
- 3 10YR2/1黒色 IV粒少量混入。固く締まる。粘性やや強。
- 4 10YR5/6黄褐色 IV。
- to-a₁ 2.5Y5/3黄褐色 砂質。パミス(φ1~5mm)多量混入。非常に固く締まる。粘性なし。シラス二次堆積層。
- to-a₂ 2.5Y5/4黄褐色 砂質。パミス多量混入。粒子粗い。締まり有り。粘性なし。十和田a降下火山灰。

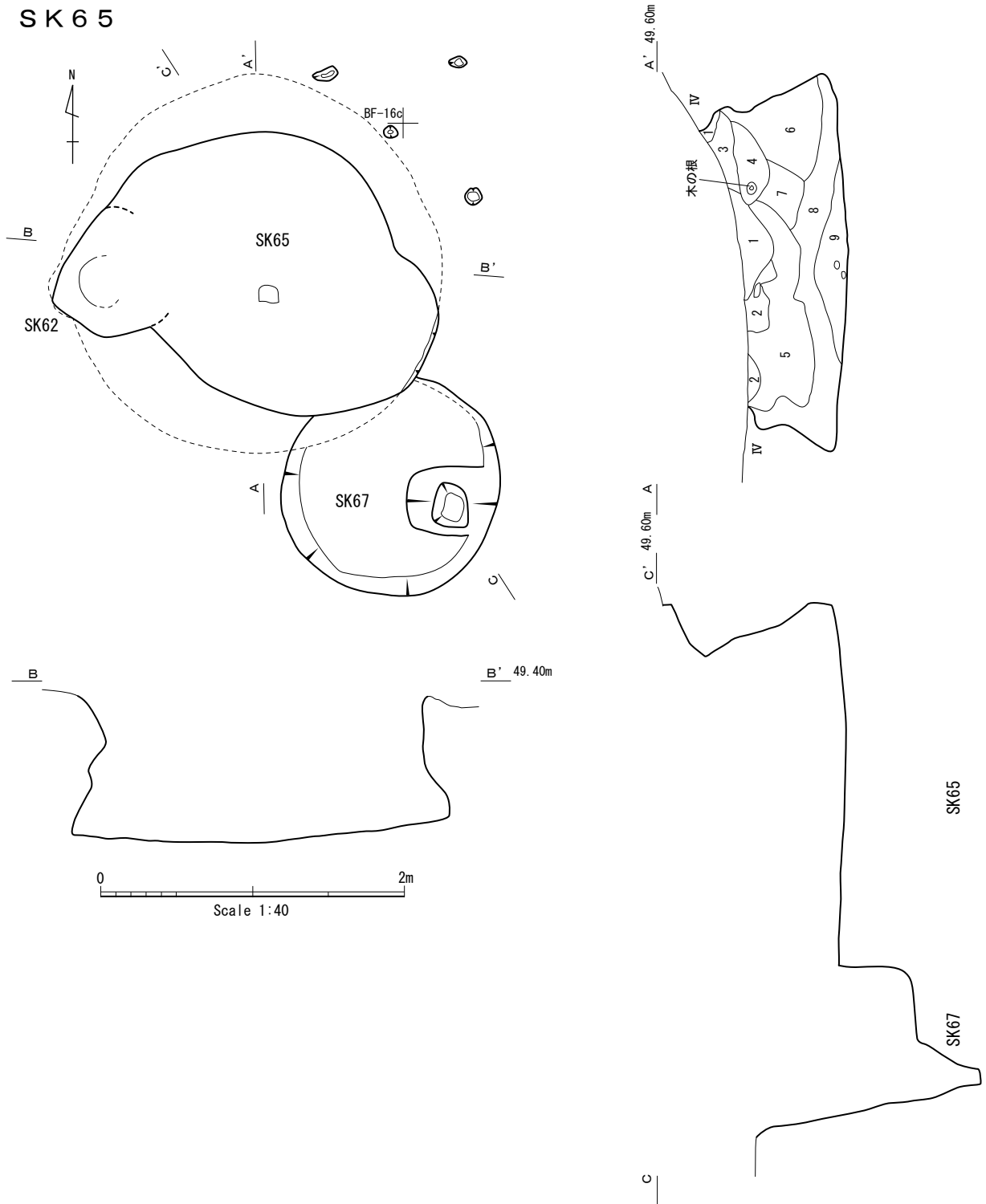
SK64



SK64

- 1 10YR2/1黒色 IV粒少量混入。締まり有り。粘性弱。
- 2 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。締まり、粘性有り。
- 3 10YR2/2黒褐色 IV粒微量混入。締まりなし。粘性弱。
- 4 10YR3/3暗褐色 IV粒非常に多量混入。締まり、粘性有り。
- 5 10YR2/3黒褐色 IVブロック多量混入。締まり、粘性有り。

第58図 土坑63・64



SK65

- 1 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。固く締まる。粘性有り。
- 2 10YR2/1黒色 IV粒少量混入。締まり有り。粘性弱。
- 3 10YR3/3暗褐色 IV粒。パミス(φ1~5mm)非常に多量混入。締まり、粘性なし。
- 4 10YR3/4暗褐色 IV主体。砂質。パミス(φ1~5mm)非常に多量混入。締まり、粘性なし。
- 5 10YR1.7/1黒色 IVブロック多量混入。締まり、粘性有り。
- 6 10YR2/3黒褐色 IV主体。砂質。パミス(φ1~5mm)非常に多量混入。締まり、粘性なし。
- 7 10YR2/2黒色 IV粒、パミス(φ1~5mm)多量混入。締まり有り。粘性弱。
- 8 10YR1.7/1黒色 IV粒、パミス(φ1~3mm)少量混入。締まり、粘性有り。
- 9 10YR2/3黒褐色 IV粒、パミス(φ3~5mm)少量混入。締まりなし。粘性強。

第59図 土坑65

土坑66 (第60図)

位置 調査区の中央部A X-16区に位置する。

遺構 平面形は北西-南東方向を長軸とする歪んだ長円である。規模は確認面で長径1.1m程、短径95cm、底面では径1.8m程、底面の面積は2.44㎡である。確認面からの深さは1.15mで、底面は中央側へと傾斜している。中央に底面ピットを有する。壁は全体的に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒色土を主体とし、6層に区分される。堆積状態は自然堆積とみなされる様相を示している。

遺物 土坑内からは、2群1点、5群5点の土器片と、1群3類1点、4類1点の石器、剥片類1点、計9点の遺物が出土した。第60図1は斜行縄文がつく2群土器口縁。2～5は5群土器。2は無文の口縁。3は胴部破片で、弥栄平(2)式とみられる。4・5は底部破片。6は石匙。7はUフレイク。石材はいずれも珪質頁岩。

時期等 出土遺物や遺構の形態からみて、5群土器期の貯蔵穴と考えられる。

土坑67 (第61図)

位置 前述した土坑65の南東側に重複して位置する。土坑65に切られている。

遺構 平面形は円を呈する。規模は確認面で径1.45m程、底面では径1.2m程、底面の面積は1.2㎡である。確認面からの深さは1.1m程で、底面は2段構造となっており、東側へと傾斜している。壁は急角度で立ち上がる。埋土は黒色土を主体とし、7層に区分される。堆積状態は、土砂が人為的に廃棄されて埋まっていった様相を示している。遺物は出土していない。

時期等 本土坑は前述のとおり、人為的に土砂が廃棄され、埋まっていったとみなされる土坑であり、このことが本土坑の用途を特定する鍵になるものと考えられる。時期は土坑65に切られていることからみて、5群土器期以前に属するものと考えられる。

土坑93 (第62・63図)

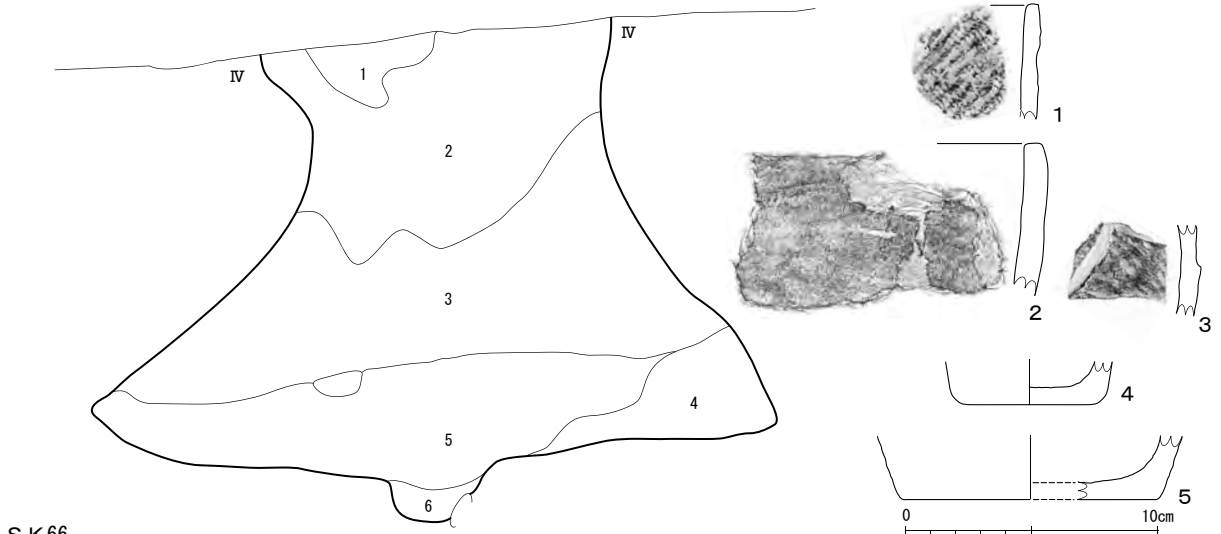
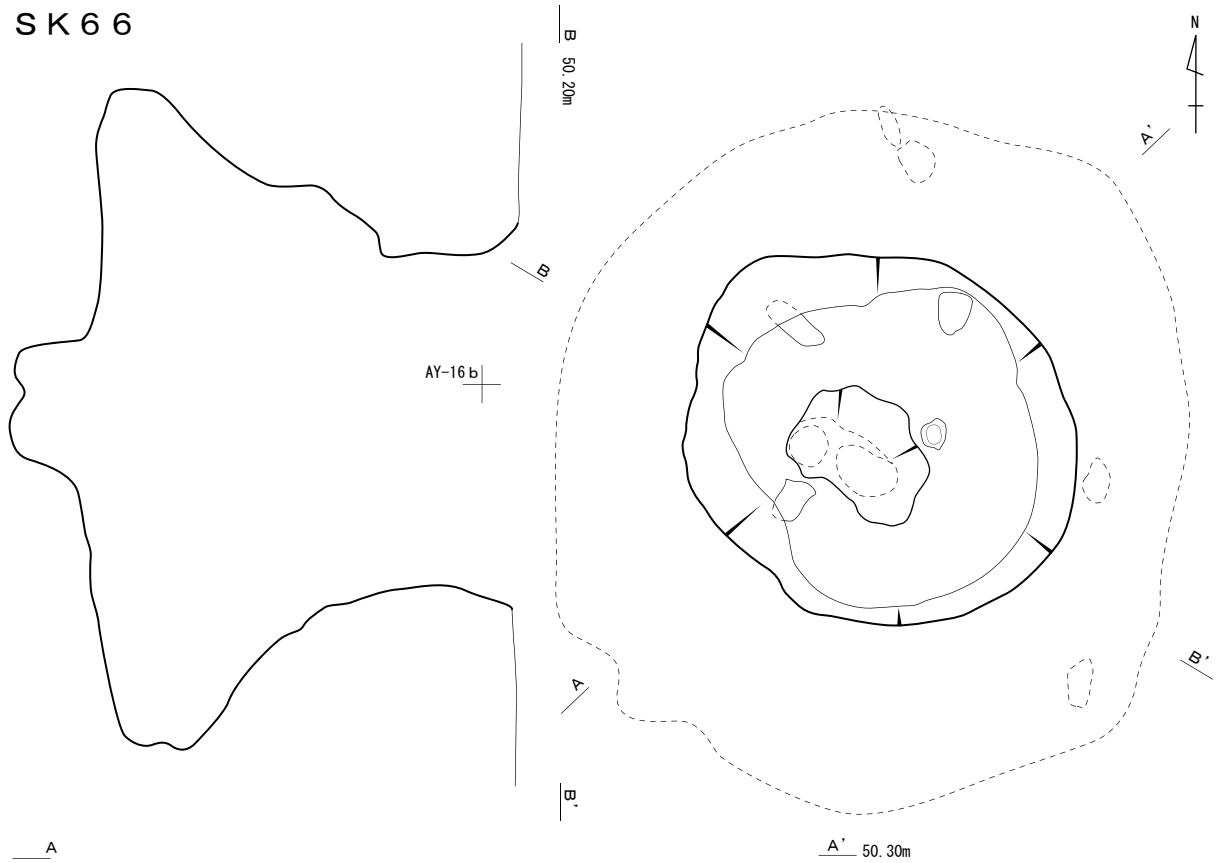
位置 調査区の東部A J-21区に位置する。

遺構 平面形は歪んだ円を呈する。規模は確認面で径90cm程、底面では径1.4m程、底面の面積は1.56㎡である。確認面からの深さは1.4m程で、底面は西側へと傾斜している。壁は全体に内側へオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。埋土は黒褐色土を主体とし、11層に区分される。堆積状態は自然堆積とみなされる様相を示している。

遺物 土坑内からは一括の円筒土器2個体が出土した。このほか、2群2点、3群3点、5群5点の土器片と、1群3類1点、4類1点の石器、剥片類6点、計18点の遺物が出土した。第63図1は口径28cm、器高31cm、底径14cm程の完形土器で、口縁部がわずかながら外反する器形である。口縁部には3条の縄線文がめぐり、縦位に4単位で2条の縄線文が施文される。胴上半部は結束羽状縄文、胴下半部は木目状撚糸文が施されている。2は口径22cm、器高36cm、底径12cm程の口径に比し器高が高い細身の円筒土器である。口縁部には2条の縄線文がめぐり、地文は結束羽状縄文である。3・4は3群土器胴部破片。5は削器の未製品。6はUフレイク。石材はいずれも珪質頁岩。

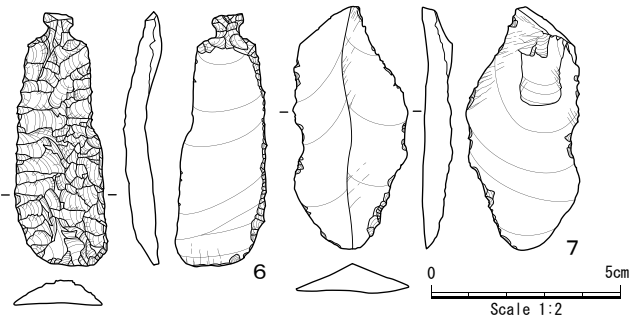
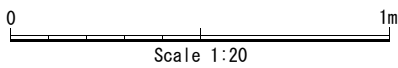
時期等 本土坑は、出土遺物や遺構の形態からみて、3群4類土器期の貯蔵穴と考えられる。

SK66



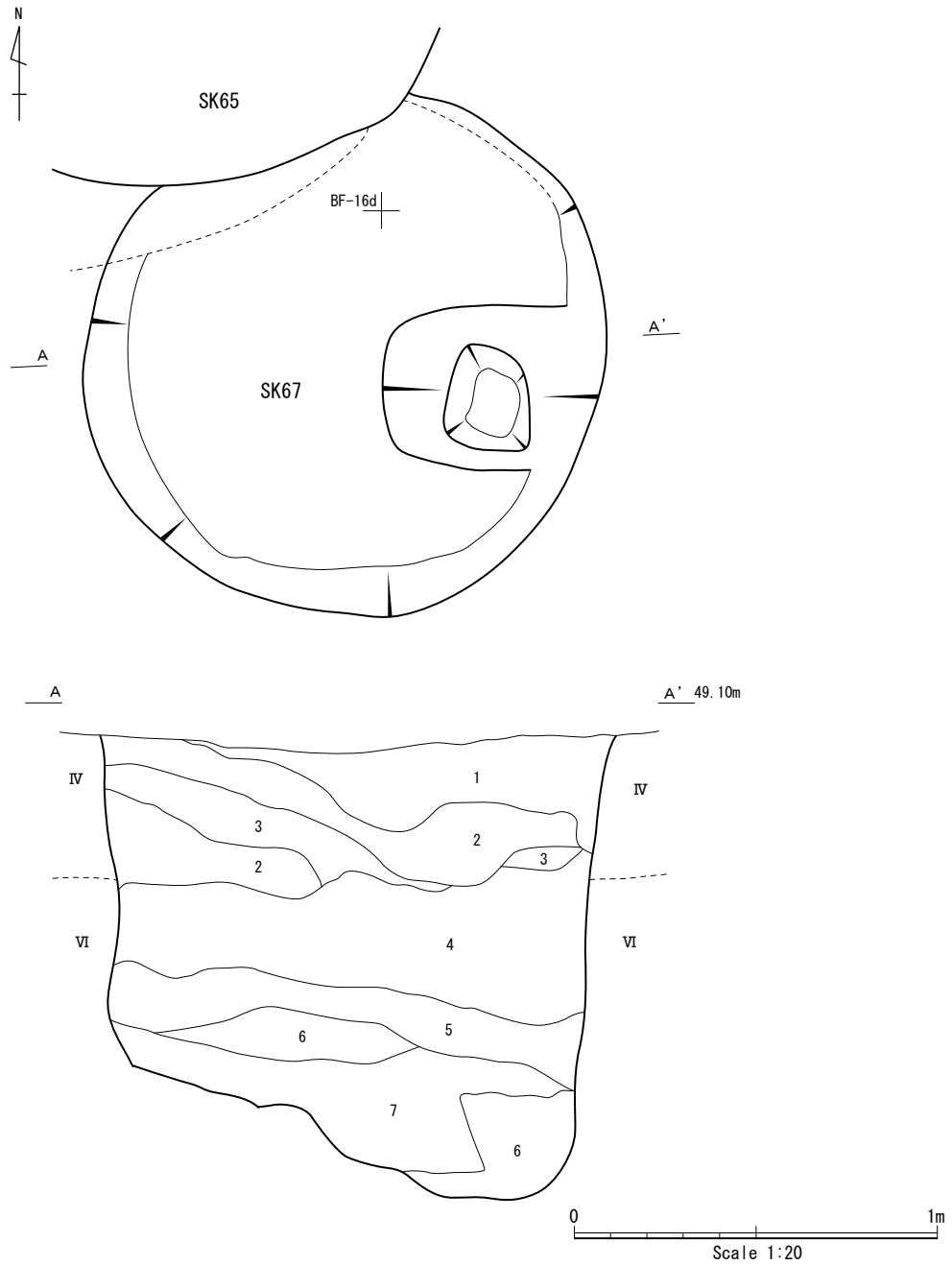
SK66

- 1 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。締まりなし。粘性弱。
- 2 10YR2/1黒色 IVブロック非常に多量混入。締まり、粘性有り。
- 3 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。締まりなし。粘性有り。
- 4 10YR1.7/1黒色 IV粒少量混入。締まり有り。粘性強。
- 5 10YR1.7/1黒色 IV粒微量混入。締まり有り。粘性強。
- 6 2.5Y2/1黒色 IV粒微量混入。締まり有り。粘性強。



第60図 土坑66と出土遺物

SK67

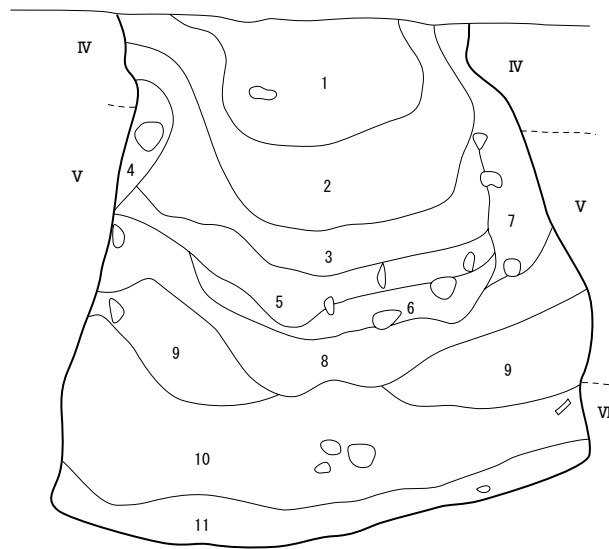
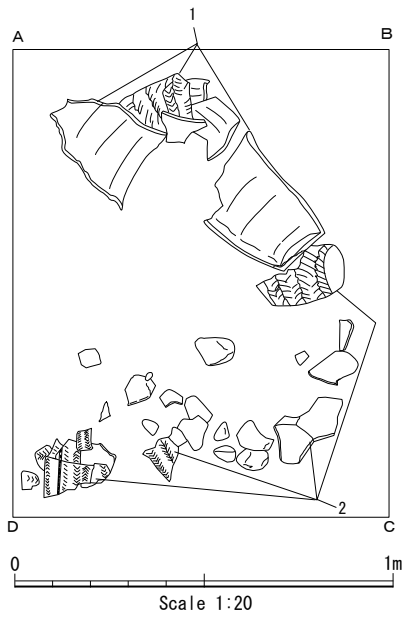
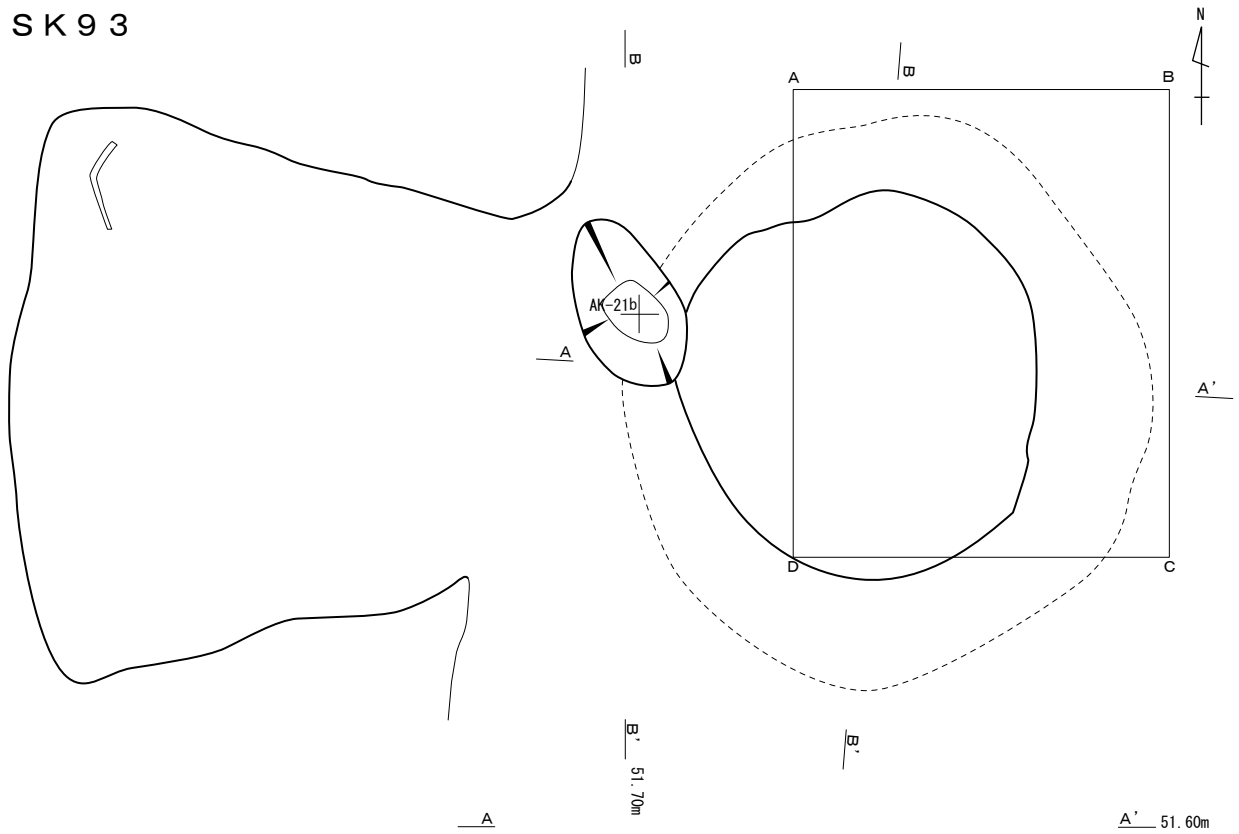


SK67

- | | | |
|---|--------------|------------------------------------|
| 1 | 10YR2/1 黒色 | IV粒非常に多量、パミス(φ2~5mm)少量混入。締まり、粘性なし。 |
| 2 | 10YR4/4 褐色 | IV。黒色土粒少量混入。締まりなし。粘性弱。 |
| 3 | 10YR1.7/1 黒色 | IV粒非常に多量、パミス(φ2~5mm)少量混入。締まり、粘性なし。 |
| 4 | 10YR2/1 黒色 | IVブロック、パミス(φ2~5mm)少量混入。締まり、粘性なし。 |
| 5 | 10YR1.7/1 黒色 | IV粒多量、パミス(φ1~3mm)少量混入。締まりなし。粘性有り。 |
| 6 | 10YR4/4 褐色 | IV。締まり、粘性有り。 |
| 7 | 10YR2/1 黒色 | IV粒多量、パミス(φ1~3mm)少量混入。締まりなし。粘性有り。 |

第61図 土坑67

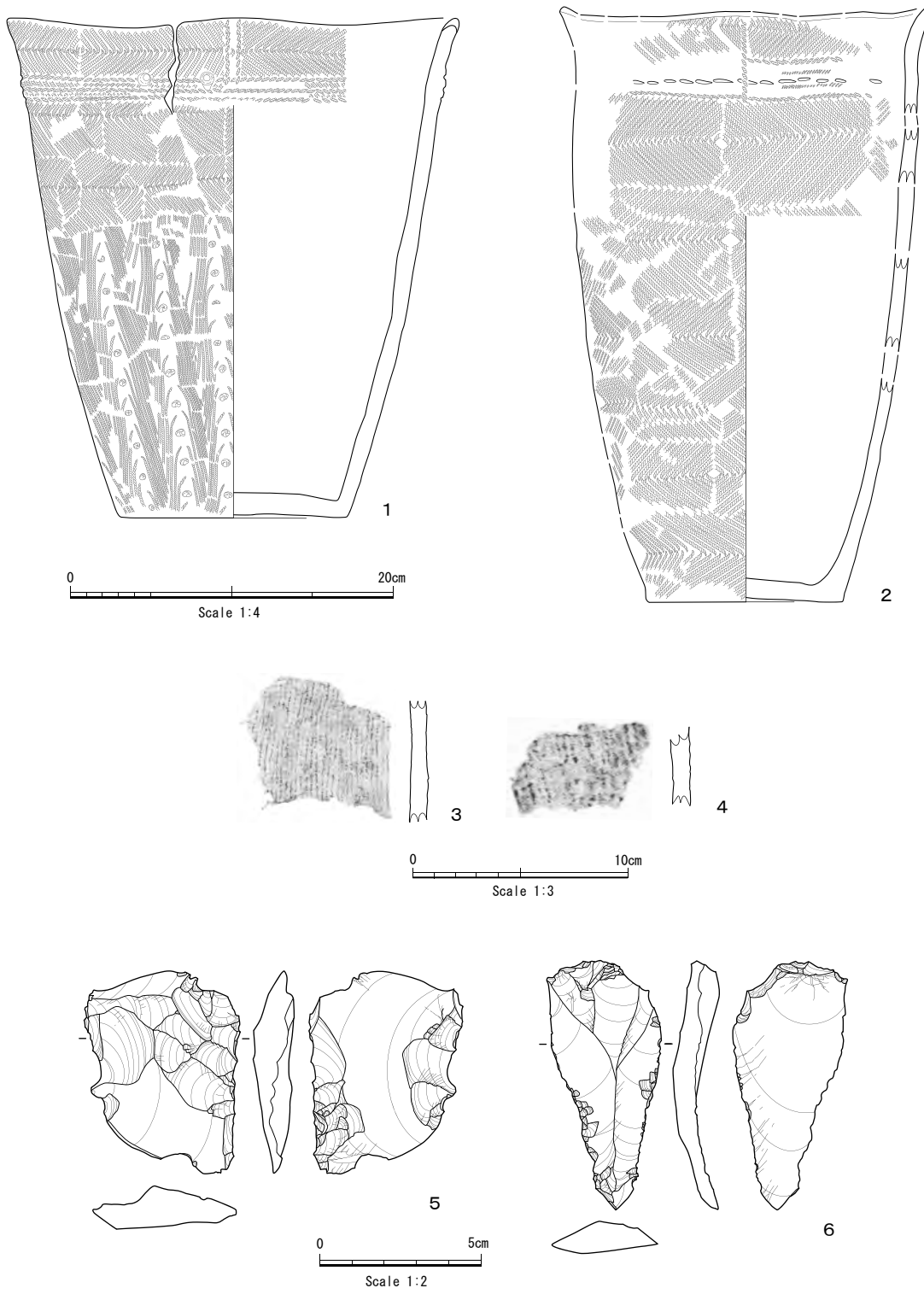
SK93



SK93

- | | | |
|----|--------------|---------------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1 黒色 | Ⅱ。灰色パミス(φ3mm)微量混入。締まりよし。粘性有り。 |
| 2 | 10YR2/1 黒色 | 炭化物。灰色パミス(φ5mm)微量混入。固く締まる。粘性有り。 |
| 3 | 10YR1.7/1 黒色 | Ⅱ。固く締まる。粘性有り。 |
| 4 | 10YR3/2 黒褐色 | V。円礫混入。締まり弱。粘性有り。 |
| 5 | 10YR3/1 黒褐色 | Ⅲ。砂質。固く締まる。粘性弱。 |
| 6 | 10YR4/4 褐色 | Ⅳ。砂。締まり有り。粘性なし。 |
| 7 | 10YR2/2 黒褐色 | V。締まり、粘性有り。 |
| 8 | 10YR1.7/1 黒色 | 固く締まる。粘性有り。 |
| 9 | 10YR3/2 黒褐色 | V。締まり、粘性有り。 |
| 10 | 10YR3/1 黒褐色 | V。締まり、粘性有り。 |
| 11 | 10YR3/2 黒褐色 | 締まりよし。粘性有り。 |

第62図 土坑93

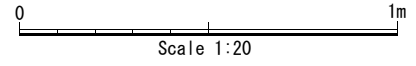
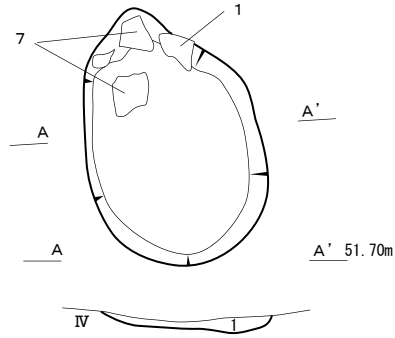


第63図 土坑93出土遺物

SK95

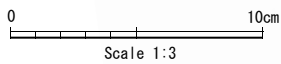
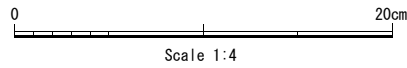
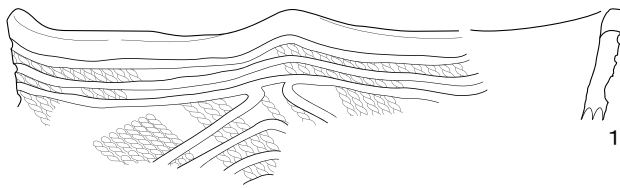


A0-20



SK95

1 10YR2/2黒褐色 IV粒微量混入。固く締まる。粘性有り。



第64図 土坑95と出土遺物(1)

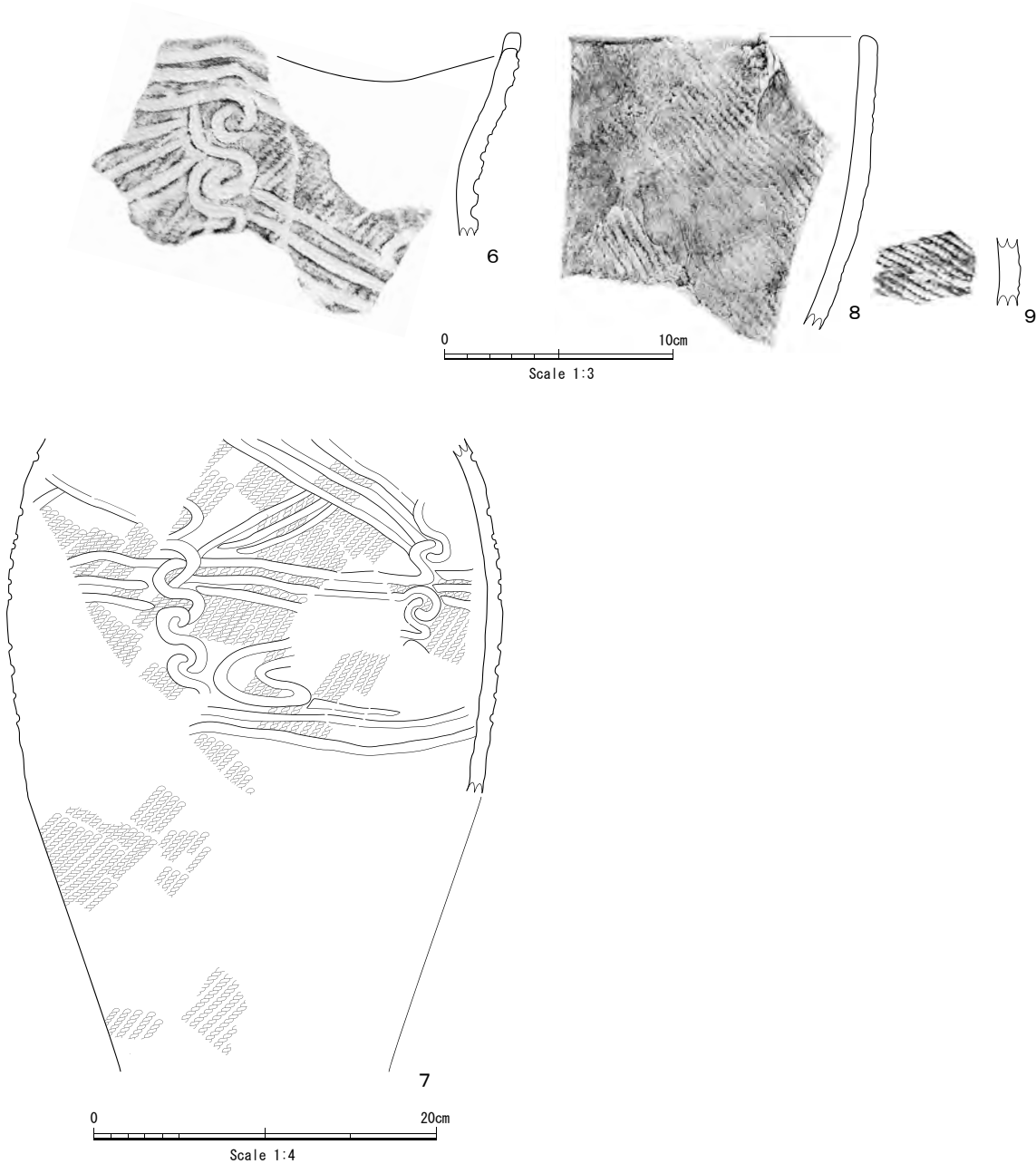
土坑95 (第64・65図)

位置 調査区の東部AN-19区に位置する。

遺構 平面形は南北方向を主軸とする歪んだ長円である。規模は確認面で長径70cm程、短径45cm程、底面では長径55cm程、短径40cm程で、底面の面積は0.16㎡である。埋土は黒褐色土1層のみである。

遺物 土坑内からは、2個体分に相当する5群1類土器の一括土器が得られたほか、1点が出土した。第64図は同一個体とみられる土器。口径35cm。緩やかな波状口縁で、口縁部および胴上半部には、曲線の沈線文が描かれている。第65図6・7は同一個体とみられる。緩やかな波状口縁で、口縁部および胴上半部には3本組の並行する沈線文の上に、S字状の沈線文が縦に連続して描かれる。8は口縁部。9は胴部破片。

時期等 出土遺物や埋土の堆積状態から用途を特定する手がかりは得られていない。時期は5群1類土器期に属するものと考えられる。



第65図 土坑95出土遺物(2)

土坑110 (第66図)

位置 調査区の中央北端A X - 18区に位置する。調査範囲外に一部かかるため規模は不明である。

遺構 西半部は調査区外に拡がっており、平面形は不明である。規模は確認部分で径1.6m程、底面では径1.5m程である。確認面からの深さは30cm程、底面は西へと傾斜する。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土を主体とし、4層に区分される。遺物は出土していないため、時期や用途を特定する手がかりは得られていない。

土坑44 (第67図)

位置 調査区の西部B B - 16区に位置する。

遺構 平面形は円を呈する。規模は確認面で径1.7m程、底面では径1m程で、底面の面積は0.87㎡である。確認面からの深さは1.1m程である。底面は平坦である。壁は急角度で立ち上がる。埋土は黒色土を主体とし、12層に区分される。

土坑の上部は破損。幅10～20cm内外、厚さ3cm、確認される長さ90cmを測る板で、径1.1mの側を作る。底は標高48.7m、底板が敷かれている。底板の厚さは5cmである。底板の下には粘土が充填されており、水漏れを防いでいる。

遺物 近代のガラスや櫛などが出土したほか、1群4類1点の石器、剥片類3点の遺物が出土した。

時期等 ガラスなどが出土していることからみて、近代以降の肥溜め等の施設と考えられる。

(4) その他の遺構

1) 柱穴列

柱穴列18 (第68図)

位置 調査区の東端A I - 22・23区に位置する。

遺構 3間の杭列である。長さ3.4m、柱間寸法は北から0.6m・1m・1.6mで、方位はN-37°-Eである。柱掘方は径30～40cmの円～楕円形で、深さは10cm前後である。遺物は出土せず、時期も不明である。

柱穴列92 (第68図)

位置 調査区の西部B B・B C - 17区に位置する。

遺構 2間の柵である。長さ3.8m、柱間寸法は東から1.8・2mで、方位はN-88°-Eである。柱掘方は径20～28cmの円～楕円形で、深さ12～40cmを測る。埋土は黒色土である。本柵列は調査区外へのびて掘立柱建物になる可能性がある。遺物は出土せず、時期も不明である。

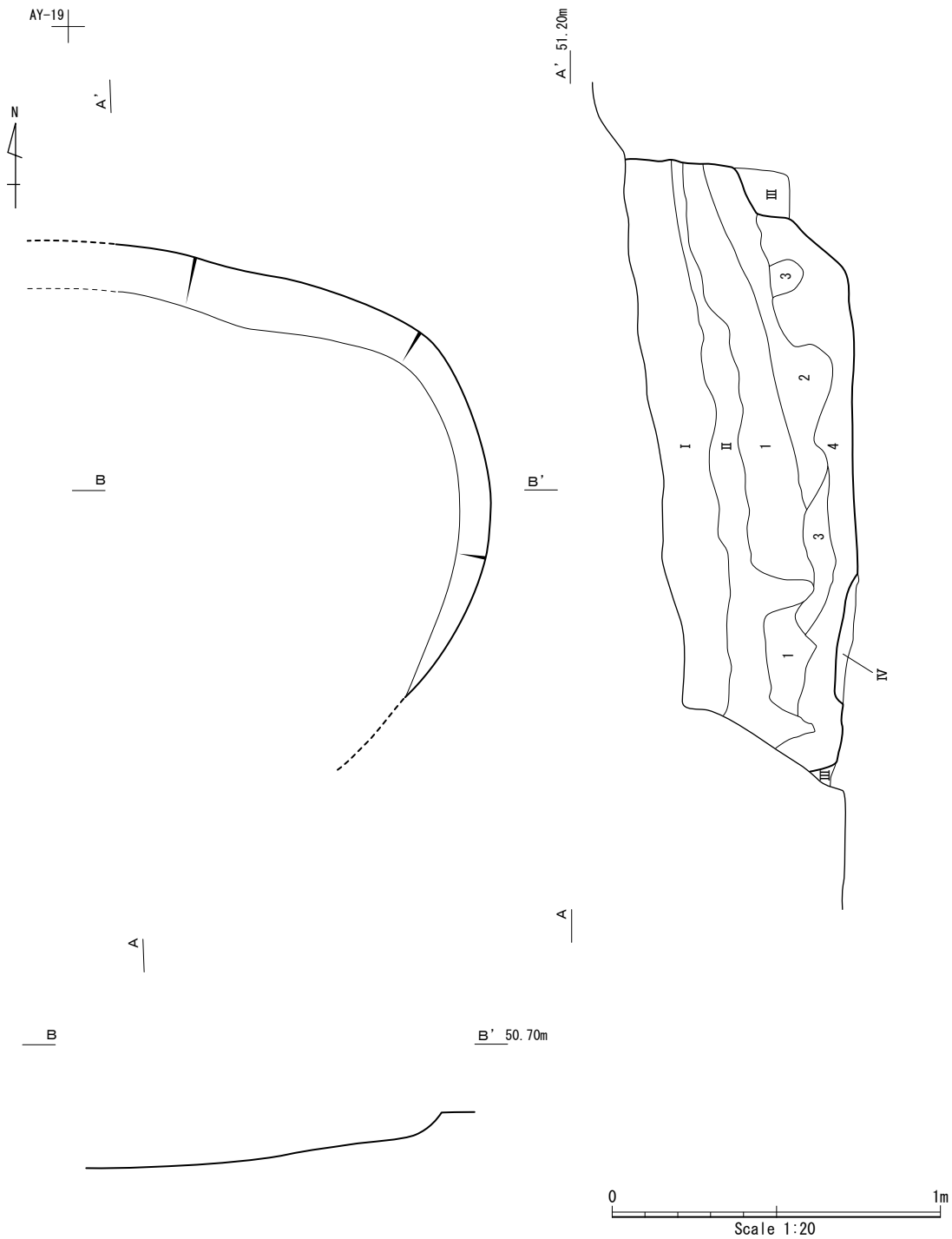
2) 土器埋設遺構

土器埋設遺構35 (第69図)

位置 調査区の東部A N - 17区に位置する。IV層において確認した

遺構 掘方は不整な円形を呈し、23×21cmを測る。深さは土器最高面から最低面まで15cmを測る。埋土は掘方を含め、2層に区分される。土器内部と掘方は黒色土が堆積する。

SK110

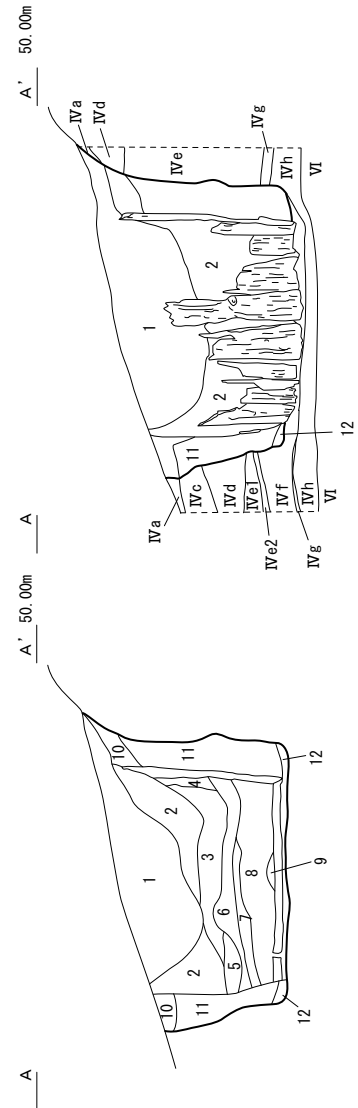
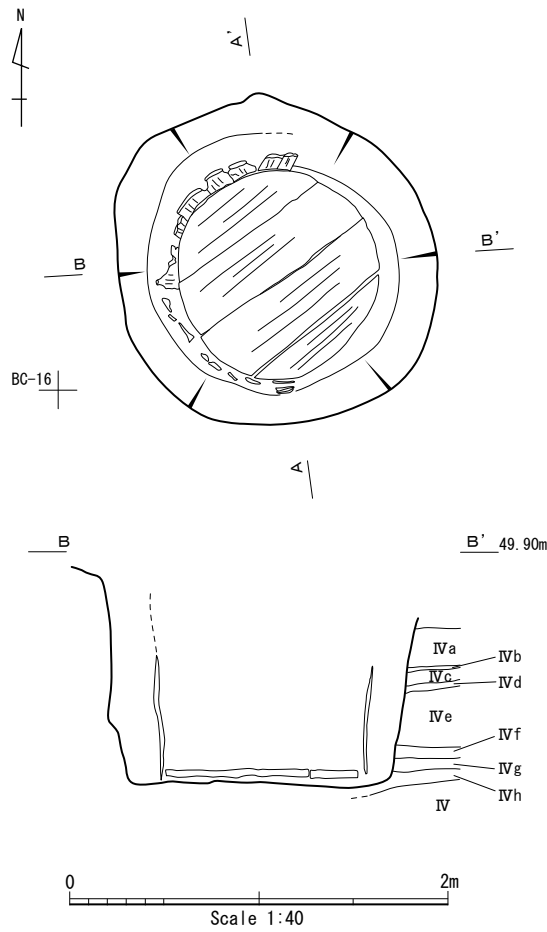


SK110

- | | | |
|---|---------------|---|
| 1 | 10YR2/2黒褐色 | シルト。IIブロック、パミス(φ1~3mm)微量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 2 | 10YR2/2黒褐色 | シルト。IIブロック、パミス(φ2~4mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 3 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | シルト。II。4まだらに混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 4 | 10YR3/2黒褐色 | シルト。IIブロック、炭化物微量混入。パミス(φ1~5mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。 |

第66図 土坑110

SK 44

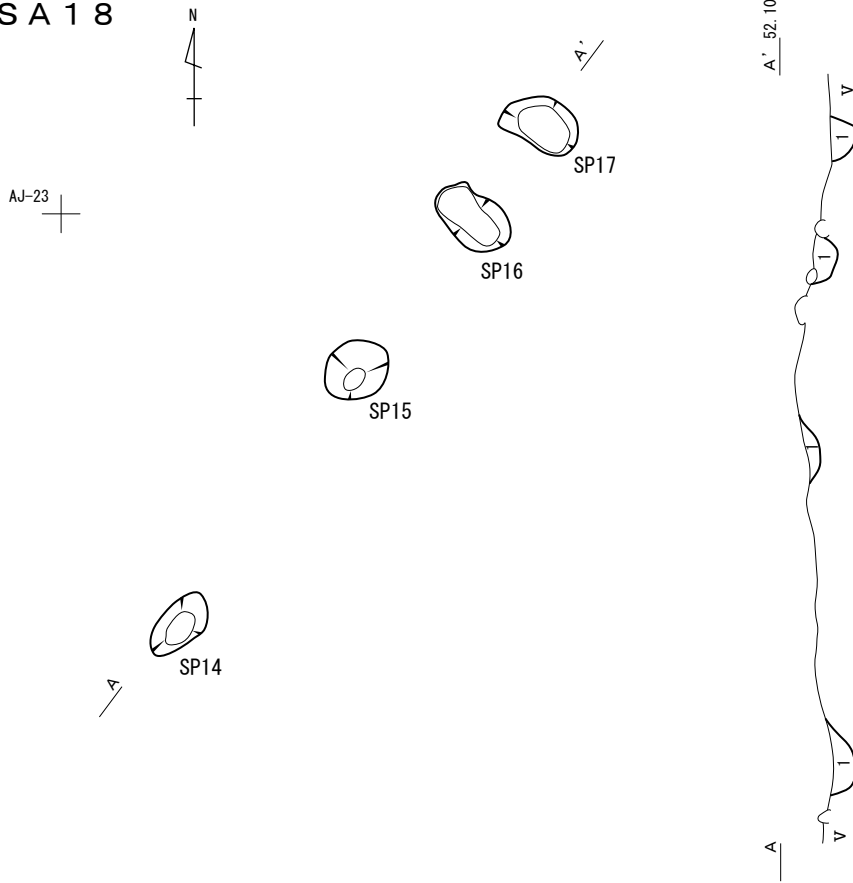


SK 44

- | | | |
|-----|----------------|----------------------------------|
| 1 | 10YR2/2黒褐色 | 砂質。IVブロック微量混入。柔らかい。粘性有り。 |
| 2 | 10YR1. 7/1黒色 | パミス(φ1~4mm)微量混入。柔らかい。粘性有り。 |
| 3 | 10YR2/1黒色 | 柔らかい。IVブロック微量混入。粘性有り。 |
| 4 | 10YR2/1黒色 | 締まり弱。粘性有り。 |
| 5 | 10YR1. 7/1黒色 | 柔らかい。粘性有り。 |
| 6 | 10YR2/1黒色 | 柔らかい。IVブロック微量混入。粘性有り。 |
| 7 | 10YR1. 7/1黒色 | 締まり、粘性有り。 |
| 8 | 10YR2/1黒色 | 砂質。パミス(φ10mm)微量混入。柔らかい。粘性有り。 |
| 9 | 10YR1. 7/1黒色 | 締まりよし。粘性弱。 |
| 10 | 10YR2/2黒褐色 | 締まりなし。粘性弱。 |
| 11 | 10YR3/3暗褐色 | 礫(φ40~50mm)多量混入。IV主体。締まりなし。粘性なし。 |
| 12 | 5Y2/1黒色 | 粘土。柔らかい。粘性強。 |
| IVa | 2. 5Y4/4オリーブ褐色 | 砂。粒子φ1mm以下。締まりよし。粘性なし。 |
| IVb | 7. 5YR3/4暗褐色 | 砂。炭化物含む。締まり有り。粘性なし。 |
| IVc | 10YR5/6黄褐色 | 砂質。粒子φ2~3mm 締まり有り。粘性なし。 |
| IVd | 2. 5Y5/2暗灰黄色 | 砂。粒子φ1mm以下 固く締まる。粘性なし。 |
| IVe | 10YR5/6黄褐色 | 砂。締まりよし。粘性なし。 |
| IVf | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 砂。締まりよし。粘性なし。 |
| IVg | 5YR2/4極暗赤褐色 | 固く締まる。粘性なし。 |
| IVh | 10YR5/6黄褐色 | 締まり有り。粘性弱。 |
| VI | 7. 5YR5/6暗褐色 | 粘土質。柔らかい。粘性有り。湿っている。 |

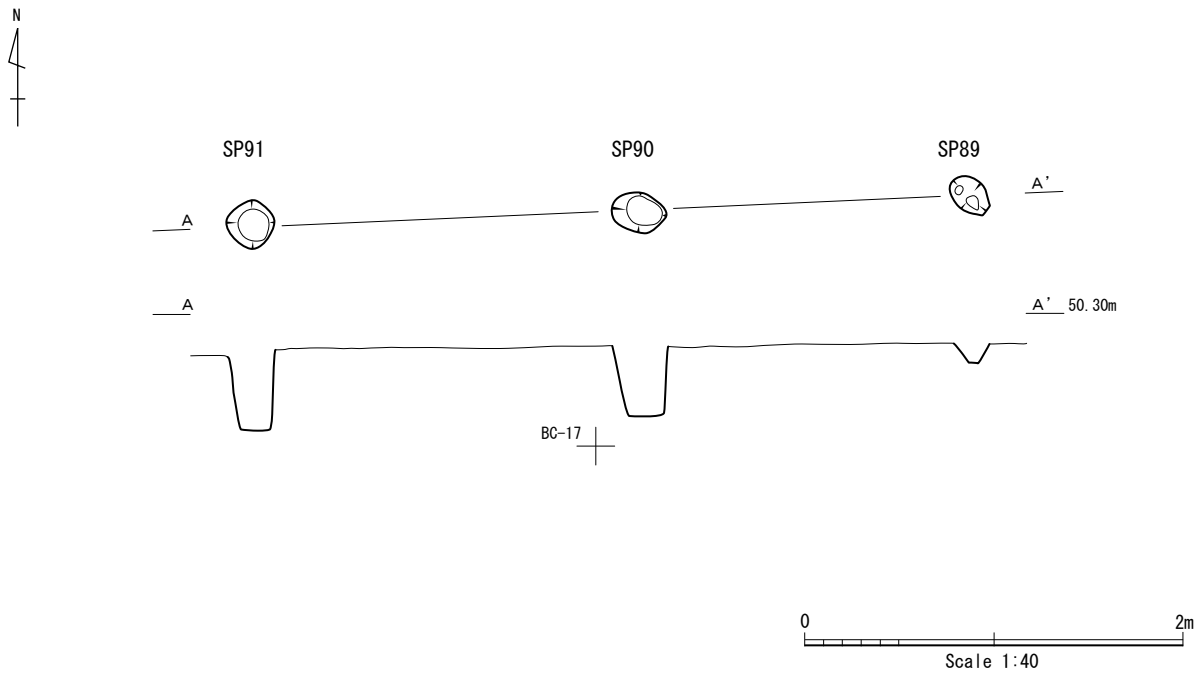
第67図 土坑44

SA18



SA18
1 10YR2/2黒褐色 Vの礫非常に多量混入。締まりなし。粘性弱。

SA92



第68図 柱穴列18・92

遺物 3群に属する深鉢形土器が正立した状態で埋設されていた。第69図1の底縁は張り出しのないタイプである。

時期等 子供の墓と想定できるが、土器内部からは遺物は出土していない。時期は3群土器期である。

土器埋設遺構36（第69図）

位置 調査区の東部A O - 17区に位置する。II層において確認した。

遺構 掘方は不整な円形を呈し、25×25cmを測る。深さは、土器最高面から最低面まで37cmを測る。掘方は黒色土が堆積する。

遺物 3群4類に属する深鉢形土器が正立の状態に埋設されていた。第69図2は復元土器である。口縁部に縄線文が施されており、口端の断面は丸くおさまる。地文は口縁～胴上半部が結束羽状縄文、胴下半部は撚糸文である。

時期等 子供の墓と想定できるが、土器の中からは遺物は出土していない。時期は3群4類土器期である。

土器埋設遺構46（第69図）

位置 調査区の中央部A V - 17区に位置する。IV層において確認した。

遺構 掘方は不整な楕円形を呈し、27×26cmを測る。深さは、土器最高面から最低面まで15cmを測る。掘方を含め2層に区分される。土器内部および掘方は黒色土が堆積する。

遺物 3群に属する深鉢形土器が正立の状態に埋設されていた。土器底部には礫が2個置かれていた。第69図3～5は本遺構の土器である。3・4の口端は尖り気味であり、口縁には縄線文が施されている。5は底縁が「く」の字に小さく張り出す。

時期等 子供の墓と想定できるが、土器の中からは遺物は出土していない。出土土器より3群土器期とみなされる。

3) 焼土

調査区内から3カ所の焼土が検出された。これらは、いずれも礫を伴っており、屋外炉ではなく、他の住居跡と同様に、本来は住居に伴うものであった可能性が高い。焼土94・112はII層に分布することから、縄文期の所産と考えたものである。

焼土8（第70図）

位置 調査区の北東部A J - 23区に位置する。

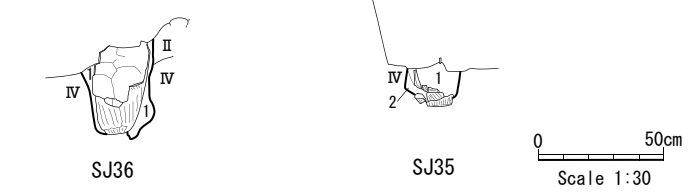
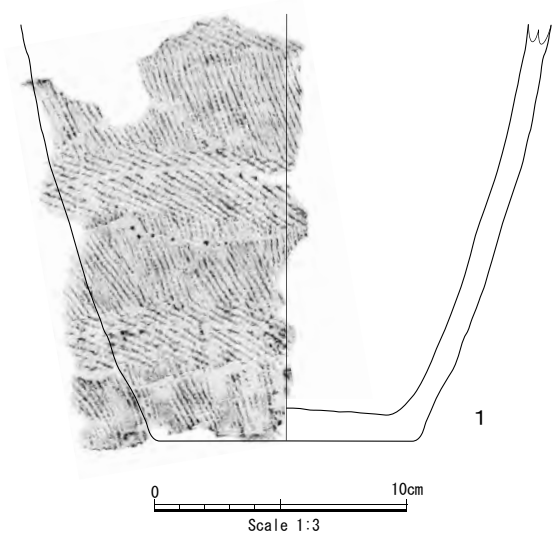
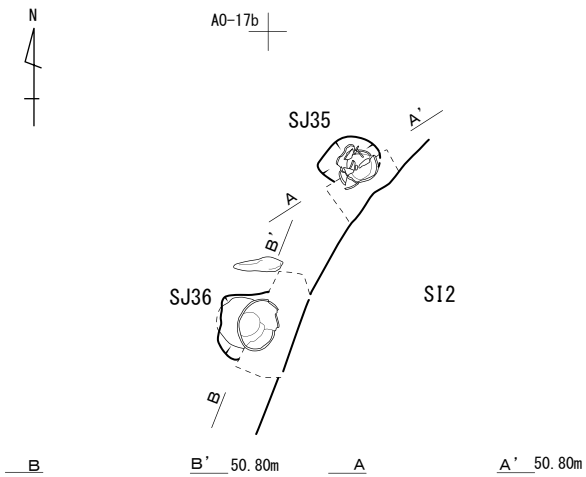
遺構 径55×35cm程の細長い範囲に分布する。上面は削平されており、焼土の厚さは10cm程で、炭化物や灰などはない。西側に礫が1個検出された。他の焼土と同様、石組をもっていた可能性がある。遺物はない。

焼土94（第70図）

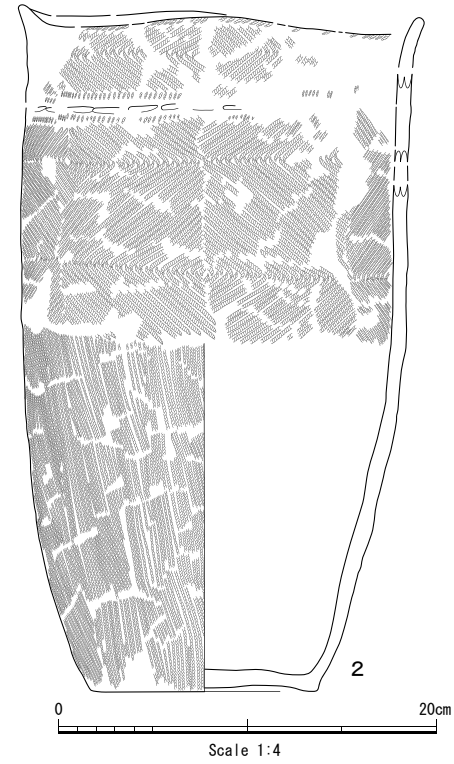
位置 調査区の西部A Y - 17区に位置する。

遺構 焼土そのものは確認されていないが、被熱した石組が径70×30cm程の細長い範囲に分布しており、焼土とした。焼土や炭化物、灰などはない。礫が弧状に組まれており、円形をなしていたものと

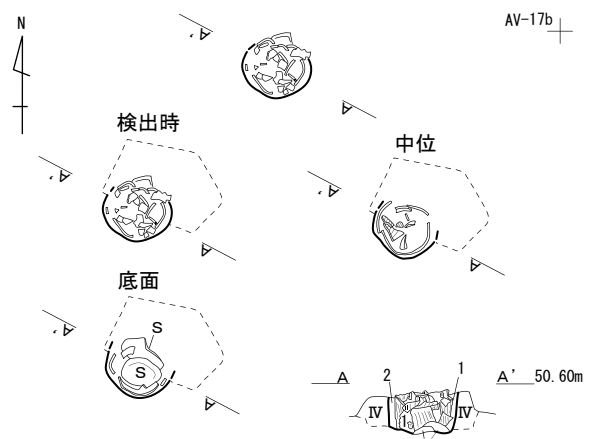
S J 35・36



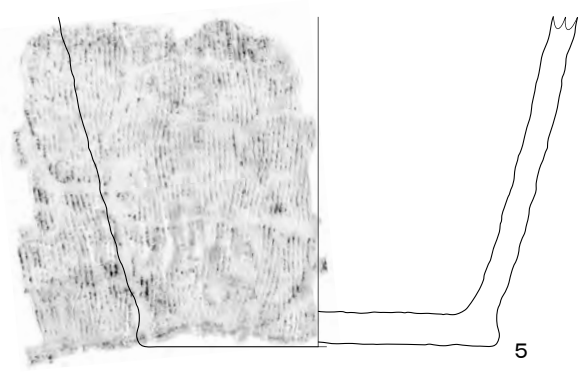
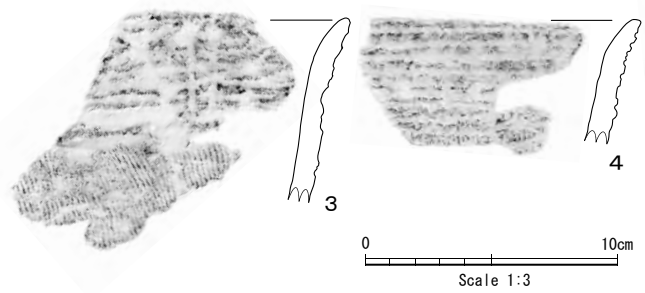
- S J 35
 1 10YR2/1黒色 IV粒少量混入。締まり、粘性有り。
 2 10YR2/1黒色 IVやや多量混入。締まり有り。粘性弱。
- S J 36
 1 10YR2/1黒色 IV粒パミス(φ2~3mm)少量混入。締まり有り。粘性弱。



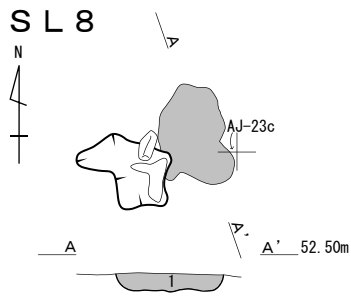
S J 46



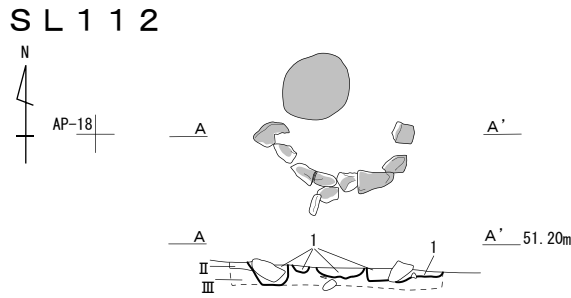
- S J 46
 1 10YR1.7/1黒色 締まり弱。粘性有り。
 2 10YR2./1黒色 締まり、粘性有り。



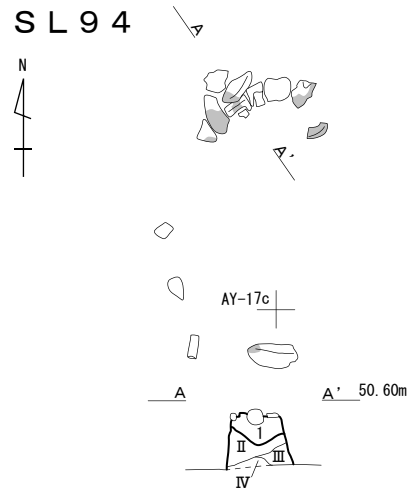
第69図 土器埋設遺構35・36・46と出土遺物



SL 8
1 7.5YR6/6橙色 締め有り。粘性なし。

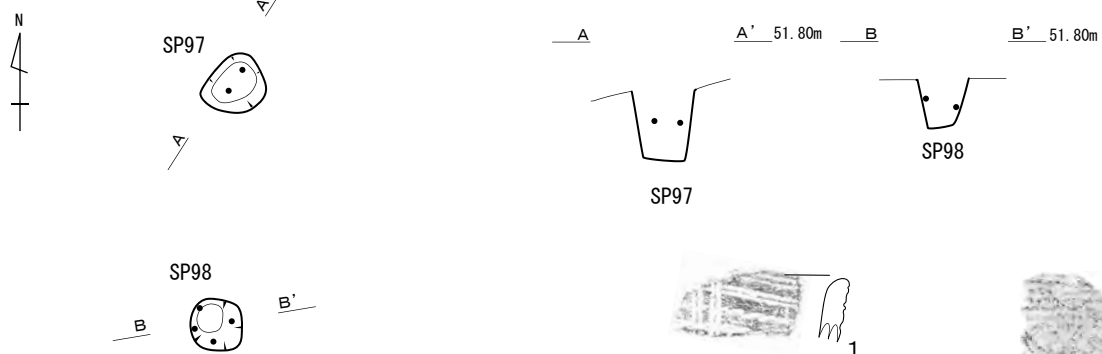


SL 112
1 10YR3/2黒褐色 IIb. パミス(φ1~2mm)微量混入。締めよし。粘性弱。



SL 94
1 10YR1.7/1黒色 II。締めよし。粘性有り。

SP 97・98



AK-24

52.20m

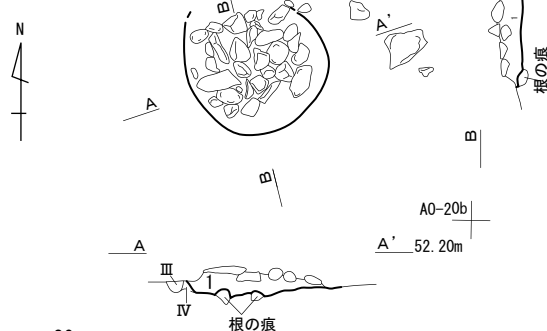
B'

B

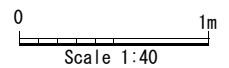
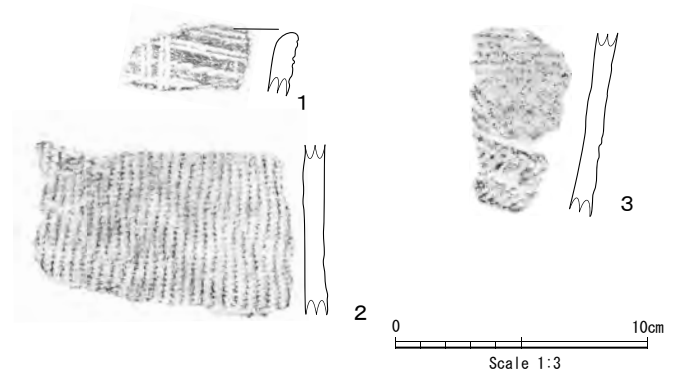
AO-20b

52.20m

SS 39



SS 39
1 10YR3/2黒褐色 III。白色パミス(φ1~2mm)微量混入。固く締まる。粘性弱。



第70図 焼土8・94・112、柱穴97・98と出土遺物、集石39

推測される。弧状をなす石組の内側は被熱して、赤色化している。遺物はない。

焼土112（第70図）

位置 調査区の東部A O - 17・18区に位置する。竪穴住居21の調査後、Ⅱ層を掘り下げたところ、半円形をなす石組を確認した。石組の北側半分は誤って取り上げてしまったようである。

遺構 焼土は径35cm程の円形の範囲に分布する。焼土の厚さは5cm程で、炭化物や灰などはない。遺物はない。

4) 柱穴様ピット

柱穴様ピットは調査区全域より検出されている。検出状況には規則的な配列や、規模の斉一性もなく、ほとんど建物跡を復元することは出来なかった。

柱穴97・98（第70図）

位置 調査区の北東部に位置する。両者の間隔は1.2m程離れている。

遺構 平面形ともに円形を呈する。規模は97が確認面で径30cm、底面で径25cm程、98が確認面で径34cm、底面で12cm程である。確認面からの深さは97が39cmと深いのに対し、98は26cmとやや浅い。底面は97が平坦になっているのに対し、98は傾斜する。

遺物 97からは3群土器3点、98から3群土器3点が出土した。第70図1は口縁、2・3は胴部破片である。

時期等 柱穴様ピット97の北側に柱穴様ピット96が位置していることから、3群期の竪穴建物が存在していた可能性が考えられる。しかしながら、調査区北東部は削平を受けていたため、不詳である。

5) 集石

集石39（第70図）

位置 調査区の東部北端A O - 20区に位置する。

遺構 Ⅳ層上面に張り付く平坦な形で確認された。規模は長径73cm、短径70cm程であるが、北側は調査区外へ広がる。礫は5～20cm大で総数40点程出土した。それらはほとんど上下に重なり合う状態にはなかった。浅い掘り込みはあるものの、ほかに下部構造は確認されなかった。ほかに遺物は出土していないため、時期や用途などは不明である。